
IS インフィニットストラトス 現をいくもの

U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス 現をいくもの

【Zコード】

Z9997T

【作者名】

U

【あらすじ】

普通の少年がいくつもの偶然からISを起動させ、それがきっかけで狂い出す人生。

翻弄され、人との関わりを拒み、人生に諦めていた少年が、ある少女の一言がきっかけで再び人に関わることを考え、そして新たな道に向かって歩いていく物語

転機（前書き）

ईのある世界でじこにでもいる学生にある人生の転機がおどずれ、その転機から理想と現実の差を知り、大人の汚さ、暗さに失望し、他者とのかかわりを求めなくなつた少年が、人とのふれあいでもう一度人とかかわっていく物語

本作品が初執筆作品につき誤字脱字他もうもろたくさん出でくると思いますが生暖かい目で読んでもらえたら幸いです。

タイトルは適当ですので内容とあつてなくとも無視してください。
それではよろしくお願いします

人生は残酷である

多くの人は自分が主人公ではなく、他人が主人公の世界を彩る小さなピースでしかない。

だが人生において分岐点は突然やつてくる。

それが小さな分岐ではさほど変わらないだろう。

今日の朝たべたのは、パン？ご飯？そんなことで行き着き先に大差はない。

しかし、そんな些細な分岐点でも複数重なれば？その中の一つが大きなものだつたら？

行き着く先は変わるかもしない。

だが、その分岐が変わる音は世界の誰も聞くことができない。

『力チャ・・・・』

分岐点を迎えた先がいい方向に向かうのか悪い方向に向かうのかなんて、誰にもわかりはしない。

ましてや、選ぶことなどできないのだから・・・

～ある学校の社会見学～

今俺たちはバスに揺られてある場所に向かっている。

その場所は日本で数少ないIISの開発企業、旭日重工である。

毎年さまざまな武装兵器を世に進出させ、世界でもなかなかのIIS

開発企業だらう、とのこと。

なんでも進路を選ぶ一つにでもなればと駄目元で申請したら通つたらしい。

そんなところによく社会見学の許可が下りたものだと思つたが、貴重な体験には違ひないだらう。

女子たちにとつては・・・

この世界は現在男尊女卑の世界とぞよならして、今は女尊男卑な世界と仲良くやつてゐるそうだ。

俺たちの子供のころに変わつたルールに大人たちはなかなか適応しきれてないが、まだ頭でなく腹で物事を考えていたころの俺たちにそれほど抵抗はなくすんなり受け入れられた。

女子たちの横柄な態度に腹もたてば、うんざりする」ともある。だがそれが通る世界なのだから仕方がないのだらう。

せめてもう少しましにならないかとは思うがな。

自分の世界に入つていると目的地に着いたようだ。

「はーい、到着です。

各班、整列と点呼をしてくださいよー」

駐車場に整列させられ点呼、女子たちはすでに軽く浮かれているようだが、男子にしたらこれほどつまらなくなるだらう一日の始まりだ。

テンションはすでに地面すれすれだ。

「今日は各クラス男女に分かれてこちら旭日重工さんで社会見学をさせていただきます。皆さん失礼のないようにしてくださいね。」

「「「はーい」」

聞こえてくる返事は女子だけだらう。

男子はもう帰らせてくれといった感じだ。

そこから俺たちはロビーに入り、各クラスごとに見学をすることに。広く吹き抜けのロビーが大企業という感じがしていた。どうやらそれぞれに案内係がつくそうだ。

こんなことのために一日をつぶされるとは、社会人は大変だ。これも給料のうちだからと納得してやっているのだろう。と、また自分の世界に入っていると一人の男性が俺たちの前にやつてきた。

『カツチ・・・』

「どうも、はじめまして。

今日一日あなたたちの案内係をさせていただきます、景山と申します。

あちらは藤原。

どうかよろしくお願ひしますね。

今日はみなさんにわが社のことをいろいろ知つていただき、ぜひ大人になつたらうちの会社で働いてもらいたいものです。』

笑顔でそう言つて自己紹介をした景山という人は細身で仕事ができそうな男の人、藤原という人は少し太った氣の弱そうな男の人。

男子は藤原つて人だろうな。

あの藤原つて人に女子の相手は無理そうだ。

それにしても、あの景山つて人無意識だとしてもなかなかイラッときさせてくれるぜ。

世界規模の会社にそう簡単に就職できたら世の中に就職氷河期なん

てものは生まれなかつただろう。

そんなことを考えていると移動が始まり、施設を見て回るようだ。
さあ腹をくくれ。これからが退屈な一日のスタートだ。

・・・参つた。

もう勘弁してくれ。

帰らせてください。

見学が始まり一時間、俺たちは男女とも参つていた。

旭日重工の設立から企業理念、経営方針など、新入社員に聞かせる
であろう内容を聞かされ13、14歳の子供の頭は放熱状態だ。
それを察してか、藤原さんが、

「景山部長、そろそろ・・・」

「ん?・・・ああもうこんな時間かね。

ではここからは男女に分かれてもいいましょつか。

女性は私についてきてください。

実際のINSに触れていただきましょう。

動かすことはできないでしきうが、起動ならできると思ひますから。

男性の方々は藤原についていてください。

わが社が開発した武装を紹介させますので。ではいきましょつか。

そういうと女子たちは景山と一緒に別室に向かつた。

「で、では男子の皆さんは、私についてきてください。」

藤原さんの案内で俺たちも別室に向かつ。

男子だけでも4、50人はいる。

それだけの人が容易に入る部屋がある」ことが驚きだ。

「ああ～、やつと開放されたぜ。

俺もう帰つて部活したいんだけど。」

そう言つて話しかけてきたのは佐々原宗平。

あだ名はササヤンだ。

明るくて、親しみやすく、男子の中心だ。

少女漫画なら、主人公に好きになつてもらつていってもおかしくないやつだらう。

「俺も帰りたいぞ。
もつもざりだ。」

「これから武装見せられるんだろう?

つんな物見ても何もする」とないじやんか。

何しろつてのよ?」

「そんなの決まつてるだろ。

俺たち男はこういうものを作つて女人に尽くしてます、つていうのを教えるためだよ。

そしてこう言われるんだ。

『男なんてE.S動かせないんだからせいぜい武器や機体でも作つてなさいな。

いいものができたら使つてあげてもよくなつてよ。

おわかり?

わかつたらせつせと馬車馬のように働きなさい。』

とな。』

「なんだよそれ、よつべってよつて、ビリの国のお嬢だよ。」

「まつたくだ。

髪型は絶対縦ロールで手にはモコモコのつむぎを持ったんだろうな。」

やつと談笑ができた。

こんなことを女子の前で言えばそれだけで問題になり保護者呼び出しの説教だらう。

だからこうこういう女子のいなこといろいろでしかできない会話が有一の息抜きになるのだ。

「リリに入つてくださいーい。」

藤原さんの案内で通された部屋で俺たちを待っていたのは武器の数々。
それもエスサイズならそのインパクトも大きく、中学生の俺たちの心を捕らえた。

「やつべ、超カッコいいんですけどこれ。やっぱいって。」

「何これ、こなんん振り回せるの?あつえなくないか?」

興奮する男子たちを見て安心したのか一息入れる藤原さん。
それからじばらく俺たちは武器を見ていたが、ある男子が思つた。
こんなでかい武器がある。
それを扱えるのは女だけ。
俺たちはそれを扱えないが見ることさえもできないのか?と。

「ねえー、藤原さん。」

「ん? 何でしょ? トイレですか?」

「いや違つんですよ。」

ほら、やつぱこんな見せられたら、本物が見たいじゃないですか
一。」

「?

本物? 銃や剣のですか?

それは危ないですから・・・」

と言葉を続けようとした次の瞬間藤原さんの耳には頭に想像してい
なかつた単語が入ってきた。

「ア、イ、エ、ス、エリですよ、藤原さんいいでしょ。
見せてくださいよ。」

「あ、それいいじゃん。

俺も見てー。」

「俺も、俺も。」

一人の発言がきっかけでテンションの上がった男子たち。
さすがに動搖して藤原さんの言葉の高さもおかしくなる。

「あ、アイえスだつて? チョ、チョット、それはデキナイよ。そん
ナことデキルわk・・・」

「いいじゃないですか。」

俺たちは動かせないんだから危なくないでしょ? それに今日一日で
だいぶストレス溜まつたんだしチョット位、サービスしてくれても

いいんじゃないですか?』

『いや。

さすがにそれは……』

藤原さんの意見が消極的だと判断すると、藤原さんを攻め始める。

「おー、ちょっと、やめうつて。」

ササヤンの声もこのテンション、この数の男子相手だと効果がない。

『カツチン・・・』

「わ、わかったよ。
わかったから。もう、やめてくれ。」

「やつた。さすが藤原さん。
話がわかる。』

それまで藤原さんを攻めていたのが嘘の様に今度は藤原さんを持ち上げる。

手のひらを返すつてのはいつぱいつときほんだけだね。

今ここの男子は9・1で区別される。

9はテンションの上がり空も飛びそうな男子たち。

1は彼らに比べればまだテンションの低い男子たちだ。

俺やササヤンも1の側に分類される。
そこにササヤンが声を漏らす。

「ああーあ。俺知らねーぞ。」

「どうした？確かにやりすぎだとは思つけど、HS見れるってのは儲けもんじやないか？」

まあ動かせないからでかい鉄屑だけどよ。」

「鉄屑つて・・・まあ今はよくてもその後がな・・・。」

「その後？」

「もうこの後の展開が読めたからな。
あんなんが素直に見て終わるわけがないだろ？
時間が押して、ばれるに決まってる。
そんで説教くらつて、女子たちからは冷たい目で見られるんだぜ。
今から抜けられねえーかな・・・。」

「・・・そのイメージが鮮明に想像できるな・・・
でも興味はあるだろ？」

「そりゃ、まあな。パワードスーツつてもロボット・・・だから
な。」

そう男なら子供の「いろこ」一度はあこがれるロボット。
それがたとえ自分たちには動かせなくとも見る「」事ができるのとこつ
だけで、テンションは上がるに決まっている。
俺たちも軽く舞い上がっている。

俺たちは調整中だという機体の格納庫に案内された。

ここにくるまでにいろんな人に見られているから説教は確定だろうな。

そんなことを思つていると格納庫の扉が開く。

そこには武器とは比べ物にならない存在感を放つ機体があった。それを曰にしてしまった男子たちはもう止まらない。

一斉に機体に駆け寄り、機体に触るもの。よじ登るもの。

記念撮影をするもの・・・

それぞれが思い思いにその機体の存在を感じた。

「すげえな。」

「ああ」

俺たちもじいじがじいじにうわけではない。

ただその存在に圧倒された。

これでかい鉄屑じゃない。

超スゴイ鉄屑だ。

しばらく眺めていたが、藤原さんの様子が徐々におかしくなる。いや、ここに来るまでのことを思えばおかしくなるのも当然なのだが、そのレベルが明らかに変わった。

「ああ、もういいだろ。

これ以上はもつさすがに・・・

時間が来たようだ。

名残惜しいが仕方ないだろ？。

俺たちは格納庫を出ようとしたらが、さりやけサヤンの言つておつて
なりそうだ。

「まあーだ、大丈夫だつて。」

「やうだつて。

あ、次俺も写真撮つて。」

どうやらあいつには危機感はないらしい。

「もう限界なんだよ。

ここに来るまでもたくさん的人に見られてる。
僕も君たちもただじやすまいんだぞ！――！」

ISは各国に割り振られ、その国が所有していることになっている。
つまりこのISも国が所有しているもので、あいつらはそれにようじ
登っているようだ。

・・・大問題だ。

「おこやばいって。
さつと戻るべ。

センコーや女子に文句言われたくないだる。」

ササヤンの一言は的確にあいつらの心を掴んだ。

国となるとスケールがでかく想像しにくいが、教師や女子は想像し
やすい身近な脅威だ。

その言葉にほとんどの男子がISから離れていく。
そり、ほとんどが・・・

『力チヤ力チヤ・・・』

パシヤ

まだ機体から離れない馬鹿もいるようだ。
のんきに撮影している。

「おー、やっぱって言われたる。
さつさと戻るぞ。」

ササヤンの言葉に耳を貸さないグループのリーダー風の男が動く。

「まだ大丈夫だつて。
こんなのもうないんだからよ。
楽しまねえーと損だらうが。」

「大丈夫じゃないから、こうして藤原さんが言つてんだらうが。
馬鹿やつてんじやねえよ。」

お前らのせいで全員が説教伸びたらどうすんだよ、馬鹿」

ササヤンもイライラしてきたのか言葉が鋭くなる。

言葉は悪くても正論を言われ、悪いことをしているといふ自覚のある奴の行動は限られてくる。

『力チン・・・』

「つせーな。

何しつきってんだよ！――！」

逆ギレだ。

ササヤンが殴られた瞬間、俺も飛び出してそいつに殴りかかる。
そこからはもうただの乱闘騒ぎ。

おそらく藤原さんはこの世の終わつのよつた顔をしていたに違いない。

乱闘開始から5分とかからないうちに旭日重工の職員や教師たちによつてその場は納められることになる。

その後はもちろん予想道理、説教のお時間だ。

特に乱闘をしていた俺たちは特別な説教を食らうことになり、きれいに整列させられ、熱血教師の特別授業中だ。

「まったく、何をしてるんだお前たちは・・・そもそも――」

暑苦しくて聞いてられない。

帰つてからにしてほしい。

そんなことを考えていたら横田にあるものが見えてしまった。

『力キン・・・』

それは景山さんに怒られる藤原さんの姿。
額からはものすごい汗を出し、目には涙、鼻からは鼻水と、置かれている状況を察するには十分な容姿になっていた。

その姿に田を奪われていることあることを忘れていたよつだ。

『ガキッ・・・』

「ひらり！――！」

話を聞いてるのか――！」

しまった。説教の真っ最中だった。

忘れていた俺が悪かったと諦めていると、

「何だその目は、それが人の話を効く態度か――！」

教師に弾き飛ばされ尻餅をつく。

「さつさと立て。

お前はここからとほ別でさら口話しあつ必要があるな。」

もう勘弁してくれ。

何だこの扱い。

その目はって、元々こうこう田つきなんだよ。

もつどうでもいいから早く帰させてくれ。

不満しか頭に浮かばないがそれでも立ち上がるためには気なくとなりの塊に手を伸ばす・・・そう、超スゴイ鉄屑に。

『ガツチャン！――』

このとき確実に、分岐点は切り替わった

ピッ、ツピィペピ――

何だ人の機嫌が悪いときに携帯なんか触りやがって。
保護者に電話か？

上等だよ！

何でも来いよ――

イライラが最高潮だつた俺には非常に不愉快な音だ。
そいつを見たら殴りかかってしまいそうなほどに。
だが誰も携帯を触ってはいない。

それどころか格納庫にいた全員が黙り一点を見つめている。

俺の方をそれもお化けでも見るような信じられないといった表情で。
なんだ、失礼な奴らだな確かに顔は殴られて腫れてるだろうが、そ
んなに驚くようなことでもないだろうに。

立ち上がりつてよくみると全員が俺の方を見ているが、見ているがそ
れは俺ではない。

俺のとなりのスゴイ鉄屑だ。

・・・ちょっとまで。

何かの間違いだ。

ありえない。

俺は、

女じゃないのだから・・・

その瞬間、俺は世界を彩る小さなピースの一つから、世界を変えうる大きな要因の一つへと大躍進を遂げる。

ただの男子生徒Aから、世界で始めて、IISを動かした男 吉田 春 へと

転機（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
更新は不定期だと思いますが読んでみたいと思えたらまた次回お会いしましょう。

プロフィール（前書き）

いや～この子、本当に普通の少年ですので、武道をやっていたとか、何か特殊能力があるとか、そういうものに期待してこの話を読もうと思った人、そういうものは一切登場予定にございませんのであしからず。

プロフィール

吉田春

十五歳

ISを動かす前までは本当にただの男子中学生。特別何かが出来るわけでも、何かが出来ないわけでもなく、両親と兄と生活していた少年。

ISを起動させたことがきっかけで、中学校の残りの一年半、すべて旭日重工の研究室で過ごすことになり、学校に行つたのは卒業式のみ。

その間周りはすべて大人に囲まれて生活することになる。そのせいか、言動、態度が大人鑑感じがすることもある。ある人物が身近に居たせいでその人の影響を受けたんですが、その人物についてはまた後日触れたいと思います。

一年半の間におりつた、二つのことがきっかけで、じょじょに性格に変化が訪れ、「ごく限られたもの意外とのかかわりを拒み始める。」そのせいで、他者の行動に興味を持てず、自分に影響がなければ周りの人間が何をしていてもそれほど気にしない。

若干、篠ノ之東に近い感じがしています。

容姿は、短めの少しきセモでつり目で整つた顔立ちの少年
詳細な姿は、ろびこ様原作の「となりの怪物くん」を参照のこと

ISについては登場の際に記載させていただきます

プロフィール（後書き）

。

異物（前書き）

一度目の更新です。

早くもお気に入りに登録してくださつた方がいらっしゃつて大変うれしく思います。

期待に応えられるかわかりませんが一生懸命執筆していきたいと思いますのでよろしくお願いします

三つ子の魂百までとこう言葉がある。

小さいころの性格や性質は、年をとっても変わらないとこいつものだ。
小さいころとはいってもだらうか？

保育園？幼稚園？

確かに小さい。

だが、人間の性格を形作るには幼すぎないだらうか？

自分という存在をしつかり認識した上で周りの人間に触れる。

これがしつかりできるようになるのは、小学校、中学校ぐらいではないだらうか？

そしてその間に学び、様々な事を吸収して、初めてその人物の根底となるものができるのではないだらうか

その時期に受ける影響とは、いいこともあれば悪いこともある。

だが、そのどちらの影響を受けるか、それもまた選ぶことは出来ない。

そしてそれはどのように影響するにしても、どんな出来事も確実にその人物の中に蓄積されるのだから。

（春）

俺が始めてE.Sを動かしてから一年半が過ぎ、俺はE.S学園に入学することになった。

この間に、世界に俺以外にもE.S操縦者が誕生していた。
イレギュラーは一つではないということらしい。

俺にとってはどうでもいいことだ。

入学式も終わり、今は教室で待機の状態だが、クラスはざわついて

いた。

原因は簡単だ。

一人は世界で初のIS操縦者として発表された織斑一夏。
そして、何故かもう一人男が居るのだから。
つまり、女子高になぜか男子が居る。

それも二人。

一人は世界に発表された少年。

では俺という存在はなぜ知られていないのか？

あの後俺は旭日重工によつてISを動かしたということを隠蔽され、
秘密裏にそのまま旭日重工に籍を置くこととなつた。

一流企業だけあつて給料は十分もらつている。

俺が今旭日重工に従つているのはそれだけが理由だろう・・・

本当ならば俺のIS操縦技術が十分だと判断された段階で、世界に
発表し、男が起動させることのできたISを生産した企業という看
板をかけ、自社をさらに大きくしていくつもりだったそうだ。
だが、俺の適性が低く、操縦技術の向上がなかなかみられなかつた
為そこまでこぎつけることが出来ず、なかなか発表にいたることが
出来なかつた。

そんな時、俺以外のイレギュラーが発生し、そのプランがだめにな
つたために、急遽IS学園に入学。
同じ男の操縦者のデータの記録。

さらに第三世代ISのデータの記録。

そのデータ量に応じて給料を上乗せするからスペイしろ。
といふことらしい。

俺の存在は大人にとつてはただの広告塔でしかない。

『吉田 春』という存在が必要ではなく、

男でIISを起動させた。

そこだけが、旭日重工には必要だつたそつだ。
つぐづく嫌になる。

もう一人IISを動かすことの出来る男が居た。
と発表はするのは今日の正午。

つまり、この段階で、俺がここに居ることは異常な光景でしかない
のだ。

そんなこと知るはずもない学生からしたら、居るはずのない人物が
居るんだ、やわつくのも当然だらう。

「はい、全員そろつてますね。

それではこれからIHRをはじめます。」

ざわつきがおさまり、気がつくと教卓には女子が立っている。
めがねをかけ、私服で、さらに胸がミサイルの。
どうやらこの学校は私服でもいいらしい。

よく見ると基本は同じものなのだろうが、制服も人によって形が異
なつてゐる。

明日からはジャージで登校しそう。

「私はあなたたちを担当することになる山田真耶と言います。
これから一年、よろしくおねがいしますね。」

・・・担当?

担任といふことだらうか?

教師にはとても見えないんだが。

「じゃあ自己紹介からはじめましょうか。
えへ、出席番号順で行きましょう。

ではア行の人から・・・」

そういうとクラスでは自己紹介が始まる。だが空気は緊張しているようだ。

「織村くん？ 織斑一夏くん？」

どうやら俺と同じくこの世界についての異物の順番になつたようだ。

「一夏」

どうしてかと言つんだよ。

何を話せばいいんだよ。

ほつきー、と幼馴染に視線を向けても田線は合わせてもらえない。もつ一人男も居るが、初対面の奴に何を期待していいのかわからな
い。

ここは一人で乗り切るしかない。

「お、織斑一夏です。

よろしくお願ひします。」

よし、終わりだ。

もう座ろう・・・と思つたが、視線を感じる。

それも氣のせいでは済まされないであろう量の視線を。これ以上何をしゃべれと？

趣味？

好きな食べ物？

特技？

お見合いでもないのにどうすればいいんだ？
と沈黙が続いていたこの現状を破る音が響く。

バーン

（春）

「自己紹介がすんだならとつとと座れ。
時間の無駄だ。」

そこに立っていたのは黒のスーツの長髪の女性。
その外見は綺麗や美しいといつた言葉で表現するのが正しいであら
う美女がそこに居た。

「あっ、織斑先生。もう・・・」

山田先生の言葉を途中でさえぎつ話し出す。

「私が君たちの担任の織斑千冬だ。
私の言葉をよく聞き、よく理解しない。
わからなければ何度も説明してやる。
私の仕事は君たちを一年で使い物になるようになります」と。
逆らつてもいいが、私の言つことは聞け。
以上だ。いいな。」

・・・雲の高みから意見を発しているよつた高圧的な態度。
理不尽が服を着て歩いているかのような存在だ・・・田をつけられ
るようなことは無いようにしよう。
そつすればかかわらなくてすむ。

「――キヤー――――――!」

騒音が教室を支配する。

どうやら女子はあの暴君のファンらしい。
歓声が飛び交っている。

正直ウザイ。

もう帰つていいか?

「うるさいぞ馬鹿どもが、やつたとしづかにしりー。」

その一言で教室に静寂がうまれる。

調教された動物たちも、いんな感じだろうな。

「自己紹介の続きだつたな。そここの馬鹿はもつとい。次のもの、自己紹介をしろ。」

「ば、馬鹿つて、ちょっと干冬ねえ・・・。」

「バーン！――！」

「織村先生だ。馬鹿者。」

何だ？

このびつき漫才。

俺はこんなものを見にここに来たわけじゃないぞ。

この一人が場を乱してゐんじやないのか？

そんなことを考へてゐると次の生徒が自己紹介を始める・・・。

「次は・・・お前だな。自己紹介を。」

暴君に指され俺は席を立つ。

「吉田春です。」

俺がこのクラスに望むことはひとつだけです。」

その一言にクラス全員の視線が集まる。何を言つのか？。

それを期待しているのだろう。

好奇の目でクラス中が異物を見る。

だが俺の言葉はこの教室に居る全員の頭には無い言葉だったに違いない。

「俺にかまうな。」

そう。俺はクラスで最初に口にした言葉で、クラス全てを拒絶した。

異物（後書き）

最初の三つ子の魂関係なくない？思つた方申し訳ありません。主人公である 吉田春 のプロフィールを読んでいただけたらほんのちよっぴり納得してもらえるんじゃないかなーと思つています。ほんと、駄文ですいません。次も読んで貰えたらうれしいです。

衝突（前書き）

タイトルである程度予想はつくと思いますが、どうかお付き合いください。

衝突

（春）

S H R が終わり、休憩の時間だがあの一言が効いたのだろう。
誰も俺の近くにはいない。

それどころか、目を合わせることすら避けているような状態だ。
これで面倒ごとにかかわらずに済む。

そう考へていると、俺の言葉が通じなかつた奴がやつてきた。

「なあ、さつきの自己紹介つてどうこうことなんだ？」

織斑一夏、どうやらこいつは人の言葉を理解するという機能が欠如
しているようだな。

どうでもいいが、かかわられても面倒だ。

俺にとつてこいつはただの給料の足しでしかないのだから。

「言葉どおりの意味だ。

俺にかかるな。

話しかけるなつてことだ。

それはお前も同じだ。

世界で始めて I S を動かした男、織斑一夏。」

そういうと俺は席を立つ。

どこにいくか？

人間の生理現象を解消する場所へ。

「ちょ、ちょっと待てよ。

男が一人しかいないんだぜ？

なかよくやるうぜ。

一人でこの環境、三年間続くのはきつこだろ?」

周りを大人に囲まれて過ごしてきた俺に、今更こんな状況できつい
も何もない。

ただ環境には慣れるしかない。

なれることができなければ自分に負担がかかり、いずれ破裂する。

ただそれだけのことだ。

「別に、俺はなんともない。
もういいか?」

俺はトイレに行きたいんだが・・・」

そういうと俺は振り返らず教室を後にする。

（一夏）

何だ、あいつ。

この状況がきつくないのかよ。

何をするにも視線にさらされて、常に緊張状態でいなきやならない
三年間だぞ?

そんなの耐えられるはずがない。
いつたいどういう頭してんだよ。

吉田春の言動が気に入らなかつたのだろう。

面白くない、そんなことを考えていると後ろから声をかけられる。

「ちよっといいか?」

（春）

めんどくさい奴だな。

そんなことを考えながらトイレに向かつ。
だが廊下を歩けば女子、女子、女子。

九割九分九厘が女で構成されたこの学園。

いやでも男子は田に付く。

それも、まだ発表されてない男子。

不審者以外の何者でもない。

・・・ しまつた。

トイレ、どうするんだ？

そう、女子しかいないこの学園で、トイレを使うと云ふこと。
それは女子トイレに入るということと同じ意味を持つに近い。
それでは本当にただの変質者。

急いで男子トイレを探さないと。

自然とその足は速くなつた。

トイレを済ませ、教室に戻る。

当然探すのに手惑えれば時間もかかる。

そうなれば短い休み時間では足りるはずもなく・・・

「ほつ、初日の授業でいきなり遅刻するとは、ずいぶんな大物だな。

」

右手に黒い出席簿。

それを左手に打ちつけながら俺に迫つてくる。

目をつけられるような行動は避けよつと思つた矢先にこれが・・・
運が無い。

いや、俺の運など、IISを動かしてしまつたあのとき、全て無くなつたのだろう。

「すいません。ただトイレが見つかりませんでした。次からは気を

つけます。」

そう言つと、相手は驚いたような顔をして、

「そ、そうか、場所はわかつただろ?
次は気をつけるよ!」

出席簿は力なく織村千冬の腰に添えられた。

自己紹介の開口一番にあんな一言を言つた者から、謝罪の言葉が出るなどと思つていなかつたためだ。

こういつときは下手な言い訳はせず、正直に謝罪すること。
大人に囲まれている間に覚えた、上手く世界を廻る為の術のひとつだ。

「よし、全員そろつたな。
ではこの時間でクラス代表を決めてもらひ。
自薦他薦は問わない。
誰でもいいからあげてみる。」

クラス代表・・・学級委員みたいなものか。
そんな厄介な仕事誰も自分からやりたがる奴はいない。
いるとしたら自分の働きを他者にみせつけたい奴だけだらう。
と、たらさらやる氣のない俺には関係ない。
そんな中女子が手を上げる。

「はい、私は織村君がいいと思います。」

「わたしも。」

「私も。」

どうやら、大人気のようだ。

よかつたじやないか、これですんなり終わってさっさと次の授業を・

・

「私は、吉田君が・・・いいと思います。」

「「「えつ? !」」」

クラスから驚きの声が上がる。

もちろん俺も声には出さないが十分驚いている。

どうやら俺は自分という存在の貴重さを織村よりも下だと勝手に決め付けていたようだが、女子にしてみたら、同じ男。

どちらも貴重なのだろう。

まさかそんな意見が出るとは。

「よし、推薦されたからには候補の一人大だ。
他の者はもういいか?」

織村千冬が候補者をこれで絞ろうとする。

大人数の方が一人に当たる確立はずつと少ない。
だが、二人。

この状況では、確実に回避できるとはいえない危機的な状況。
誰か他にいなか?

俺から推薦するか? だがそんなことをして視線を集めるのはごめんだ。

それに、名前なんて覚えちゃいない。

バーン!

他のものにとつては騒音でも、俺にとつては祝福の鐘、女神の訪れ

になるかもしれない音が教室に響いた。

衝突（後書き）

いやー、話はぜんぜん進みませんが書きたいことはいっぱいです。原作どおりの絡みもちょっと減つていいくことになると思います。現にまだあるお嬢様が未登場ですから・・・

パソコンで打つますが、携帯ならどれだけ時間のかかることやら・

・

キャラが違うんじゃ？といった声、参考にさせてもらっていますので今後よかつたらどんどん書き込んでください。

逆に読んでて、あの描写は？という声がありましたら、申し訳ありません。これ、主人公の周りの描写しかかけないんですね。著者に文才がないので。だから、一夏とあの人の中がぬれた状況での会話のシーンなんかきっと登場しません。あと地の文が多いのは大変申し訳ありませんがこのままお付き合いください。

このまま春には一夏と平行線を辿らせたいと思います。

他の小説のように意気投合したりしないで、変化があるまで、彼には彼の道を行つてもらいたいと思っています。
では、また次の更新でお会いしましょう。

典型（前書き）

この時代の女性の典型といつお方の登場です。
なかなか話が進みませんがゆる~くお付き合いで下さい。

典型

音を響かせた人物に教室の視線が集まる。

「納得できませんわ。

なぜ代表候補生の私ではなく、そのような男たちがクラス代表なのですか？

そもそも、そこの男はなぜここにいるのかも説明がないままじゃないですか。

こんな男と同じ教室にいるなんて、私耐えられませんわ。
わざわざと追い出してください。」

・・・どうやら女神ではないようだ。

しかし、納得できないか。

そりや そうだろうな。

織斑はともかく、俺についての発表がない状態で、俺をクラス代表に推薦する方がどうかしている。

「つるさこや、やりたいなら立候補しろ。

自薦他薦は問わないと言つたはずだ。

それにその男については昼に発表があるそうだ。

それを見れば理解は出来るだろ？

納得するかはお前しだいだがな。」

織村先生が言葉を発すると教室の空気が変わる。

さつきまでのどつき漫才をしていた人物と同じとは思えない眼光でにらみつける。

「し、仕方ありませんわね・・・

この学園にいることについては了承しましょう。

しかし、クラス代表に推薦されるのは別ですわ。

クラス代表はクラスで一番実力を持つた人間がやるべきです。

そう、この私イギリス代表のセシリア・オルコットが。

こんな極東の小さな島国に住む有色人種という劣った種族の男達になんて任せて置けるものですか。

そもそも・・・

まだしゃべり続けるオルコット。

なるほど、学園にいるには貴様の許可がいるのか、菓子折りでも郵送しておいてやろう。

そこに有色人種ときたか、このクラスだけでなく、世界の半数以上を敵に回す発言をするその勇気だけは大した物だろ。それにしてもよく回る舌だ。

将来は政治家にでもなるといい。

きっと不正の言い訳には苦労しないですむだろう。

だが、場の空気を読むができないない。

そんなことを言つてしまえば奴に向けられるのは周りの敵意のみだらう。

バア――ン――！――！

そう、

「ふざけんな――！」

こんな風に。

（一夏）

なんだ、やつてくれるのか。

じゃあもうあの人でいいじゃないか。

そう思つていると彼女は次々と言葉を並べる。

「～こんな極東の小さな島国の敗戦国に住む有色人種という劣つた種族～～～」

その言葉が聞こえた瞬間頭に血が上る。
何を言つてんだこいつは？

いきなり人の国を馬鹿にしやがったのか？
しかも俺だけじゃなくこの国に住む人たちまで？
こいつがこの国は何を知つてるつていうんだよ！
お前にそんな風に言われる筋合いなんかないぞ！
一気に頭に血が上り机を思い切り叩く。

バーアーーン！！！

手が痛からうが関係ない。こいつは今俺に、この国に住む人たちに喧嘩を売つたんだ。

「ふざけんな！！！」

（春）

二人の国のプライドをかけた戦いがおこなわれているのを他人事のように外を飛ぶ鳥たちを見る。

他人のために怒りを覚えること、その行動が春には理解できない。
なぜ自分に関係の無い人のために自分の労力と時間を割けるのだろうか？

春にとつては、この国が敗戦国とさげすまれようが、有色人種と差別されようと、そんなことはどうでもいい。

今彼には教室でおこなわれている論争よりも、外を飛ぶ鳥の数が何

羽なのか、そちらの方を知ることのほうがよほび面白い。

「決闘ですね。

私がクラス代表にふさわしいことを証明して差し上げますわ――――――

「上等だ――――」

売り言葉に買ひ言葉。

どうやら商談は成立したらしい。

れあ、どちらがやつてくれるんだ？

「そろそろいいか、馬鹿者ども――

そんなに元気が有り余っているならいくらでも使わせてやろう。最初はくじで決めさせるつもりだつたが、今ちょうど決闘といつ言葉が出たからそれで決めさせてやる。

ISで勝負をして、勝ち星の数の多いものがクラス代表だ。同じ数だった場合はシールドエネルギーの総残量の多かつたものが勝者とする。いいな？」

そういうことになると織村先生は俺に向かって出席簿を投げつける。

ガソッ――――

「貴様も入っているからな。

関係ないなんて顔をしているんじゃないぞ！」

投げた出席簿を回収し、こちから離れていく。

痛い。やっぱりあれは暴君だな。

しかし、この流れで俺のことを忘れてないなんて、あの人の前で無かったことのように流すのは無理のようだ。

「では、クラス代表は後日決めるとして、これからはほかの委員を決めていくことにする。

え～まずは・・・。」

窓の外を眺めて思う。

給料のためとはいって、これから毎口この生活か・・・うんざりだな。

そう思いながら再び外を見て鳥たちの数を数えるのであつた。

典型（後書き）

女性陣は多少性格がきつくなっている人が出てくるかもしれません。
今回のお嬢様も、当社費1・5倍のお嬢様ツぶりでしたので、ドイツのあのお方はゴダヤ系の大敵、ファッキン・ナチとなってしまうかもしません。

そのときは「了承ください」（笑）

個室（前書き）

やつと放課後です・・・ほんと、進行速度が亀で申し訳ない。
それでは、どうや

放課後になり、やつと長かった初日が終わる。

「こんな調子で三年間か・・・
時間の無駄だな・・・」

と、Iの三年間にどうやって給料の上乗せ分の情報を集めてるかを考えていると織斑先生に声をかけられる。

「教室にいたのか、探したぞ。」

お前の部屋に案内してやるから私について来い。」

「いいから、ついて来い、と言っているんだ。」

「・・・はい。」

どうにもあの眼光には逆らえる気がしない。

おそらくこの地球上の誰もが傳ぐ、それだけの力を持つた瞳だろう。織村先生の後ろを寮に向かいながら歩いていると、何人かの女子とすれ違い、ひそひそと話をされる。

どうやら脣の発表で俺がE-Sを動かせる男ということは証明されたらしい。

しかし、最初の発言で完全にアンタッチャブル 触れてはいけない者として認識されたようだ。
まあ、どうでもいい。

Iのまま俺のことほつといてくれ。

そう考へていると、織村先生が話し始める。

「お前の第一声、あれは本氣で言つていたのか？」

「ん？」

なぜそんなことを気にされなければならないのだろう。
俺がどうしようが俺の勝手なのに。」

「はい。」

この三年間、授業を受けて卒業するだけ。
それが俺のここにいる理由です。
ここにはそれをしに着ただけです。」

「三年間一人で耐えられると？」

「耐えるも何も、俺は別に苦に思つてませんから。」

「・・・それでいいのか？」

人生を楽しむことの出来るこの時期に周りに友人がいないといふのは寂しいものだと思うが？」

友人？ そんなものは必要ない。

「だから、必要ありません。」

別にあなたに気にしていただくことでもないですし。」

そう言つた目に光は無く、その言葉を発することを苦痛とも思つていなか表情だった。

「しかしだな・・・」

「どうでもいいでしょう？」

それでも、生徒のプライベートに教師が介入するんですか？
話が以上ならここまででいいですか？もう一人で充分ですか。」

そういうつて俺は織斑先生から離れていく。

「吉田！」

呼ばれて振り返ると織村先生の顔には昼間ほどの霸氣は無い。

「・・・いや、なんでもない。
すまない、もういいぞ。」

何なんだ？

首をかしげながら俺は寮に入る。

（千冬）

必要ない、か。

吉田の言葉が自分の記憶の中のある人物を連想させる。
あいつも自分の周りから興味の無いものは排除してきた人間だった
な。

だが、あいつには妹、一夏、不本意だが、私もいる。
独りと言うわけではない。

だが、あいつは友人を必要ないといった。

理由を聞いてもあいつは何も話さないだろ？

今日一日見ていたが、あいつは周りの事を気にも留めていない。
他人が自分の世界に入らなければ、かまわない。

例え隣に大統領がいたとしても、緊張することさえ無いだろ？

自分以外のものを必要としていない。

今はまだそれでも生きていけるだらう。

だが、必ず限界は訪れる。

人間とは一人で生きていけるほど強い生き物ではない。

それに気付かなければ、限界を迎えたとき、あいつの中には何も残らない。

それでは死人と何も変わらない。

気付け・・・

人は誰かとともにいることで満たされることができる生き物なのだと。

（春）

自分の部屋の番号を見つけ部屋に入る。
ダンボールが三つ。

俺の帰りを出迎えてくれる。

どうやらエリ学園は節度があるらしい。

一人部屋だ。

まあ、この歳の男女が同じ部屋というわけにもいかないから当然だらうが、もし手違いがあつて俺と相部屋なんてことになつたらルームメイトは確実に病んでしまうだらう。

「まずは、荷解きからだが・・・
優先すべきはあいつらか・・・」

そう言つと一つ色の違うダンボールの荷解きをする。

ダンボールから取り出したそいつらを机に並べ、別のダンボールから寝巻きを取り出しシャワーを浴びる。

シャワーから出て寝巻きに着替えてから椅子に腰掛けそいつらに手

を伸ばす。

大人に教わったことの中でも、唯一ここに書いた事はよかつたことだと
思う。

これはもうやめられないだらうな。

そんなことを考へて居るとそこにはあつといふ間に俺の目の前から
消えてしまった。

再びそいつらに手を伸ばし、至福の時間に酔いしれながら一日の終
わりを迎える。

個室（後書き）

ひとつ言えることは

現実に生きる限りは二十歳になつてから楽しみましょう。
更新ですが、一週間に一、二回を目標とお考えください。

一回で複数同時に投稿予定です

接触（前書き）

遅くなりましたが、更新いたしました。
複数話更新する予定でしたが、今回は一話とさせていただきます。
まことに申し訳ございませんがよろしければお付き合いください。

あの長かつた週の土曜。

俺は旭日重工の研究所に来ていた。

厄介なことに巻き込まれた為にエラをとりこべるよひに言われたからである。

研究所でエラの起動をおこなつてはいたが、専用機を持つていたわけではなかつた春に今回の騒動をチャンスと、旭日重工が専用機を用意し他国のエスのより詳しいデータを取つてきもらつといつことになつたのだ。

そして、顔なじみが居るある部屋の前に立ち、ノックもせずにそのまま部屋に入る。

「よう、調子はどうだ？」

部屋に入つてそう声をかけると、人が住めるような状態では無い、ものが山積みにされた部屋から返事が聞こえる。

「やあ『ダッチ』どうしたんだい、いつたい？」

そうこつて回りに詰めたものを崩しながらある男が出てくる。金髪を後ろで束ね、無精ひげに眼鏡。

年齢は二十代～三十代前半といったところか。

アロハシャツを着てその男は姿を見せる。

『ダッチ』というのは俺のことだ。あだ名をつけるのが好きらしい。吉田から来ているそうだが、吉からとつたヨッシーでは舌が伸びる縁の恐竜になつてしまふからとか、誰でも思いつきそうだからと、わけのわからぬにプライドが邪魔をしたらしく、少しひねつて吉田

の田から、ダッヂだそうだ。

少しじゃないだろ。

普通の人は吉田からは決して思いつかないであろうあだ名だ。
自称『知的な変人』とのことだが、俺から言わせれば『イカれた変人』なだけだ。

「こんな部屋でよく生活できるな。

普通なら生活するより、まず掃除から始めると思うが？」

そう問い合わせるとその男はタバコに火をつけ話します。

「掃除なんて必要ないよ。

僕しか使わないこの部屋で誰の田を気にする必要があるんだい？

君の事を今更気にしろっていつのかい？」

そうじつて息を吐く。

この男、ベニーは俺が研究所で過ごした中で一番一緒に居た時間が
多く、交わした言葉も多かつただろう。

その為感じ方や考え方も影響を受けなかつたといえど嘘になるだろ
う。

だが、俺はこんな汚い部屋で生活できるような人間ではない。

「ベニー、俺はこの部屋からさつと出てエスを受け取りたいんだ
が？」

そう言うと金髪アロハな男、ベニーは俺が今こりて居る用件を思
出したようだ。

「ごめん、ごめん。

忘れてたよ。

そうだった、エラだつたね。
用意してあるよ。

それに、しつかりあのプログラムは組みあがつて後はインストール
するだけだ。」

そう言つて頭をかきながら部屋から歩き出す。

廊下を歩きながら世間話を始める。

「こういう時は、学校はどうだい？
つて、聞いたほうがいいのかな？」

「こらねえーよ。

今すぐ卒業させてほしいぐらいだからな。
それにこんな面倒なことに巻き込まれたのも学校に行かされたことが原因だ。

給料が出なきゃ誰がやるか。」

「ハハハツ！

やつぱり君はそういうと思つたよ。。」

そう皮肉をついて口にする彼の口にはかすかだが笑みがあつた。

「もう一人のイレギュラーはどうだい？
まだ少しだけど一緒にすゞしてみた感想は？」

「ああ？

感想なん・・・あるぞ。

気に入らないつて感想に、理由ならなんとなくな。」

「へえ？君が他人に興味を持つたのかい？」

「そんなんじゃねえよ。今気付いただけだ。」

「さしつかえ無ければ聞いてもいいかい？」

「高いぞ？」

「今回のプログラムでキャラでどうだい？」

モツヤツベーの顔は笑っている。

「ちつ、ずいぶんぼられた氣分だが教えてやるよ。

同属嫌悪 だな。」

「？？？」

「どうじうことだい？」

「理由は教えてやつただろ。」

意味までは教えてやらねえよ。」

アリーナまでそんな会話をしながら俺は久しぶりに氣を許せる相手との会話を楽しんだ。

研究所内にあるアリーナで俺はエスの前に立っていた。

ラファール・リヴィア イヴ

俺がここで起動訓練をしていたときに散々ボロボロにした機体が俺を待っていた。

その周りにはさまざまな機械が取り付けられており、俺にはとても扱えないような代物をベニーは自分の体を動かすかのように扱う。

「今プログラムをインストールしてからちょっと待ってくれよ。」

「ああ、俺が自分で出来てればわざわざ作ってもいう必要も無かつたんだけどよ。」

「気にしないでくれよ。」

これが僕の仕事でもあるし、趣味でもあるんだ。
それに、もともと設計予定だったものだからね。」

今ベニーがIRSにインストールさせているプログラムといつのは簡単に言うと攻撃補助プログラムである。
なぜそんなものをわざわざIRSにインストールさせる必要があるのか。

理由は簡単だ。

俺がIRSの操縦が下手だったからだ。

一年半かけて何とか飛行、簡単な回避運動は取れるようになつたが、まだ相手をロックして攻撃を仕掛けるなんて事ができるレベルではなかつたのだ。

だから、俺と言つ存在を隠し、操縦がしつかり出来るようになつてからの発表。

俺という広告塔を使って利益を上げる、といつプランだつたんだが、織村のせいでダメになった。

と、そういうことだ。

だから俺には専用機が用意されず、他の一般生徒と同様に訓練機で授業受ける、といつ予定があの一人のせいにこうなつた。

厄介な事してくれやがつて。

「よし、じゃあ起動させてくれるかい？」

僕が設計した、この一挺拳銃　トゥーハンド　をね。」

準備が整ったようで、ベニーがこちらに視線を向ける。

「設計って、これ作ったのはデュノア社だろ？」

「

「何を言つてんだい！！」この画期的なシステムを開発したのは僕なんだよ！！

それを搭載したこの機体はもはや僕が設計したといつても過言ではない！！

そう握りこぶしを作りながら力説するベニーを横田に俺はエスに寄る。

(いや、過言だろ。)

そう思いながら俺はもう何度目になるかわからない起動をおこなう。その感覚はもはや最初の頃に起動させた感動をカケラも感じず、ただ仕事だからと、やりたくも無いことをやらされる感覚でしかなかつた。

やっとIISが出てきました。
遅くなつてすいません。

というわけで、春君のIISはリヴィア・イヴです。
ほかの小説ではオリジナルや、他のゲームやアニメ等から来ている
のもありますが、機体選びでやらかしてしまつて、普通の少年と言う
うコンセプトから外れてしまつので、今回は世界でもシノアの高い
リヴィア・イヴとさせていただきました。

この次はIISの機体設定にいくと思います。
更新量が少なくて申し訳ないですが、ゆるくお付き合いください。
あと、著者の中である程度の流れはできているんですが、皆さん
意見お待ちしています。

機体設定

名前

二挺拳銃 トゥーハンド

世代

第二世代

ベニーいわく『第三世代だ！！！』との事

外見はラファール・リヴァイヴである。カラーリングは上半身部分、下半身部分ともに緑色

春の操縦技術を考慮して、シールドエネルギーの消費が抑えられるよう装甲は厚めに。

右肩には外見に専用機らしさをと、ベニーが特殊なコーティングをしてある。

(白い輪郭をとった、黒色の刺青のようなコーティング)

マシンポテンシャルは速度が出すぎても春ではコントロール仕切れないといふことで最高速度は少し下げてあるが、加速だけは通常機と同様の加速力を持ち合わせる。

反応速度は、春にあわせてるので、他の専用機に比べると若干遅れる。

他の専用機に比べると全でが若干下回っているといふこと。もともとデータ収集が春の仕事なので勝つことを根底に作られてはいないためこの様な設定になつた。

武装

固定武装

ソードカトラス×2

ベレッタM92Fを元に設計。銃身とスライドが少し長い。通常のハンドガンとして使用する。

レビュ

攻撃補助プログラム

固定武装の領域だけでなく、後付武装の領域まで使用する、大容量の攻撃補助プログラム。これをつけたおかげで戦闘になるようになつたが、火力不足となり、結局戦闘になるかどうかは使用者の使い方次第となつた。

大容量のため、実用化が難しいと生産にストップがかかっていたが、今回の騒動で試作プログラムを組むことが許された。

この小説情報にも載せているものから来ているので、読んだことのある方は察しがつくんじゃないかなと思います。

後付武装

ビーブーム × 2

UNI ウージーを元に設計。連射で手数を稼ぎたいときに使用する武装。

ジルバーム × 1

RPG 対戦車擲弾発射機を元に設計。一撃で強力な威力を持つが、IS相手には簡単に当たらないので隙を突いて相手に当てるしかない。決め手として使用する武装。

また、弾頭を切り替えることで攻撃以外にも使用可能。

ロマン

これは外せないだろうとビニーによつてつけられた。
使われないことを祈つてゐる。（10話から装備）

他、弾薬、特殊弾頭など。
レビィのおかげで武装の数がだいぶ制限されることになった。

追加装備

『ラグーン』

両足に装備する物と背中に背負つようとするコンテナの二つセットである。

インストールをせることができないため、常に物として形を保つ。そのためH/Sを解除してもその場に残り続ける。

コンテナはシールド変換能力と海中でのステルス能力を積んでいる。
そのためコンテナの様な形で割りと大きめである。

大きさは人がドラム缶を背負っているぐらいとお考えください。

両足は水中での高い起動力を目的として開発されたものである。
その大きさは足のサイズが縦にも横にも三倍になつたものとお考えください。

そしてその脚には銃が収納されている。

【マルス】 × 2

APS水中アサルトライフルをモデルに設計。

水中でも通常の銃のように扱えるように設計されたもの。
さすがに震度が深いとそこまで性能は発揮しないが、震度100m
ぐらいなら通常の銃と距離や威力に変化なく使える。
もちろん地上、空中での使用も可能。

決闘（前書き）

ユニークが1000名様超えたことで浮かれて投稿してしまいました。
複数投稿どこへ行った・・・（笑）
やっとEISでの戦闘になります。
戦闘描写・・・かなり省略した感じになつてますがお付き合いください。

決闘

週があけ、俺にとつては面倒な学園生活が再開された。

そして今日はあの馬鹿一人のおかげで巻き込まれてしまつた例の日である。

そして俺は今アリーナ内のピットにいる。

IS-SUITに着替え、待機しているところへ暴君がやつてきた。

「準備は出来てないようだな。」

「ええ・・・まあ。・・・本当にやらないとダメですか？
俺よりもあの一人のどちらかでいいじゃないですか。」

そつ言つともはや暴君の固定武装の出席簿が現れ俺を叩く。

「推薦されたんだ、わざわざつけて来い。

今まで訓練してきたといつならクラスの奴らよりは動けるだつ。

そつ言つと俺から少し離れて言葉を続ける。

「織斑は機体の準備にまだ時間がかかる。
まずはセシリ亞・オルコットと対戦してもらつ。
代表候補生に勝てるとは思わんが、どの程度できるのかをこりも
把握しておきたいのでな。」

時間の節約か。

それにもう、織斑にはもう専用機が用意されるのか。
専用機の開発も容易ではないだろつこ、ずいぶんと手際のいいこと
だ。

しかし準備に時間がかかるなら、初期設定やファーストシフトが終わらないのだろう。

そんなデータは役に立たないゴミだな。

織村のデータはまた後日だ。

てつきり学園の打鉄や、リヴァイヴを使うと思つてたんだが、どうやら今月の上乗せ分は十分稼げそうだな。

「オルゴットにも同様に伝えておく。

その後の対戦はお前達の損傷が少なかつた方が先に織村とやりあつてもらいつ。

わかったな？」

酷い方はメンテに時間がかかるだろうからな。

その分の時間のロスを避けるためか。

確実に俺が後になるだろう。

「わかりました。

じゃあ、時間になつたらまた声をかけてください。

ここで待機しますから。」

「わかった。

では後は好きにやれ。」

そういうと暴君はペジットから出て行つた。

本当にやるんだな。

今まで戦闘はしてきた。

ただそれはあくまで訓練。

危険が無い様、ゴム弾や刃が潰された剣での訓練。

実弾や真剣での戦闘はこれが始めて・・・

シールドや絶対防御は働くだろうが・・・

そう考えると春の中にどす黒く、ヘドロのよつた感情が心の底から

湧き上がり、手足が震える。

その感情に気付かないふりをするため、ベーーからもらつた 薬を体に取り込む。

（日曜日の研究所）

「ダツチ、ちょっと弱気過ぎないかい？」

そういうべーーは春を見る。その目は軽くあきれている。

「しようがねえだろ。こんなもん持つたこともなきや、撃つた事もないんだからよ。」

そう。今自分の手には人を用意に殺傷せしめる道具が握られている。そんなものを躊躇無く人に向けられるほど春の神経は強くは無かつた。

「うへん、そんなこと言われてもやつてもらわないと困るし・・・
しうがないな。

ちょっと待つてて。」

そういうべーーはあるものを持って俺の前に現れる。

「これは？」

「今の君を変えるものさ。ハイになれるし、常識性は無いけど、使つた後結構きついからそれだけは覚悟しておいてね。」

そういうつてベーーは俺にそれを渡した。

副作用を極限まで抑えたそれをつかい、その感情に蓋をする。

【吉田、準備が整った。

後はお前の好きなタイミングでアリーナに出る。
こちらから開始の合図はしない。

好きなよつこやつあえ。】

時間が来たようだ。

そう言われ、俺はEISを展開する。
行くか。

そこには先ほどまで手足が震えていた少年の顔は無く、いびつに歪んだ顔をした男の姿があった。

「来ましたわね。つつきり棄権すると思つてましたわ。」

空中ですでにEISを展開しているオルコットが俺を待っていた。

やはり、この態度のでかさはこの時代の象徴のような女だな。

「今棄権するならまだ間に合いましてよ？」

この私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズに勝てるわけ無いのですから、棄権しても恥じることではありませんわよ。あなたに勝ち田は無いのですから。

その根拠を武装の差から教えて差し上げますわ。

まず、この私のブルー・ティアーズのスター・ライト~~m k~~?は～～～

勝手に話し出した。

ありがたい、こいつが自分のE.Sの性能を説明してくれるならそれを記録しておくだけでずいぶんと手間は省けるだろう。だが、そんなことを簡単に教えるとは、やはりこいつは馬鹿の分類に入るだろう。

そんなことを考えながら自分の武器を取り出す。

ソードカトラス

俺の固定武装を取り出し、マガジンをこめる。

スライドを引き、銃身に弾を食わせる。

そしてまだクソみないな高説を語つて居るやつに銃口を向ける。

「～～～、あわかつたでしょ？、このブルー・ティアーズの性能が。

その力を田に焼き付けなさい……」

ババン！！

そう言い終つた瞬間、オルコットを頭に衝撃が襲つ。

「つるせえ。

聞いてもいねえもん、いつまでしゃべつてんだ。

手前はＴＶ伝道師か。」「

体勢を立て直したオルコットがこちらを睨む。

「ひ、卑怯ですわ！」

こちらはまだ構えてもいませんでしたの……」

「一つ二つ」と教えてやってやるよ。」

「な、なんですか？」

オルコットは動搖しているようだが、そんなこと俺には関係ない。再び銃口を向けてやつにある事を教えてやる。

「こんなもんはな、撃てて当たりやいいんだよ。
勉強になつたな、白人至上主義やうつ。」

そう言つてまた引き金を引き、その弾丸はオルコットの額を捕らえた。

試合はその後一方的なものとなる。

そう、下馬評道理の展開。セシリア・オルコットが圧倒的優位に立つていたのだ。

春の攻撃が当たつたのは最初の奇襲だけ。

その後は一方的に攻撃され、動く的でしかなかつた。

「ふん！威勢がいいのは最初だけでしたわね。

やはり私の敵ではなかつたということですね。」

そう言って俺の上空で俺に視線を落とすオルコット。
ちつ、わかつちゃいたが、思つた以上に強かつた。

装甲を上げてもらわなかつたらもつと早くに終わつてたな。
まあいい。あいつの第三世代兵器の性能は見れた。

この記録がありや上乗せは充分だ。

そう考えてみるとまた攻撃が俺を捕らえる。

「ウフフ、もう終わりですわね。

今謝罪するならギブアップとみなしてさしあげてもいいですかよ？」

「どうするかな・・・」

正直これ以上やる意味は無いんだが・・・

そう考えてみるとまた攻撃が飛んでくる。

「何ですのその田はー私の優しさに文句がおありですかー？」

「どうやら俺の田つきが気に入らなかつたらしい。

つぐづぐこの田つきが疎ましい、厄介な顔に生まれたもんだ。

どうやら今更ギブアップを聞き入れてもらえそうも無いな。

この次は織斑とか・・・

損傷は俺の方が圧倒的にひどいから俺が後だろしがもう一回やりあうのか・・・面倒だな。

これで終わらせるには・・・

答えを出した春は一気に空に向かつて上昇を始めた。

それを見ていた者達には春の行動が理解できなかつた。

なぜ上昇したのか？
上を取れば勝てると思つたのか？

このとき、春の考えを理解できるものは誰一人アリーナにはいなかつた。

しかし、次にとつた行動により、たつた一人だけが春の行動を理解し、マイクのスイッチをONにする。

【吉田つ！…】

「セシリア」

いつたい何を考えていますの？

なぜ急に上昇を？

もう勝負はついていますのに。

今までの攻勢すでに勝利を確信していたセシリアに春の行動は理解できるものではなかつた。

やはり、有色人種の考えることは理解できませんわね。

そんなことを考えているとその有色人種が行動を起こす。手に握ったスタートライトmk?と展開していたブルー・ティアーズを吉田に向け狙いを定める。

「いいでしょ。

文字通り、撃ち落して差し上げますわ。」

「春」

よし、やるか。

薬のおかげで感じるはずの感情に蓋をしたこの男に、今からやる行動に躊躇は無い。

カトラスを収納、そしてその代わりに両手にてーべーを呼び出す。それをやつに向ける。

その後ことの行動は単純だ。

急降下。

それも俺のトウーハンドが出せる最高速度での急降下だ。
そのときある声が飛んでくる。

【吉田つ……】

その声を無視し、行動を継続する。

その行動にビーでの射撃を加えてオルコットに一直線に降下を始める。

オルコットは待っていたと、自分の武装全てを俺に向けて攻撃を開始する。

装甲が削られ、シールドエネルギーもレッドゾーン。
それでも俺は降下をやめない。

それどころか重力の力を借りてさらに速度が上がる。
ビーの弾が切れる、だがマガジンを派出し、マガジンをビーに直接呼び出しロード。ド
それを繰り返しながらオルコットとの距離を詰めていく。

～セシリ亞～

「くへ、この野蛮人。さつわと落ちなさい。」

攻撃は当たっているのに吉田をなかなか落とせない事に苛立ちを募らせ始めたオルコットは次の行動に出る。

ブルー・ティアーズのもう一つの武装、ミサイルを吉田に向けて発射した。

そのミサイルの爆炎が視界を遮り、それが吉田に命中した証拠だと、セシリ亞は勝利を確信した。

「やりましたわーこれで私の勝ちです！」

だが、この後起こる出来事により、セシリアは混乱せざるを得ない状況に追い込まれる。

（春）

よし、この距離ならもうあがりは見えた。

そう思っていた矢先、予想外のものがオルコットから放たれる。ミサイル

そんなものを喰らえば一気にゲームオーバーだ。

「F A C K ! ! !

春は狙いをオルコットからミサイルに切り替えビーでの射撃を行う。一つ、二つと、どうにかミサイルを落とすことは出来たが爆炎に包まれロースト寸前。

俺自身に熱が伝わるほど高温だ。

シールドエネルギーもめでたいことに奇跡の一弾だ。

だが、その一弾で俺の目的は達成できる。

爆炎を抜け、目標を掴む。

その顔は醜い笑みを浮かべ、その口から皮肉を込めて声を撃ち出す。

「お前の勝ちだ！クソッタレッ！..！」

（セシリア）

今この男はなんていいましたの？

私の勝ち？どうやら敗北は自覚しているらしいですわね。では何故、私の体を掴んでいるんですの？

状況が把握できない。

迷っている所にISから危険を知らせる警告音が聞こえ、自分の置

かれている状況を一気に理解させられることになる。

そう、この男が今していることはカミカゼ仕様の戦闘機と同じなのだと。

「春」

もう勝負はついた。

これが決まつてもこいつのシールドエネルギーは止められない。そんなことはわかってる。

だが、どうせなら楽しまなきゃ 売だ。

薬 をきめた頭が今の状況を楽しませていてる。

「くつ、離しなさい！」

俺に掴まれて抵抗しているがもう遅い。

自分のエスでスピードを殺そうにも、ここまで加速のついたエスの勢いをこの短時間ではもう止められない。

「勝ちは決まつたんだ、俺と一緒に踊つてもらひザ。ホットな鉄屑でハイなチャチャをな！」

「なつ……！」

そう言つた瞬間、俺達は地面に激突し、その衝撃で機体が地面を跳ね、土を叩く。

その光景を見ていたものは言葉を失い、土煙がはれるまで誰も言葉を出せる者はいなかつた。

だが、ただ一人、織斑千冬の声がアリーナに響き渡る。

【救護班、直ちに一人の回収を！！！】

この試合の後、織斑対オルコットの試合は行われず、その日の決闘は誰も予想していなかつた形で結末を迎えた。

決闘（後書き）

いやー、楽。やつた」と無いですが、使用したらこんな感じにいかれちゃうんですかね。

と、妄想で書いてましたが「なんんでどうでしようか?

もつと「ラコツ」ぢやうと思こますが、そこはまあ「都合主義」と書くつゝ」とど・・・

戦闘描寫は難しいので簡単な流れと要點的な所だけを書いてみました。

徐々に書けるようになると「いかな」と思いますが、まだまだ先になります。

ではまた次の更新でお会いしましょう。

感想、お待ちしております。

白色（前書き）

初の感想をいただきました。
著者にしては最高のお言葉でございました。
テンションはあがつておりますが、話は進んじません。
短いですがどうぞよろしく

白色

全身を襲う痛みで目が覚めると、そこはもう向度目になるかわから
ない病室だった。

「くそつ、またここかよ。」

そう悪態をついて周りを見渡すと、やはり変わらない。

訓練で怪我をしたときに何度も搬送された病院の個室だ。
一人部屋なのに馬鹿みたいに広く、清潔感の白一色。

ベットの近くに引き出しの着いた棚と椅子が二つある以外何も無い
殺風景な部屋。

こんな部屋に入院させられたら逆に病んだりまつんじやないかとも思
えるほどだ。

だがここ以外には世話になれない。

すでに肝臓や肺は健康な高校生のモノとは別物だし、今回は薬物反
応まで出そうだからな。

それらを黙認している旭日重工お抱えの病院でないと大問題になっ
てるところだらう。

少し頭が冷静になつてみるとあの戦闘を思い出し、ある感情がこみ
上げる。

『恐怖』

下手をすれば死んでいたかもしれない戦闘の記憶が、春の体を強張
らせ、手足の震えが始まる。

「ちくしょう・・・」

そつぶやく体勢は小さく丸い、まるでアルマジロのようだ。

その背中は小さく、歳相応、いや下手をしたらもっと幼い少年の姿
であった。

その恐怖を殺すのにどれだけ時間がかかっただろう。
冷静になれたと自己判断し、ナースコールに手を伸ばす。
もうここでの対応も慣れたものだ。

まずは意識が戻つたことを旭日重工に知らせる。
その次にお偉いさんが来て、説教ではないが次は無いようにと圧力をかけられ、それを聞き流す。

その作業をこなすのが俺の入院中の仕事だ。
そしてその作業が終わつた後、珍しく客がやつてくる。

「やあ、大丈夫かい？」

相変わらずのアロハ。こいつは他に服を持つてないのかと、センスを疑いたくなる男がやつてきた。

「大丈夫だつたらここには居ないだろ？　が。

三日寝ても体はいてえし、あの薬のせいが、頭が重い。なんだありや？」

そう言つて俺はベーーに視線を向ける。

「あれはほら、興奮作用を与えるための・・・」

「そんなこと聞いてんじゃねえよ。

マリファナか？スピードか？なんにしてもそんな類のもんだろうが。ベーーは苦笑いしながら俺の問いに答える。

「まあそんなところさ。

あんな訓練の時に見せてた精神状態で戦闘できるわけないからね。少しハイになつてもらうために『飲んだんだけど、効果的だつたみたいだね。』

「みたいじゃねえよ。おかげでこのままだ。治療費は誰もちだ。くそつたれ。」

そんな暴言を吐きながらこのやり取りを続けていると、ベーーがやつてきた本題を切り出した。

「で、どうだつた。僕が開発した『レビュイ』は？」

「どうだつたじゃねえよ。俺が攻撃の為にやつたのは相手に向かつて適当に手を向けただけ。

そしたら後は勝手に動いて撃ちやがる。まあ、訓練より狙いが良くなつてたけどよ。

あれで大丈夫なのかよ？」

「よかつた。それでいいんだよ。

攻撃の為の高度な計算をすべてレビューがやつてくれるから、君は適当に狙うだけでいい。

簡単に戦闘できるようになつて一安心だ。

さらには、レビューは自己学習機能もついてるからね。訓練より良くなつたのはその為さ。

戦闘を繰り返せばどんどん精度が上がつていいくよ。

容量を喰うのが唯一の弱点かな。」

自分の作品のできを冷静に評価するベーー。

「ならいいけどよ。でもあれ、無差別つてわけじゃないだろな？」

「大丈夫。ちゃんと識別機能は付いてるし、それ様のパスワードも設定してある。

友軍機に攻撃したりするような無茶はしないよ。

まあ、それを外すことも出来るけどね。」

「ンな物騒なことさらつと言うんじゃねえよ。あのままで充分だ。あれなら情報収集には困らないぐらの戦闘が出来るからな。」

「それはなによりだ。なら僕はもう行くよ。

また明日。君の退院に仕方ないけど付き添つてあげにね。」

そう言つて椅子から腰を上げる。

「ガキじゃねえんだ。一人で充分だ。

そんな暇あんならレビューの容量少しでも軽くしつけ。」

「ハハツ、手厳しいな、でもそつくると思つたよ。ちょっとトゥーハンドをカスタマイズしておいた。ほんとにちよつとなんだけどね。」

「何したんだ？」

「カトラスを粒子化して保存しておくんじゃなく、エリと同様に常時展開状態にしておいた。

持ち替えの際は両脇にホールスターをつけといたからそこに収納して、それから呼び出してくれるかい？

手間は増えたけど、その空き容量にあるものをつんざいたから。」「何積んだんだ？」

「それはね、ロボットアニメの定番にして、男のロマンじゃないかな？」

後でマニアル読んどいてくれるかい？

じやあまた何かあつたら連絡してくれ。

「エリとマニアルは引き出しの中に入ってるから。」

「・・・外してくれって連絡はどこにすりゃいいんだ？」

「さあ？僕のところでは取り扱つてないかな。」

そつ言つて笑顔で部屋から出て行くベニー部屋から出て行くベニーを見送る。

マジかよ・・・変なもん積み込みやがって。

そつ考えながら引き出しから待機状態のエリとマニアルを取り出す。

髑髏に一本の剣が添えられた形のネックレス。

ずいぶんと悪趣味だが、俺は結構気に入っている。

それを身に付け、マニアルをごみ箱に投げ、体を休める。

明日退院して、織村とやつあうのはいつになるんだ？

あいつの機体、ファーストシフト終わつてりやいいんだけどな。

病院での残りの時間を自分の給料の足しになることを考えながら夜を迎えるのであつた。

白色（後書き）

すみません。

ぜんぜん話が進みませんでした。

まあ名前が明らかになつたものもあつたりしましたが、次はもっと話が進められるといいかなと思つております。

硬直（前書き）

何とか複数投稿できそうです。

今回は両方短めでしたが、お付き合いください

退院したその足でI.S学園に向かう。

授業に興味はないし、行きたくは無い。

だが、世の中には出席日数というものが必要なときがあり、学園で技術を磨くことが仕事だという人もいるのだ。

軋む体を動かしながら再び学園を尋ねるのだった。

もう一限田には間に合わないな。

途中で入るといつのもな・・・かといって終わってから教室に入るのも・・・どうしてしき注田は浴びるだらう。
どうでもいいや。

その足が止まることは無かつたが、歩みの速度は確実に遅くなつて
いった。

「教室」

「ではここを誰かに説明してもらいましょうか・・・って、どうして皆さん視線をそらすんですか?」

教室では山田先生が教鞭を振りながらの授業が行われているが、どうにも生徒にいいように遊ばれているようだ。

「そういう事するんでしたらもつと難しい問だ【ガラッ】を・・・
?」

その音にクラスの視線が集中する。

「・・・遅れました。」

さすがにこれだけの瞳の視線を一斉に浴びると少し驚くが、そのま

ま何事も無かつたかのように席に向かつ。そこに暴君が立ちはだかる。

「よく来たな。いきなり拉致されたかと思つたら、ここ数日どこからも連絡もなく休み、いきなり登校すいぶんなご身分だな?」
「どうやら旭日重工からの説明が無かつたことがえらく不満のようだ。

俺のせいじゃないだろ?」

「すいま』それと、貴様の部屋に置いてあつたもの。あれも大した物だな?』・・・勝手に入つたんですか?」

「貴様の連絡先になるようなものがないか探させてもらつた。
教師としていきなり貴様の身柄を持つていかれてハイソウデスカとはいかないのでな。」

この二人の会話に周りの生徒は付いていけない。

頭には?が浮かんでいる。

「今日の放課後職員室に来い。そこで説明で納得できたら許してやろう。」「わかりました。」

そう言って席に着く。

教室の空気は完全に陽気な春の空氣から、冷たい真冬の空氣に変わつていた。

「えつ、え?では、この問題を誰か~」

何とかこの空氣を換えようと山田先生ががんばりを見せ、授業を開する。

何とかその授業は終わりを迎へ、次の授業ISの訓練に切り替わる。

「アリーナ」

「よし、専用機持ちはISを起動せろ。」

他の者達にISの基本的な飛行操縦を見せてもらひ、「

面倒だ。今手元に無いって事で「まかせないだらうか。

そんなことを考えていると馬鹿一人が起動させて俺を待つていて。織村のIIS、どうやらファーストシフトは終わっているらしい。

ありがたい。これで稼げる。そんなことを考えていると、

「さつさと起動させる。それともこれだけの時間をかけて起動できないのか？」

暴君の放つ言葉に逆らひ「」とが出来ず俺もIISを起動する。

どうやら本当にいじつたらしい。カトラスが両脇のホルスターに収納されている。

つてことは、あいつの言つたロマンも本当に・・・

そんなことを考えていると暴君から出席簿のプレゼントを受ける。「さつさと飛べ。それとも、特別メニューを組んでほしいのか？」その発言に体が反射的に宙を飛ぶことを選ぶ。

「すぐ行きます！」

そうして俺もあの二人の後を追い空を飛んだ。

飛んでいる順番は

白人、熱血、そして俺。かなり距離が空いているが仕方ないか。気が付くとあの二人が普通に話している。

あれだけ熱いお国対決をしておいてやけに仲がいいな。

この時春は知らない。

自分が入院している間にこの二人が決闘の続きをしたこと。その勝敗と、それによって生まれた一つの感情も。

だが、大人に囮まれた中で生活してきた春にはその人物が放つ空気を読むことに長けていた。

それは人から人に向けられる感情を感じ取る力。

そんな誰にでもある力だが、それが人よりも優れたものとなつたこと。

それが春のE-Sを動かしたことによつて養われた一番の力だらう。

なんだ、そういうことか。

自分には関係ないからその空氣に触れる事無く飛行を続けていると
あのお方から声が飛んでくる。

「よし、そこから急降下と完全停止をやつてもうう。

オルコット、織村は地面から10㍍。

吉田、貴様は急降下せずそのままゆっくり降りて來い。

アリー・ナに大穴を空けられるのはもう「ごめんだ。」

その発言を聞き下では笑い声が聞こえる。

そして俺たちの中の一人が、少し拳動不審になりながらチラチラ俺
を見る。

どうやら、あのチャチャがずいぶんとお気に召さなかつたらしい。
急降下と聞いて同様が隠せていない。

そんな事を俺のせいにされても困るので俺はゆっくりと降下を始め
る。

ゆっくり降下を始めていた俺を急激なスピードで俺を追い抜いてい
く青色の閃光。

どうやら白人が行つたらしい。さすが代表候補生様だ。
暴君に怒られてないとこうを見ると上出来だった様だ。
その後に白色の閃光がその後に続き俺を追い抜くが、

?ドオ――――ン!――?

その後に聞こえてきた音ですべてを理解する。
まあ、最初はそななるよな。と

硬直（後書き）

次回は酸っぱいイベリコに登場してもらいつつ予定でいますが、予定ですでのその辺はあまりあてにしないようにしてください。

あと、ヒロインのほうも著者の中で固まっています。

どんな結果になるかはまだまだかかりますがそれまでお付き合いくだされば幸いです。

来週になるのではないかなどと思いますが、ではまた次の更新で

孤独（前書き）

気づいたらPVが10000を超えていたことに驚きました。
こんなアンチ的な作品はどうかと思っていたのですがうれしい限りです。

来週つて言つてましたよね?と聞かれたらあれですよ。
カレンダーで日曜日つて一番左にあるじゃないですか?
それだと思つてください(汗)
さて、今回の更新ですが暗いというか、黒いです。
その影響でしょうか、著者もテンション下がったので今回は一話です。

孤独

ゆっくりと降下し、地面に付くころには織斑が空けた大穴の周りに女子たちが集まっていた。

中で一人ほどにらみ合いをしているが、その面子を見る限り、また織斑の事でもめているのだろう。

唯一つ、俺が気に入らなかつたものがあった。

周りの女子たち。

半分ほどは織斑を心配しているようだが、残りの半分は違う。確実に織村を嘲笑している。

「ちょっと、あれ本気なの？」

「セシリアとやりあえてたからもつと出来るんだけど・・・」

「ちょっとありえないよね〜」

その光景にかつての自分の姿が重なる。

そう、勝手に周りが人に期待して、期待と違えば手のひらを返したような態度。

こんなのはもう見飽きた。

いつもならば俺には関係ないから、と無視するところだが今回は違つた。

ホルスターからカトトラスを抜き、空に向かって一発。

ドーン

そして嘲笑していた女子たちに銃口を向ける。

「うるせーぞ、あばずれども。」

「いつて～」

まさか激突するとは。

IS着ても痛いもんだな。そんなことを考えているとセシリアが俺の元に駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか？一夏さん？」

「ああ・・・」

あれ以来急に親しげになってきたが、俺何かしたか？

「ISを着ていたんだ。大丈夫に決まっている。」

そう言いながら 笛がやつてくる。

「あら 笛さん。大丈夫の一言もありませんの？」

「大丈夫に決まっているといつただろ。心配など必要ない。それよりも一夏なんだ今のは？もっと真剣にやつたらどうだ。」
いや、俺は真剣だったんだけど。

俺の目の前で一人がにらみ合いを始め、その背後に竜と虎が見える。
俺が空けた穴の周りには他の生徒たちも集まってきた。
そりやこんなことすりや人も集まるか・・・
そのリアクションは人それぞれだったが、俺は愛想笑いするしかなかつた。

その時、

ドオーン

不意に聞こえる一発の銃声。

何だ？

思わず体が硬直するが、その銃声のほうを見るとあいつが銃を人に向けている。

「うるせーぞ、あばずれども。」

なつ、何やつてんだあいつ。そう思つたとき俺の体はあいつに向かつて走り出していた。

銃を向けられて硬直する女子たち。

こんなサイズの銃を向けられたら普通はこうなる。

いや、このサイズの銃でなくつたて硬直するだらう。

「おい、何が面白かったんだよ？」

そう女子たちに問いかける。

「えつ・・・・？」

質問されたことがわかつてないのか返答がなかなか返つてこない。

「あいつのやつたことの、何が面白かったって聞いてんだよー！」

そう強く言つと女子たちは体をこわばらせる。

「最初から上手く扱えるわけねえだらうが。

それともてめえらは最初から言われた距離ができるよくな優等生様なのがよ。

だつたら見せてもらおうか。

出来なかつたらあいつに向けた言葉が今度はお前いらに返つてくれるんだ。それも、このやり取りをした後での空氣だ。

さぞかし気持ちよく感じるだらうぜ。」

そう言いたいことを口にすると織斑が俺の前にやつてくる。

「何やつてんだよ！」

うぜえ、何なんだよこいつは。

自分を嘲笑つていたやつらをかばうこいつの行動に自然と腹が立つ。てめえは右の頬を打たれたら左の頬を差し出す聖人にでもなつたつもりか。

イライラする。

織斑を見ず背中をむけ歩き出す。

「おい、ちよつ・・・・」

織斑の言葉をやえざるよつに暴君が声を出す。

「今日はじこまでだ。各皿着替えて教室に戻つておくようじ。

織斑、貴様はこの穴を放課後に埋めて置くこと。いいな?」「えつ、ちよつ、千冬ねえ、えつ、えへへへー!?

「織斑先生だ。それでは解散!」
バシツ

空気のよどんだアリーナで織村先生の声だけが響いていた。

（放課後）

俺は朝言われたとおり職員室の前にやってきた。
さて、なんて説明する?

あの暴君に下手な嘘は通用しない。

なら、こちらの切れるカードを切つてかわすしかないか。
覚悟を決め職員室の扉を開く。

「失礼します。」

そこでは教師たちが慌ただしく業務に追われていた。
まだ新学期が始まつたばかりだから仕方ないか。
現に山田先生も職員室で走り回っている。

「来たか。ここではなんだ、場所を変えるぞ。」

俺が来たことに気付いた暴君・・・織斑先生に連れられ俺は別の部屋に連れられる。

その手には紙袋。その中にあるのか・・・俺はそれから視線を外せなかつた。

通されたのはいくつもの席が向かい合わせている会議室のよつな部

屋。

「好きな席に座れ。お茶でいいな?」

「ええ・・・」

そう言つて織斑先生は俺にお茶を出す。

「さてこれの事を聞く前に、今日の授業のことだが・・・」

「そんなことはどうでもいいです。まず、あなたが俺の部屋から持つていったという物を見せてもらえますか?」

そう言つと織斑先生は持つて来た紙袋を俺の前に出す。

「貴様の物に間違いないな?」

そう言つて俺に確認するように促す。

さて、何が入つているか・・・俺はその袋の中を確認する。

まず、バカルディのラム、ショットグラス、タバコのアメリカン・スピリット、灰皿、ZIPPO、ベニーからもらつた薬。

・・・なるほど、真っ黒だな。切れるカードなんか一つもない。

俺は負けの決まつた勝負に乗るしかなかつた。

「で、お前はこれら誰のもので、どう使用していたのかをどうしていたのか説明してくれるんだろうな?」

暴君の顔はやけにうれしそうだ。

「ええ、説明しましょう。

全部俺のです。以上。他には何にもないです。」

期待違ひだといつた顔で俺を見る暴君。

「・・・やけに素直だな。」

「これだけの物証を持って来た相手に勝てる気がしないだけです。もう帰つてもいいですか?」

「そんなわけあるか。

貴様、自分がいくつかわかっているのか?

まだこれらが許されるような歳ではないだろう?」

そんなこと知つてゐる。でもやめられないのだから仕方ない。これが俺のガス抜きの方法だから。

「そうですね。すいませんでした。」

これは没収してもらつて結構ですから、もう帰つても？「

そう言つて織斑先生を見る。

「あのな、そんな簡単に済むわけが・・・」

織斑先生は言葉を続けるがその顔は一生徒に向けるような表情ではない。

もつと身近なものを心配するような表情。

・・・誰だ？

この女は誰にこの目を向けている？

そう考えたとき春の中にある人物の顔が現れる。

織斑一夏。

俺が知る限りこの女がこんな表情をする可能性が最も高い男。なるほど・・・少し賭けてみるか。

「そんな顔しなくてもあいつには何一つ進めてませんよ。」

「何を言つてる。そんなのは当たり前だ。」

その言葉を放つ暴君の顔がわずかだが緩む。
間違いないな。

俺は確信を得てこの状況を開拓する為に動く。

「でも、それが気になつたんですね？自分の弟が。」

「まあ、あんな馬鹿でも家族だからな。」

その言葉を聞いたとき俺の中で何かが切れる。

家族だと？そんなもんクソくらえつ！

バカルディを取り出しショットグラスに一気に注ぐ。

「おい、貴様何を・・・

ドンッ！

その言葉を聞き終わる前に飲みほし足を机の上に。

アメリカン・スピリットに火を付ける。

「はっ、家族だと？」

笑わせんな。そんなもん血の繋がつた他人だろうが！

そんなもんの心配とは、あんたずいぶんあまいようだな。」

そう言葉になると俺は感情を抑えきれなくなり一気に言葉を吐き出

す。

「やつとわかつたぜ。あんたが初日からやけに俺に絡んできた理由がな。」

その口調はもう人前で作るものじゃない、いつも悪態を吐く口調のものとなっている。

息と同じく煙を吐き暴君を見据える。

暴君も俺の変貌振りに驚いている。

その隙にさらに攻勢をかける。

「あんた、俺と織斑をダブらせてたんだろ?」

その一言に暴君がわずかな反応を見せるが、そのわずかを見逃す様な春ではない。

「自分の弟と同じ境遇の俺が、ひょっとしたら自分の弟の姿だったかもしだれないって。

どうした?見抜かれたのが驚きか?」

暴君の顔はいつものものに戻っていたが霸気がかけているように見える。

「何を言つていい。貴様と一夏が重なるだと?そんな訳・・・」

暴君の言葉を奪い俺の攻勢は続く。

「俺がこの短時間で気付いたんだ。あいつの一一番近くにいたあんたならとっくに気付いてるはずだろ?」

それを聞いた暴君はもう暴君ではなく、織斑千冬という女になっていた。

「何を、貴様にあいつの何がわかると言つんだ?」

その言葉を言つたことを後悔させてやる。グラスに一杯目をつづき、言葉を撃ち出す。

「わかるさ。あいつは俺が同じだつて。

あいつも俺も周りを 拒絶 して生きていつてことぐらい。」

その言葉を聞いたとき織斑千冬は自分でも認めていなかつた、見ようとしていなかつたことを言われその言葉に動搖した。

「違う、それは・・・」

その言葉にもはや力はない。

「違うって言つてやつてもいいが、違うのは通る道だけ。

行き着く先は 孤独 つて泥の棺桶だけだ。」

そう言葉にし、グラスの中身を喉に流し込む。

「知ってるか？」

人は興味の無いものを追及しようとは思わない。

それはどんなものにも共通し、人の言動も同じだ。そいつに興味がないからそいつの言葉の真意を読み取ろうとしない。

鈍感つてのはな、人の好意に対して、最も無自覚で残酷な拒絕つて事を。

俺は最初から周り全てを拒絶し、あいつは鈍感という壁で人の好意を拒絶する。

程度の違いはあれど、あいつと俺の根底は同じなんだよ。」

その言葉を擊つ相手はもはや俺のことを見てはいない。

「・・・違う・・・」

そう言う体にもう力が無い。

この勝負もらつた。

「違ういやしない。俺もあいつも突き詰めりや 同じ人間。
神に助けを祈らなかつたわけじゃない。

だがこんなクソッたれな世界じゃどうやら神もベガスで休暇中らしくてな。

俺を助けるよりもルーレットに夢中らし。」

俺は紙袋を手に席を立つ。

「あんたはこういう、俺みたいな薄汚れたものを見慣れてるつて思つたんだがな。」

そう言って織斑千冬を見る。

もう聞こえてねえか・・・

俺は部屋を出る扉にと手をかけ、お節介な一言を告げる。

「だが、あいつはまだ夕闇の中立つてるだけだ。

こっちの、俺と同じ闇に立つてゐるわけじゃねえ、陽の元に戻る道

が無いわけじゃねえんだ。

だが、あいつを救つてやりてえなら急いだほうがいいだろ？

大事な家族なんだろ？」

そうの言葉を繼げ俺は部屋を出て、俺のいるべき場所。

陽の元でもなく、夕闇でもない。

ただこの世の汚泥が詰まつたその世界へと足を沈めていくのだった。

孤独（後書き）

織斑先生が若干打たれ弱かつた感じになつてしましましたが、ここは春の黒い部分を出しておきたかったのでこの様な感じになつてしましました。

都合よく春の言葉を並べてましたが、これ話の流れ的に大丈夫でしょうか？

そこが心配でなりません。

まあ、そん時はそんとき考えます。

後イベリ口。

やつぱり登場しませんでした。申し訳ありません。

次こそは・・・

では、また次の更新でお会いしましょう。

俺はこう感じるといった意見、心情の変化の参考にさせていただきますので、今回の作品の感想、春の言動の感想お待ちしています。

お気に入り登録数が20を超えました。
ありがとうございます。

登録していくださっている皆様がどう思われるかはわかりませんが、
自分の思った話を書ければと思います。
今回はやっとイベリコです。

あれから数週間が過ぎ、俺には 孤独 という平穏が訪れた。周りは俺のことを避け、俺も周りに干渉しない。

あれ以来織斑先生も俺には強くかかわろうとしない。その代わりに織斑に気を使い、今まで以上にあいつの言動に注意を入れるようになった。

この数週間の間にあつたことといえば・・・

（数週間前）

（一夏）

「織斑君、クラス代表おめでとう！――」

俺はこの状況についていけていなかつた。

何で、俺がクラス代表なんだ？

俺はセシリアに負けたんだけど？

そのセシリアとあんな形だつたけど引き分けた吉田とまだ戦つてもいいのに・・・

あの衝撃的な決闘は両者の意識が飛んだためISが同時に解除されたので引き分けということになつた。

それでも一夏の頭には疑問しかなかつた。

「なあ、俺がクラス代表つて事だけど、吉田とまだ戦つてないのに勝手にきめていいのか？」

そう疑問を口にするとセシリアが口を開く。

「そうですわね、確かに一夏さんが疑問に思つのも無理はありませんが、これは織斑先生が許可してくださつたことですので。」「千冬姉が？」

何でも、今日の放課後吉田との対決はいつになるのかを聽きに語つ

た際、

「あいつにクラス代表をやる意思はないそうだ。お前がやってかまわない。」

と言われたそうだ。

その時の千冬姉はいつも千冬姉とは別人のようだったって話だけど、何かあったのか？

そんなことを気にしているとセシリアが言葉を続ける。

「一勝一分けの私でしたが、織斑先生が私がやつて構わないとおつしゃつたのです。

その私が一夏さんにその権利をお譲りするという形で今回のクラス代表が決定いたしましたの。

それとも、お嫌でしたか？」

そりや出来るならやりたくはない。

なぜなら面倒くさそうだから。

でも、この女子に囲まれた状況でNOと言える日本人じゃなかつた俺は、

「わかった。俺がやるよ。」

その一言でさらに盛り上がる会場。

「よし、正式に本人からの承諾を得たといひで、もう一度、『かんぱーい』」

「かんぱーい」

そう言って会場はみんな自由に動き出したわけだが、吉田の姿は無い。

「なあ、吉田は？」

そう女の子に聞くと、

「えつ、よ、吉田君？あ、あの、用事があるとかで・・・」

「ふーん、そつか。」

一夏はその一言で納得したようにそれ以上の詮索はない。ここに居る女子の誰一人として吉田を誘つてはいない。

返答になんといつて断られるかが怖くて誰も説えないで終わつた為である。

だが人の真意を読もうとしないこの織斑一夏にとつてはその答えが全てであつた。

会場が落ち着き始めたところである人物が訪れ、セシリ亞と一夏両名の取材をし、写真を撮つたりと馬鹿騒ぎをしてあつという間に時間が過ぎていつた。

（春）

・・・くそっ、気持ちわり～

織斑先生と話したあの後も飲み続けていたのが効いたのか、頭はすでにアルコールに飲まれていた。

時計を見ればすでに時刻は夜の11時過ぎ、さすがにこんな時間なら誰もいないうとタバコに火をつけながら廊下を自販機に向かつて歩いて行つた。

（薰子）

二人の取材を終え、ここまできたらついでに吉田君の取材もしてしまおうとこんな時間に寮をうろついていた。

「あの一人、インタビューに答えてくれたんだけど、今ひとつ面白みにかけるのよねえ。

でも、初日に『かかわるな』なんて、クールな事言つてくれちゃう吉田君ならきっと面白いインタビューになるはず。」

そんな不満と期待をもらしながら吉田の部屋に向かっている薰子の耳にある声が飛び込んでくる。

「う～・・・う～」

最初は気のせいかと思つた。

こんな時間に廊下を歩いている生徒などいだらうと。だがその声は確実にこちらに近づいてくる。

「うう～・・・うう～・・・」

その声が聞こえた時、薰子の体は確実に硬直した。
気のせいじゃない。

何かがこの廊下を動いている。

体は恐怖で硬直していたが、マスメディアの心が騒ぎ、カメラをその声のする方に恐る恐る向ける。

そこには小さな、本当に小さな明かりが一つ。

ふらふらと、だが確実に廊下をこちらに向かって進んでいる。

その明かりはまるで生きているかの様にゆっくりと明るくなつては暗くなる。

そしてその明かりに付き従うかのように聞こえるのがあの声。

「うう～・・・うう～・・・」

薰子はその場から離れたい気持ちとそのスクープを撮りたい気持ちとの葛藤に悩まされながらもある答えを出した。

離れたい気持ちが勝つた彼女のとつた行動は・・・

よし、逃げながら写真を撮ろう。

ひょっとしたら一枚ぐらいまともな写真が撮れるかもしれない。

そんな淡い期待を胸にカメラを連射モードに、手は後ろに向けながら、体は全力でその光から離れていく。

廊下にはカメラの連射音と、走る足音、うなり声が響く異様な音を奏でながら夜は深まつていった・・・

（春）

うるせーな、何だいつたい？

カメラの連射音とは気付かず、廊下を歩く春。

「うう・・・やっぱ飲みすぎた・・・何のみや直るよこれ・・・タバコを銜えながら廊下を歩き、自販機に向かつて歩く足もとはおぼつかない。

壁にもたれかかりながら進んでいるわけだが・・・

「もう無理だ・・・帰つて寝よう・・・」

ここまで来た道を引き返すため体を反転させ、部屋に向かつて歩みを進める。

部屋までたどり着き、扉を開け部屋に入るとその場で倒れこむ春。このとき彼は知らない。

自分の行動がこのI.S学園に数々の伝説を残すことになることを。一つ目の「一言田のかかわるな発言」

これはすでに生徒の間で知らない者はいないほどの言葉である。これが吉田春という人物をHelloという立ち位置に位置付けるには充分な言葉であり、この一言に逆に落とされたという女子もいないわけではなかつた。

そして今日新たな伝説を作つた。

それは本人の知るところでなければ誰も真実を知らない伝説であるが・・・

数日後、新聞部が出した新聞には「記載されていた。

【スクープ！――学生寮をはいかいする人魂！――】

その写真の真相を知る人物は誰もいない。

と、新聞で騒ぎがあつたくらいだろう。

（現在、放課後）

（春）

俺は今アリーナで織斑が篠ノ之とオルコットの一人にボコボコにやられる様を記録している。

自分自身の訓練はやつている。

アリーナに装備されている訓練機器でターゲットを表示、そのターゲットにいかに精確に当てるかの訓練を繰り返している。

そのおかげでレビューもずいぶんと射撃が上手くなつた。

今ならあの白人とも前より勝負らしい形になるだろう。

だが、あいつは俺の目から見ても駄目だな・・・

ここしばらくあいつのISを見ていたからわかつたことだが、あいつの機体はどうやらシールドエネルギーを削りながら攻撃するらしい。あいつの戦い方に問題があるな・・・

自分のHPを削りながら戦うつて、毒状態で戦闘するのと一緒に違うに・・・

答えを見つけても教える必要が無いからと織斑に声をかけることもせず、アリーナから背を向けて歩き出す。

データは充分取れてる。これで上乗せは充分だろう。

アリーナから離れ、寮に向かつて歩いている春に予想外の出来事が起ころるまで後100m

～？？～

ちょっと、どうなつてんのよこいは？

何でこんなに広いわけ？

何でこんなに建物があるわけよ？

自分の目的地にたどり着けないことへの苛立ちだ高まつている所へ、偶然にも人が通りかかる。

ちょうどいいじゃない、あの人に聞いてみよ

春に予想外の出来事が起ころるまで後30m

（春）

寮に向かつて歩いていると人とすれ違う。

もはや俺に声をかける人物などいないからと完全に無視して歩いていると何か聞こえる。

「・・・え。・・・つと・・・」

誰と喋つてるんだ？その声を無視し、かまわざ寮に向かつて歩いていると、

「・・・え。・・・よつと、あん・・・」

まだ聞こえる。それでも無視して歩いていると・・・

「人の話を・・・きけえーーー！」

腰の辺りにいまだかつてないほどの衝撃が走る。

そのまま地面に向かつて倒れこむ春の背中には確実に人の重みがある。

誰だ？こんな非常識なことを・・・

そう思いながら振り返るとそこには触覚を一本揺らしながら人の背中に足を乗せている女が腕を組みながらいつ言い放つ。

「ちょっと、職員室まで案内しなさいーーー！」

決して人に物を頼む姿勢じやないこの格好を非常識、理不尽と言わずになんと言うだろう。

これがいまだかつてない衝撃に襲われた最初の一日であった。

イベリコの登場です。
やっと出ました。

他の小説なんかだと十話いかない位には登場している人物なんですが、いかんせん更新量が少ないばかりにこんなことに・・・
申し訳ない気持ちでいっぱいございます。

こんな調子だとあの巷で人気のお一人様の登場はいつになるのか・・・

・
今月中にでたらいいな・・・
ハツ？！な、なんでもないですよ（汗）
感想お待ちしてます。
で、ではまた次の更新でお会いしましょう。

お気に入りに登録してくださる方が増えるのは大変喜ばしいことです。

ユニークもおかげさまで2000人を超えることが出来ました。
期待に応えられたなーと思いながら、キーボードを叩いております。

原作や他の小説とはまた違つた進み方ですが、特にこれといった進展はありません。
ではお付き合いください。

（春）

「・・・けつ！」

俺の上に乗っている無礼者に向かって言葉を吐く。

？？？

何を言つているのか聞こえなかつたのか動きがない。

「どけつて！――！」

「ひやつ？！」

あわてて俺の上から飛び降りる無礼者。俺は体をしぶしぶ起じし無礼者を睨む。

「何してんだこらつ！」

俺の言葉に驚きながらも言い返してくれる無礼者。

「あ、あんたが無視するからでしょ！」

俺は気付かなかつた。

いや、気付いていたが無視していたと言つた方が正しいのだから俺のせいつて事になるのか？

そんなことを考えていると無礼者は言葉を発する。

「ま、まあいいわ、さつさと職員室まで案内なさい。そのためにわざわざ声かけたんだから。」

そう言つて俺に案内を促す。

いや、また。俺は案内するなんて一言も言つてない。体の汚れを払い、無礼者に背を向け俺は再び歩き出す。

「なつ、ちょっとあんた待ちなさいよ・・・・」

そう言つて俺の後ろを付いてくる無礼者。

厄介な道を選んでしまつた。やはり俺の運はエスを動かしたときに無くなつたらしい。

しばらく歩いてくるが無礼者は一向に俺の後ろを離れない。
それどころか俺が無視しているのが気に入らないらしく、と俺に呼びかけてくる。

「ちょっと、ねえ聞いてんの？ ねえってば！」

まるでおもちゃを買つてもらえない子供のように謔ぎ続ける無礼者を無視し寮に近づく。

この学校は生徒のことを考えてくれているようで、寮から校舎までは割りと近くに設計されている。

このうるさい奴を引き離すのに最も有効な排除方法・・・
それは目的地まで誘導してやることだろ？。

別に校舎の前を通らなくても寮には帰れたが、寮まで付いてこられると鬱陶しいので仕方なく校舎の前を通る。
そこでよひやく無礼者の方を見る。

「ちょっと、いいかげんにや？！」

いきなり振り向かれたことに驚きの声を上げ尻餅をついている。
俺が受けた蹴りに比べたらそんなもの・・・無言で腰を撫でながら無礼者が立ち上がるのを待つていると・・・

「何してくれんのよつ！――！」

理不尽な罵声。

こいつの取扱説明書はどこに手配したら手に入るんだ？

文句を言いながら立ち上がる無礼者に向かつて、聞きたかったである一句一言を向ける。

「――」が普段授業で使っている校舎だ。職員室もここにある。

そう言って無礼者に背を向け俺はわざと寮に向かった。

～？？？～

「「」が普段授業で使つてゐる校舎だ。職員室も「」ある。

その言葉を聞いてその建物を見る。

やつと見つかった。

「あ、あり・・・」

言葉をかけよつとした相手は既に姿が遠く、声も聞こえないような所まで歩いてくる。

訝然としない気分で校舎の中に入つていく。

「何なのよあいつ。

人のこと散々無視しどいて、いきなり振り返るんだもん。びっくりするに決まつてるじゃない。」

ぶつぶつ文句を言いながら校内を歩いていると職員室の文字を見つける。

やつとあつた。

ほつとした気持ちで職員室の扉を開け、自分の担任の先生を呼んでもらひ。

「あら、鳳さん。よく「」まで来れましたね。てつきり迷子になつて連絡してくると思つて待つてたんですけど。

連絡待つてゐるくらいなら入り口で待つてほしかった・・・

そんなことを考えながら「」までの経緯を説明する。

「ええと、確かに迷子になつたんですけど、案内してもらつて・・・

・

あれを案内といえるのだろうか？

そんなことを疑問に思いながら言葉を口にする。

「よかつたじやない、親切な人がいて。

早速友達が出来たのかしら？」

ほほえましい表情で先生がこちらを見てくる。

「ええと本当に案内してくれただけで、すぐに困なくなつちやつて・・・

そういうと残念そうな顔をする先生。

「あら、 そうなの？ 残念。 どんな人だった？」

「どんな人だったか？」

話してないからわからないから・・・

「えっと、人の話を無視して、」

「うんうん。」

先生があいづちを打ちながら聞いている。

「怒つてて・・・」

「うんうん。」

「男でした。」

「う・・・ん？」

先生の表情はさつきまで見せていた表情とはまた違い、驚いている。

「凰さん・・・案内してくれたのって・・・男の人だったの？」

「はい。」

肯定の言葉を聞いた瞬間、私の周りの時間が止まる。

？？？

何なのよ？

驚いている先生が質問してくれる。

「凰さん、それって織斑一夏君よね？」

その質問の答えを周りの先生も期待しているようだ。
一夏か、会いたい相手だけ今回は違った。

「いいえ？」

その言葉に止まっていた時間が動き出した。

「――ええ――――――つ？！」「」

「ちょっと、凰さん。どうやつてあの子に案内なんてさせたの？」

何をそんなに驚いているのだろう？

案内させたといつても、私はあいつの後ろを歩いてきただけだし・・・

・
「えっと、そんなに驚くことなんですか？」

説明してもらいたいのはこっちだと、質問に質問で返す。

「そうね。凰さんは転校生だから知らないわよね。

あの子はね・・・

先生は若干興奮しながら私に話してくれた。

吉田春という人物が何をやつた人物なのかを・・・

（春）

「いつて、ここに来てから怪我しかしてなくないか？」

そんな独り言を口にしながら着替えて椅子に腰掛ける。

一人部屋で腰にシップを張り、タバコに火をつける。
口に銜え、息を吸うのと同様に煙も肺の中に入れ不純物が体を満たすのを感じながら息を吐く。

しかし、あいつ何だつたんだ？

この学園にまだ俺に話しかけてくる奴がいるなんて・・・

織斑千冬でさえ俺に一線を引き始めたというのに生徒でまだ俺に話しかけるような勇気のある奴がいたのか、それともただの馬鹿か・・・

・

考へても答えは出ない。

ラムのグラスに手を伸ばし、グラスに注ぐ。

それを一口、口に入れアルコールが体を満たすのを感じながら別のことを考える。

今週末に渡すデータで、来月上乗せされて振り込まれる給料のことでも考へよう。

さあて、いくら入るか。

そこには学生でなく、サラリーマンの考へました男が期待に頭を回しながら、酒と煙達と戯れながら朝が来るのを待っていた。

案内（後書き）

次回も話が進まないかも・・・
最近調子がいいので連投できますが、またいつ不定期になるかわ
かりませんのでご了承ください。
皆さん、この流れだとヒロインがいないまま話が進むんじゃ？と
思つてらつしゃらないかが心配です。
感想お待ちしています。

懸念（前書き）

感想をいただきました。

感想をいただくとテンションが上がり、今日も更新をしようと気になってしまいます。

感想・・・恐ろしい子。

さて、また話は進みませんな～（汗）

もっとテンポよくいけたらとも思うんですが、他の話とは違う感じでやっていきたいというのもあるんでこんなペースですが、よろしくればお付き合いください。

悪夢

「アリーナ」

俺はターゲットにカトラスを向ける。

レビイが銃を向けた対象に対し、自動的に攻撃補正を行い引き金を引いてくれる。

ターゲットの真ん中にあたり、新たなターゲットが表示される。何度これを繰り返した頃だろう、俺の後ろに気配を感じた。振り返るとそこには篠ノ之とオルコットがISを展開して立っている。

ブルー・ティアーズに打鉄。

それら纏い、なぜかそいつらはこの広いアリーナで俺の後ろに立っている。

俺は無視しターゲットに銃を向ける。

ISにアラート表示が出て急いで回避行動をとる。

攻撃方向を見る。

そこには銃を俺に向けているのはオルコット。

「・・・何のつもりだ？」

俺はオルコットを睨みつけるが奴からの反応はなく次の攻撃が来る。

「ちっ！」

再び回避をとるが回避先にはある人物が待っていた。

「クソがっ！」

そう悪態をつく俺に篠ノ之が剣を振り上げ俺に向かって一気に振り下ろす。

カトラスをしまい、呼び出すのはジルバ。

こいつで防ぐんだが、俺では接近戦の得意なこいつの攻撃を防ぎきることは出来ない。

だからここでレビイの機能を応用させる。

レビイの攻撃補正を相手の攻撃箇所に設定。

これにより相手が俺に攻撃を仕掛けるであらう武器や部位に「ひりも攻撃を仕掛ける。

つまり、剣にジルバをあてにいく。これでこちらのアーマーには当たりらず、シールドエネルギーを消費せずジルバで防ぐという形が可能になる。

「何だ、何の用だ？！」

篠ノ之にも同様に質問を投げかけるがやはり返事はない。じりじりと攻撃を受けている間にオルコットからの射撃が俺を狙い、その攻撃を回避するために急加速でその場から離れる。

くわつ、薬のんどきやよかつた。

いまさら後悔してもどうにもならないが、そう思わずにはいられない。

ピットへの道を塞ぐ様に俺の進路を限定している一人を相手にするのは俺には無理だ。

この状況から逃れるために冷静な頭を働かせる。

I.Sを解除すればさすがに・・・

そう思い地上に降りI.Sを解除する。

そしてアリーナから離れようとしたときにある人物が俺の前に立っている。

織斑一夏

「悪い、邪魔したな色男。」

そう言ってこいつの横を通り過ぎアリーナの出口に向かったときありえないものが俺の目に飛び込んでくる。

俺の胸から刃が生えている。

その後に訪れる激痛と熱が俺に何が起つたのかを説明する。

「~~~~~っ？！？！」

声にならない叫びを上げ、その刃から逃れようとする。

だがその刃は俺から離れない。それどころかより長く俺から生えていく。

そうしてその刃の持ち主が俺の背後になるとわかるといつまでも気配を感じる。

「お前なんかいらねえよ。」

そう言って刃に力が加わる。

「~~~~~っ！」

「あなたなんか必要ありませんわ。」

そう言って俺の体を熱が通り過ぎる。

通り過ぎた後に残つたのは、左ひじが黒くこげ、あるはずの左ひじの先が地面に転がっている。

「貴様は不要だ。」

その言葉と同時に右肩から先の感覚がなくなる。

「……………」

三つの熱と激痛が俺の体を包む。

俺の人生なんてこんなもんなのかよ・・・

そんなことを思いながら瞼が自然と落ちていった。

閉じたはずの瞼がゆっくりと開く。

まず見るのは両手。

しっかりと繋がっているか、動くのかを確認する。

そして胸。

傷は無い。

その確認が済むと滝のように汗が流れる。

そして体が震えだす。

セシリアと戦つた後からこんな悪夢を見始めた。

あの戦闘の恐怖が日を追うごとに大きく、そして暗いものへとなつていったのだ。

そしてそれは夢となり、日に日にリアルになってついに今日は三人で俺を惨殺しにきやがつた。

震えが収まると時計を見る。

朝の四時。

こんな夢を見た後に一度寝できるほど春の神経は太くなかった。恐ろしいほどかいた汗を流すためにシャワーを浴び、グラスにラムを注ぐ。

それを一気に飲み干すと頭によみがえるのはさつきの夢。

「お前なんかいらねえよ。」

「あなたなんか必要ありませんわ。」

「貴様は不要だ。」

その言葉がやけに胸に引っかかる。

あいつら本人がそう言つたわけではないのにやけにリアルに聞こえた。

他人の言葉を気にするなんて・・・ずいぶんと疲れてるようだ。
気分を変えるために再びグラスにラムを注ぎそれもまた一気に飲み干した・・・

（教室）

「ああ～～～、朝からやりすぎた・・・」

結局そのまま飲み続け、一瓶あけてしまった。

口にマスクをし、匂いがばれないようにしながら教室に向かう。
もう今日は保健室で寝てよう。

そう考えながら教室の前に立ち、扉を開けようとした瞬間、

「じゃあ一夏、また後で来るからね。逃げないでよー！」

その大声は俺の頭を直撃し、扉の前でうずくまる。

「わあ、何あんた、扉の前で座り込んで、だいじょうぶ？」

そう言つて俺に触れようとする人物だったがその後ろに立っていた人に驚き手が引っ込む。

「もうSHRの時間だ。教室にもどれ。」

暴君の「」登場だ。

その予期せぬ言葉に俺へ言葉の砲撃を直撃させた人物は、

「は、はいっ！？」

再び大声をあげ、おれの頭に爆弾を落としていった。

そいつは足音だけを残して急いで俺から離れていった。

「お前もいつまでそうしている。

さっさと教室に入れ。」

そう言つて暴君に教室に入るよう促されるが、

「先生・・・体調悪いんで、保健・・・」

そういう終わるよりも早く山田先生がやつて来て、

「吉田君、大丈夫ですかっ！？」

三度大声を聞かされ限界を迎えた俺の頭は意識を保つことを放棄し、
休息をとることを最優先し俺の意識はそこで途切れた。

悪夢（後書き）

わあ、話は進みませんでしたが今回ばかりで終了です。
やつぱり安全とわかつていてもあんな物騒なものを振り回して戦う
んですから、恐怖は感じるでしょうし、そんな簡単に払拭できない
と思つたので今回のお話を書かせてもらいました。

お酒は量を考えて飲むよつこてしましちゃう。
はつきりいって飲みすぎは体を壊すだけです。
ではまた次の更新でお会いしましょう。
感想お待ちします。

拒絶（前書き）

最近感想をもらひて浮かれて続投を続けていることがあります。

今回も進まないですよー（笑）

いつたい、いつになつたらクラス代表戦でドンパチが始まるのでしょうか・・・

今回はちゅうと理解してもらひるのは難しいかもしませんが、どこかで描いておきたかったことなので今回書かせてもらいました。それではお付き合いください。

拒絶

目が覚めるといつもの病室や俺の部屋では無い。

「……どこだここ?」

周りを見渡しても記憶に無い内装。

外はすでに明かりが薄れ夜が顔を覗かせる。

何か手がかりになりそうなものを探していると眠っていた枕元に紙がおいてある。

意識が戻つたら必ず職員室に連絡しろ。

しなかつたらどんなことがあっても留年させるぞ

・・・こんなことを生徒に言うような人物は一人しかいないだろう。俺は目に入ったインターホンで職員室に連絡を入れる。

「もしもし、吉田ですが織斑先生は居ますか?」

今最も会いたくない相手と顔を合わせるために手続きを自分でとっているこの行動を情けなく思いながら暴君の登場を待つた。

しばらく待つていると暴君が現れた。

俺が取るべきコマンドは、

- ・ 戦う
- ・ 道具
- ・ 逃げる

どうするか悩んでいると暴君から先制攻撃をくじつ。

「いい度胸だな、学校に来る前から酒盛りか?」

クリティカル!

俺のライフはもう半分を切った。

なんて下らないことをやつてる場合じゃない。

頭の中でスイッチを切り替え通常の受け答えをする。

「ええ、まあ・・・その・・・すいません。」

みつともない姿を見られたのが恥ずかしかったためいつものように振舞えない。

そんな俺のリアクションが気に入らないのだろう。

額にしわを寄せながら暴君が言葉を続ける。

「いつもの貴様らしくないな。

何があつたら朝からあんな状態になるほど飲むことがある?」
ばれている。

その言葉を発する織斑千冬の顔は俺と距離をとろうとする以前の織斑千冬の顔にもどつており、その霸氣に満ち溢れた顔で俺に問いかける。

言つたところでこの人には理解できないだろう。

ブリュンヒルデなんて呼ばれていたこの人には決して・・・

「別に・・・」

そう言って顔をそらす。

だがいつもなら決してしないこの行動の不自然さを見のがす様な人じゃないのがこの暴君だ。

「以前私にあれだけのことを言つた奴の行動ではないな。
話せ。じゃないと問答無用で留年させるぞ。」

そう言って俺を睨む。

あんたこそ、生徒にむけて言つ合図じゃないだろう。

そんなことを考えながら夢のことを少しだけ話す。

「・・・I Sで戦うのが怖かつただけです。」

暴君は何を言つている?といった顔で俺を見ている。
やつぱりそうだ。

天才や生まれ持つた資質を持った奴に凡人の気持ちなど理解できるはずがない。

それだけ言って部屋を出るつもりだった。

だが俺の耳に入ってきたのは意外な言葉だった。

「そんなの当たり前だろ？。」

その言葉を耳にしたとき、俺の時は止まる。

「ISを便利な物としか考えてないような奴らや人を傷つけることを怖いと思ってないやつは気付かないが、人を傷つけること、人に傷つけられることにおびえる奴は最初にその壁にぶつかるものだ。」

・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・

なぜあんたが俺の抱える恐怖という感情について話している？

そんなことを考えていると暴君はまだ言葉を口にする。

「それに気付けたということは、貴様は拒絶しているのではなく・・

・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・

その言葉をすべて聞く前に体が勝手に動き出す。

「し、失礼します。」

急いで部屋を飛び出す。

自分でも明らかに行動がおかしいのはわかっている。

だがあれ以上あの場所で、あの言葉の続きを聞くわけにはいかなかつた。

クソッ、飲んで忘れよう。

そう思つて急いで寮へと向かう足は気が付けば全力での部屋から、いや織斑千冬から離れようともがいているようだつた。

拒絶（後書き）

いや、今回のお話、いきなりすぎましたかね？

春に自分の中の感情と向き合つてもう一つこと、そして自分が悩んでいたことが、自分が抱えているような物ではないということを知つてもう一つための些細なきっかけになつたのではないかと思っております。

人間の感情なんでその時々で大きく動きますから、今傾いてても時間がたてば元通りになつてるなんてことはざらにあると思います。今回は夢とお酒のせいでぐらついていた感情も次ではいつも道理の春に戻つていいことだと思います。

感情や考え方はその辺が難しいんですが何とか形になるように作品作りを続けて行きたいと思いますのでよろしくお願いします。
感想お待ちしております。

おはようございます。

目が覚めたら朝の四時半でした。
老人の気分です。

ちょっと話を進めてみようと思ひます。
どの程度進むかわかりませんがお付き合いください。

急いで寮に入り、なりふり構わず自分の部屋を指す。その姿を周りがどう思おうと関係なかった。

ただ自分の部屋へ、休んだおかげで少しはましになつた頭で考えられるることはそれしかなかつた。

不意に前の部屋の扉が開き、同時に不意の一撃をくらつ。

「一夏の、バカツ~~~~~！！！」

今日四度目となる大声。

少しましになつたとはいえこの音量は許容範囲外だ。

足が止まり頭を抱える。

その俺の横を通り過ぎていいくのは一本の髪を揺らしながら歩く無礼者。

あいつが近くに居るのがわかるのは姿を田で確認するよりも、耳で声を聞くほうが先かもしれない。

自分で音を発して周りに存在を知らせる・・・

そういうものなかつたけ？

・・・ああ、熊除けの鈴か・・・

だがあいつの音量は鈴なんてかわいいもんじやない。

ありやサイレンだな。警報機としておこつ。

ベニーの変の影響か、勝手に変なあだ名を自分の中では設定する。こんなことが考えられるようになるまで回復を待つたら再び自分の部屋へと急いで駆け込み、その日はそれ以上考えるのを放棄した。

変化のない日常が俺を通り過ぐる。

そして気が付けばなぜかアリーナでHSの試合を見せられる」とことなつてんなつている。

今日の授業が無くなつたのはうれしいが何でこんなことになつてんだ？

興味が無かつたので教師や周りの話を聞いていない春にこの状況は理解できなかつた。

仕方ないので周りの話に耳を澄ませると・・・

「ねえ、誰が優勝すると思う？」

「私はやっぱり凰さんかな。だって代表候補生で専用機持ちでしょ？」

「私は織斑君。なんだか面白いことやつてくれそうだし。」

そういうや昨日暴君が・・・

「明日の試合は全員しつかり見ておけよ。」

クラス代表たちの戦いだ。

今のお前たちよりはずつとましな戦いを見せてくれるだろ？

それを見てしつかりシユミレーションしておくよ！」

とか言つてなかつたか？

周りの話の流れと昨日の暴君の発言から、今日はクラス代表が戦う日らしい。

そこまでは理解できたがどうにも面倒だ。

白式のデータは現状ある程度記録できたからもう必要ないんだが・・・

そんなことを考えていると俺の興味を引くものが現れる。

中国の第三世代 IJDだ。

そしてそれを動かしているのは警報機。

春には動かしている人物の姿は田に入らず、その機体のみを見ている。

どうやらこの学園は金のなる木だな。

そんなことを考えながらこの試合を見る意味を見つけ記録を開始した。

試合は一方的だった。

織斑は警報機にまともに近づくことすら出来ていない。

俺と白人ともこんな感じだったのだろう。

確かに一人には操縦技術の差はあったが、一方的な試合になつた一番の原因是第三世代兵器だろう。

最初の光景には驚かされた。

詳しいことは俺にはわからないが、織斑が突然吹き飛んだ。

そこから持ち直して回避を続いている織斑だったが、どうにも接近することが出来ない。

もう勝負は決まつたな。

ありがたいデータをとることが出来たので満足だと、席を離れ通路に向かつ。

【ドオ――――――ン!――】

爆音の次に訪れたのは警報音

観客席の出口に近づいたところでわざとまで聞こえていた音とはま

るで違う音が飛び込んできた。

なんだつ？

急いで振り返ればアリーナの中心には黒煙。

そして信じられないことにアリーナのシールドが破られていた。
すげーな、ここに攻撃を仕掛けるなんて・・・

暴君がいるここを攻めるバカの末路なんて決まっているだろうと思つて無視してトイレにいこうと思つたがどうにもそつは行かないらしい。

隔壁が閉ざされている。

どうやら状況を確認している間に閉ざされたらしい。
面倒じとつてのは重なるものらしい。

その襲撃によつてパニックになり押し寄せる生徒の波。

入り口は閉ざされているためその波が進むことはないが勢いが殺しきれず人の押し寿司のよつになつていく。

春の中で苛立ちが高まる。

うぜえ。

無理なのがわかつたらとりあえず離れろよ。

出口の近くに居たので隔壁に押し付けられるよつにして力を受け、

他の人よりいたい思いをさせられていることに腹が立つ。

そのパニックが三十秒ほど続いたとき、春の何かが限界を迎える。
ISの展開。

その衝撃で周りの生徒が倒れこむがそんなこと知つたことではない。

「うぜえから。ちょっとそこで待つてろつ！」

そう言って周りの生徒たちを黙らせる。

その次にくる行動は・・・

扉の近くのインターホンを手に取り、管制室に電話する。

「千冬」

どうなつている？あれはどこのHISだ？

現状が理解できていないのはこの人も同じだった。

今わかつてていることはあのHISが一夏や鳳に危害を加える可能性があること。

他の生徒たちの身が危ないであろうとこいつこと。

だがこちらからの操作を受け付けない現状、何も打つ手はなかつた。

「チツ！」

舌打ちで苛立ちをあらわにして、この状況を打破するための案を考える。

そんな時インターほんがなる。

こういつた状況でも使えることに気付かなかつたが、いつたい誰が？
そんなことを考えながら受話器を手にする。

その受話器の向こうに居る者に声を絞る。

「誰だ？」

「春」

「誰だ？」

電話越しでも不機嫌なのがよくわかる暴君。

「どうにかなんですか？こつちはパニック状態で收拾つかないんですけど？」

そう言つと声の調子が少し変わる。

「吉田か。悪いがこちらでも今どうあることも出来ない。

隔壁もアリーナのシールドもこちらの手を離れている。「

ちつ、こんなときに使えねえな。

そんなことを考えていると、

「今、何か思ったか?」「

エスパーか、おい。

「別に。じゃあ今はどうしようもないってことですか・・・」

そう言って俺も頭を働かせる。

俺がどうにかしたいのはこの押しつぶされそうな状況からの脱出・

・

隔壁は操作できない・・・

開けられない・・・

そのときある案が思いつく。

その為にあることを確認するため再び言葉を口にする。

「あの、この建物って保険に入つてますか?」

「何だ突然? 使用目的が目的だ。すべての保険に入つてはいるが・

・

その言葉が聞けりや充分だ。

ホルスターからカトラスを抜き出し、ジェスチャーで扉から離れる
ように女子たちに伝える。

「それが聞けてなによりです。」

その言葉を口にすると同時に元気な元気を引いた。

警報（後書き）

話を進めてみたんですが、「こんな感じでどうでしようか？」流れは出来ていても上手く表現できないうのをどうかしておきたいです。

今日の更新は以上です。

感想お待ちしております。

アイエスよ、私は帰ってきた！！！BYガトー（笑）と、ネタに走りましたがやつと更新復活です。

友人に安くパソコンを譲つてもらい、これからは新しい友とヨロシクやっていきます。

日数は充分あつたので、とりあえず海までのプロジェクトは上がります。

更新ペースは上がらないかもしれないですが、お気に入りに登録してくださった皆様の期待に応えられるようにがんばりたいと思います。

しかし、更新を休んでいる間にお気に入り登録数が倍になっていたので大変うれしく思いました。

40名以上の皆様。

これからもよろしくお願ひします。
では続きをお楽しみください。

（千冬）

吉田の言葉を聞いたあとにすぐ響く銃声。

突然のことに対話器を耳から離し、銃声が鳴り止むのを待つ。

そして鳴り止んだところで吉田に向かって言葉を放つ。

「何をした……！」

（春）

織斑先生の言葉を聞いて隔壁に向けてカトラスの弾丸を打ち出す。打ち出された弾丸は隔壁に食い込み、どんどんその形を変形させていく。

そしてマガジンの弾をすべて打ち出すには隔壁が変形し、拳が入るほどの穴が開いていた。

よしつ！

これで何とか……

そしてその開いた穴に手を突っ込み、強引に隔壁を開き、人が通れるほどの穴に拡大していく。

その行動を終えたとき対話器から声が飛んで居るのに気が付いた。

「おい、吉田。

聞いているのか？

「一体何をした……！」

その声にひらり返事を返す。

「ああ、どうも。

何をしたって、隔壁に穴を……」

そう言つと受話器の向こうでは大変立腹の暴君の声が飛んでくる。

「誰がそんなことを許した……！」

何を考えている……！」

確かに許可はもらつてはいない。

俺が勝手に隔壁に穴を開けただけだ。

だがこの人の立場なりこの言葉を言えば何もいえないだろう。

「生徒の安全と、施設の保全。

教師としてとるのはどちらが正しいですか？

どうせ保険に入っているんでしょう？

ならそれでいいじゃないですか？」

その言葉を聞いて織斑先生は何も言つてこない。

教師として、人として物と命、どちらを優先させるべきなのかがわかつていればこの時春のとつた行動を攻められはしないだろう。

「……チツ！仕方ない。今回だけは多めにみよつ。そのままアリーナから脱出は出来そうか？」

そう問い合わせる織斑先生に俺は言葉を返す。

「ええ、まあ……」

ただ、隔壁はぶつ壊していきますけど、それでもいいですか？」

その問いかけに織斑先生は、

「今回だけだ。

特別に許可する。

その場に居る生徒を無事脱出させん。

それが出来たら貴様の持つていた物。

あれについては不問にしよう。」

ありがたい。これからはお咎め無しであいつらが楽しめる。

その言葉を聞きやる氣の出た春はこの場に居る生徒の脱出の命を受けることにした。

「わかりました。脱出せますが各隔壁内の間に生徒つていで
すよね？」

その確認が取れれば脱出はより簡単になる。

その問い合わせに織斑先生は、

「ちょっと待て、山田先生に確認させる・・・」

そして少し待つと返事が返ってくる。

「大丈夫だ。誰も隔壁の間にはいない。」

その言葉を聞いて俺はジルバを呼び出す。

「わかりました。じゃ修理は保険で勝手にやってください。」

そう言って受話器を置いた春は隔壁の奥に入り、ジルバを出口をふさぐ隔壁に向かつてぶつ放した。

ジルバから打ち出された弾頭の衝撃で隔壁が吹き飛ぶ。

よしつ！

これなら時間はかからないな。

そんなことを考えていると隔壁を吹き飛ばしたときの爆炎のせいでスプリングラーが作動する。

体を水にぬらしながら隔壁の破壊に向かつ春の周りに生徒たちが集まっている。

「えっと、吉田君がここから出してくれるの・・・？」

「ちょっと、早くしてよ！」

「押さないで、押さないでよ。」

生徒たちはそれぞれが自分の身の安全を獲得するのに必死で、他人のことなんか考える余裕はない。

その光景にため息をつきながら俺は声を発する。

「ここから出してほしかったら俺の指示に従え。

走るな。騒ぐな。

これだけ守れれば出してやるから静かにしてろ。」

その言葉を聞くと周りの生徒たちは静かになり、春の周りから離れていく。

はあ・・・ため息をつきながらこの状況の解決と自分の所有物の権利獲得の為、春は次の隔壁にジルバを向け、転送し装填し直した弾頭を発射した。

いくつかの障壁をぶつ飛ばし、出口に繋がる隔壁の前で脱出に必要な最後の隔壁に向けジルバの弾頭を発射する。

爆散する隔壁。

そしてぬれた体とIISがアリーナから出ると、そこには同じくIISを身に纏つた人達が爆発の衝撃に咳き込んでいた。

人居るじゃん。

そんなことを考えながらアリーナから出た春の後ろから生徒たちが続々と決壊したダムのように放たれていく。

頼まれたことをやり遂げ、自分の所有物の権利を得た春にその光景にもはや興味は無く、春は自分の為にアリーナの上空に向かうため、IISを空に飛ばした。

たいへんお待たせしたこと申し訳なく思ひます。
これからは更新を再開していきたいと思ひますのでチェックしていただけるとうれしく思います。

今日はもう一話更新する予定ですので、更新したばかりのものをチェックされた方は時間を置いてからもう一度アクセスしてもらえた
ら次のが更新されていると思ひます。

返済（前書き）

今日一度目の投稿です。

迂回していくとは思いますが、話が進めていくようにがんばりますので、これからもお付き合いください。

返済

「アリーナ上空へ
春へ

春は生徒たちを無事脱出させた後アリーナの上空に上り、アリーナのシールドの上にEISの足をつけていた。

織斑とクラス代表と乱入者の戦闘を記録するためである。

見たこともないEISの戦闘データならさらに追加分は稼げるだろうと、その様子を記録するためにEISのカメラを最大望遠にし、その戦闘の様子を記録する。

織斑がもう一人の前に立ち、いきなり急加速する。

その後に放つ攻撃が命中し、乱入者は機能を停止する。

その影響だろうか、アリーナを包んでいたシールドが消え、足をつけていた春は一気に落下することになる。

急いでEISを浮遊させ、ゆっくりと地面に向けて降下させていく。地面に付くころには織斑たちも疲労困憊といった感じで肩で息をしていた。

【「ぐるうだつたな。後は教師たちで処理するからお前たちはペッジに戻れ。】

暴君の言葉がアリーナに響く。

俺も充分ありがたいデータをとることが出来たので俺もペリットに戻るよう移動を開始した。

その時、

警告

敵性 I.S の再起動を確認
攻撃態勢に入っています

その言葉を目にして、乱入者を見る。

そこには再び立ち上がり、織斑達に攻撃を仕掛けようとしている I.S の姿があった。

俺たちの位置関係は簡単に言えば一等辺三角形のよつな感じになっている。

俺と織斑達の距離は近く、俺と乱入者との距離は遠く、織斑達も俺と同じぐらい離れている。

乱入者との戦闘でシールドエネルギーがジリ貧のあいつらがあんなのを喰らえば・・・

その時俺の体は反射的に織斑達に向かって急加速をしていた。

その時織斑達に与えた衝撃は俺が無礼者に初めて出会ったときに腰に受けた衝撃に近いものだつただひつ。

（一夏）

やつと終わった。

ため息をつきながらピットに向かい体を休めようとしていた俺と鈴に突然背中から衝撃が襲う。

何だっ？！

倒れこんだ状態で振り返ればさっきまで自分達の体があつた位置をビームが通り過ぎる。

「おわっ？」

その光景に驚いていると俺達に衝撃を感じたであろう人物が俺達の背中の上に乗つかっている。

吉田春だ。

ビームが通り過ぎたことにも驚いたが、意外な人物が自分達の背中の上に乗つかっていることさら驚かされた。

「おじっ、吉田ッ・・・」

そう言葉を投げかけける俺に向かって吉田は、

「黙つて伏せてろつ！？」

そう言って俺達を地面に押し付ける。

（鈴）

いきなり何なのよ。

背中に衝撃が来たと思つたら頭を押さえつけられ振り返ることも出来ない。

誰よ一体。

そんなことを考えながら言葉を口にする。

「ちょっと、何なのよっ！？」

「春」

クソったれっ！

制服からエスを起動させたためシールドエネルギーが減少していた春の背中をビームが通り過ぎていく。

「おいつ、吉田ッ・・・」

そう言って声をかける織斑を押さえつけ、

「黙つて伏せてろっ！・！」

その言葉を口にするともう一人の警報機が言葉を発する。

「ちょっと、何なのよっ！？」

こいつは頭を押さえつけているために振り返ることが出来ず、状況が把握できなにようだ。

こいつらを押さえつけている俺の背中をビームが通り過ぎていくが、その威力は見る見るうちに俺のシールドを削り、俺のエスは機能が停止する。

「クソッ、もう何もできねえぞ！」

その言葉を口にした時、乱入者が再びこちらに攻撃の銃口を向ける。

ビュン！・・・

ビームが空気の壁を破る音が聞こえ俺は人生を諦めた。
夢で見たように俺はアリーナで人生を終えるらしい。
目をつぶっている俺に向かって攻撃が・・・・・

飛んでこなかつた。

どうしたことだ？

そう思い振り返ると乱入者は空を見上げながら倒れこんでいた。

「大丈夫ですの、一夏さん？」

そう声を発しながらこちらに飛んでくる青色の機体。
その声の主は白人だつた。

どうやらこいつのおかげで助かつたらしい。

「ああ、助かつたよセシリア。」

そう言つて機体を起こす織斑。

機能が停止したトゥーハンドを解除し、俺はこのアリーナから走つて離れた。

怖かつたのだ。

自分がとつさにとつた行動が。
下手をしたら大怪我を追ついていたかもしないということが。
他人の為に体が動いたことが。

薬を飲んでいなかつた春に自分のとつた行動が今になつて押し寄せ
る。

どうやら今日もあの悪夢を見る「ことになりそつだ。

そんな恐怖を消し去るために早く自分の部屋へ。

現実から逃避できるものを求めてこの場から離れる「ことを最優先に
した。

「千冬~

誰にも悟られないよう小さくため息をつべ。

一夏達は無事か・・・

その現実が自分に一息つけるだけの時間をくれる。

それもあいつのおかげか。

そつ思つてスクリーンを見るがあいつはもうその場にいない。

いつの間に・・・

そんなことを考えながらとりあえずアリーナに居るものたちに向けて言葉を発する。

【そいつが再び動かないか教師達が来るまで見ていろ。
教師が来てからピットに戻るよ】

その言葉を守り、一夏達は教師達が来るまで乱入者を見張っている。少しすると教師部隊がやってきて乱入者の機体を包囲し、回収に入る。わずかな時間をして感じたこの戦いに幕を下ろすための言葉を再び発する。

【今度こそ苦労だつた。
よくやつたな。】

返済（後書き）

今日はとつあえずここで終了です。
久々の更新でしたが、チェックしていただけると幸いです。
感想お待ちしています。

分岐（前書き）

動きます。

分岐

「アリーナ」

「一夏」

【とりあえずピットで待ってる、私もすぐに行く。】

その言葉を聞き、一夏達はピットで千冬姉が来るのを待つた。
待っている間にひみつきの出来事を振り返る。

「いや、しかし驚いたな。

何があきたかと思ったら、吉田が俺達の上に乗つてゐんだからな。」

「私、何があきてたかわからなかつたんだけど。

えつ、何!? あれつて私達の上に吉田が乗つてたの?」

「ああ、吉田が俺たち押さえつけてたんだよ。

最初は何かと思つたけどな。」

そういう一夏の顔はわずかだが笑みが見える。

「何を笑つてこる。

お前があんなことひでだらだらしてこるからあんなことになるんだ。

」

「そうですねよ一夏さんつ!

笑い事ではありませんわ。

あの時あの野蛮人が居なかつたら今頃お一人ともここに立つていま
せんでしたわよ!」

篇とセシリアにそう言われ一夏の顔は元に戻る。

「そ、そうだな……あの攻撃が当たつてたら今こいつして話してられないか……」

その言葉が出ると同時にピットに千冬姉がやつてくる。

「あれだけの後に話している余裕があるのか。何ならあの機体の回収作業を手伝うか?」

とんでもない。

そんなことやらされたらいつ帰れるかわからない。

「 「 「 大丈夫ですっ!...!...」 「 「 「

四人同時にその言葉を発した。

その言葉を聞き少し残念そうにする千冬姉が口を開く。

「まあいい。

今回の件だが、実験機の暴走ということで処理することになった。くれぐれもあのが無人機だつたなどと他の者に口にしないように。その時は覚悟しろよ。」

その日は本気だ。
何をさせられるかわからない。

「 「 「 もちろんです!...!...」 「 「 「

「では解散だ。ゆっくり体を休めや。」

ふう、帰つてシャワー浴びよつ。

そんなことを考えながら扉に向かう。

ピットの扉の前に立つたとき、千冬姉に声をかけられる。

「織斑、鳳。

お前達は・・・」

「春」

部屋に戻りシャワーを浴びながら自分のしたこと振り返る。

最後の攻撃に反応したこと。

何であそこであいつらを庇つよいつ・・・

「クソッ！」

浴室の壁を殴り不満をあらわにする。
自分のとつた行動が気に入らなかつた。

他人なんかどうでもいいはずだ。

自分には関係ない連中だ。

それなのに体が動いていたことが面白くなかった。

そのせいで俺はさらに恐怖を蓄積することになつたところのこ・・・

やつぱりこんなところに来るんじゃなかつた。

後悔しかない頭を切り替えるためシャワーのお湯を水に切り替え、頭と体を一気に冷やす。

シャワーを終え、着替えを済ませ一服しようとタバコに火をつけようとしていた時この部屋では絶対に聞こえるはずのない音が聞こえた。

コンシコンシ！

聞き間違いだらう。

無視してタバコに火を・・・

コンシコンシ！――

在りえない。

ドアの向こうに人が居るはずがない。

無視してタバコに火をつける。

煙を取り込もうとした瞬間・・・

ドンッ！

確実にドアを叩く強さが変わった。
タバコを灰皿に置き、しぶしぶドアに近づく。
誰だ・・・厄介な客になんて言つてやうつかを考えながらドアノブ
に手を伸ばす。

春は気付かなかつた。

いや、この世界の誰も気付きはしないだらう。

ドアノブに手を伸ばしドアを開けた瞬間、再びあの音が。

初めて男がIISを動かしたときに鳴ったあの音が響いたことに・・・

『ガッチャン！－！－！』

分岐（後書き）

わあ、来密は誰でしょうか？
続きます。

来客の「J」登場です。

人間は生きてこゝへんでさまざまな言葉を口にする。

その多くは人と投げ交わす言葉。

それは相手にこの感情を伝えたいから。

相手にこぢらの気持ちを知つてほしいから。

そんな言葉の中で、ある言葉を一切使わなくなつたとしたら、その言葉の価値を忘れてしまつだらう。

『』

相手がこゝへんに向けて届かせようとして使ひ言葉の価値は、相手に使われてこそ初めてその価値に気が付くのだ。

／？？？／

私は今、吉田春の部屋の前に立っている。

それはなぜか？

用事があるからだ。

そして、こゝつかの田嶋情報によつて導き出された答へだつた。

証言 1

「知らないわよそんなの。それより、もう安全なの？」

証言 2

「えつ？もつ寮に帰つたんじゃないの？」

証言 3

「私達が出たときにはもう居なかつたけど・・・」

証言 4

「吉田君? ああ、なんかさつきすぐじーに勢いで走つて行つたよ。」

証言 5

「彼が寮と学校意外に居るの見たことないから寮なんじゃない?」

証言 6

「私達も探してんだけど居ないんだよねえ~
お礼しようと思つたんだけど・・・」

e t c . . .

とのこと。

一番確率が高いのが学校か寮のどちらかとこつ答えにいたる。
あれから校舎に行くような馬鹿はいないだろ?。
よつて答えは一つ。
つまり二つだ。

にしても、居場所を聞いていて思ったのは周りがあまり吉田春という人物に关心を持つていないうつだった。
最初の発言から考えたらそんなものなのかな・・・
そのくせ一夏のことには過敏に反応して・・・
考えたらイライラしてきた。
そんなことを考えながら扉を叩く。

「ンッ ヌンッ！」

少し待つてみると返事は無い。

氣付いてないのかもしれない。
もう一度。

確実に聞こえる大きさで。

「ンッ ヌンッ！？」

やはり返事は無い。
いないのだろうか？

だが他に居る場所の証言も取れなかつたのドンニシカ当てが無いので仕方が無い。

三度目の正直といつゝこともある。

そう思い扉を叩くが、その手には確実に最初より力が込められている。

「ンッ ヌンッ！？」

イラツ

額に薄く青筋をたて、体をわずかに揺らしながら考ふる。

そうか、きっと居ないんだ。

なら誰かが来たことをわかるようひじ立てやねいつ

そう思つた彼女がとつた行動は・・・

扉から数歩離れ、全力で扉に向かつて蹴りを放つことだった。

（春）

ドアノブに手をかけ、扉を開ける。

そして俺の目に飛び込んできたのは、文字通り俺に向かつて飛び込んできた女だった。

身長差で俺の下腹部にけりが直撃する。

悶絶

数歩下がり、腹を押さえながらひざから落ち、腹を抱えるようひじ立てます。

ありえねえ・・・

その間俺に蹴りを食らわした本人はといつと・・・

「えつ、あつ、ちよつ、ま、また後で来るから・・・
その時はすぐ出なさいよーーー。」

そつ言い残して去つていった。

通り魔とはこんな感じなのだろうか・・・

そんなことを考えながら体を気遣うのだった。

（一時間後）

扉の横にある紙を貼り付け、部屋に戻る。
動けるまでになつた体を引きずりながら椅子に向かつ。
一服しなきややつてらんねえ。

そんなことを思いさつきは吸えずに燃え尽きたタバコを無視し新しいタバコに手を伸ばす。

やつと一服だ。

「はあ～、生き返る。」

ありえない日常を訪れたうと次に手を伸ばすのせりべ。
グラスに注いで口に注げりとした瞬間・・・

パンシ パンシ

ビニが見てるんぢゃないかとしか思えないようなタイミングでノ
ックがやつてくる。
そしてそのままさつき俺に一撃をくれたあいつだらう。

「ビニアの横に貼つてある紙に心当たりがあつたら歸れ～。」

そう言つてグラスを再び口へ向かつて傾ける。

～？？？～

「はあ？紙つて何よ？」

そう思い扉の周りを見渡すと・・・
確かに紙があり、その内容は・・・

【猛獸はGet away!】

プチンッ

さつきは当てる相手を間違えた攻撃をもう一度放った。

「春」

ド「コンシ！――！」

うおっ！

なんだ！？

やけに鈍い音を放つた扉に足を進める。
そこで見たものは文字通り扉を蹴り破った女が立っている姿だった。
その姿はまさしく猛獸だらう。

自覚症状があつたのか。

そんなこと言つたら俺も扉のよつこになるだろ？
諦めるしか無いようだ。

「・・・はあ、もういい。

なんだよ。何のよつだ？」

扉の上に立っている人物に向かつて言葉を発する。

「あんた、喧嘩売つてんのつ！？」

早速これか・・・

面倒な・・・

「ああ、悪かつた。剥がしとくか。」

次はクマ出没注意とでも貼つておいた。

「で、何のよつだ？」

わざわざ扉けり破りに来たのか？」

来訪者に向かつて用件を尋ねる。

その言葉を聞き、少しだけ言葉が通じる様になつた来訪者は、

「つんなわけあるか！」

あんたがいちいち挑発するよつな」とするからでしょつがー。」

その挑発に乗らなきゃいいじゃねえか。

「悪かつたつて。
で、早く用件。」

もつこいから用事済ませて帰つてくれ。

「もつへ、変なことじに時間かけさせんからじやなー。」

不満そうに腕を組みながら俺のほうを見据える。

「今日のことよ。
あんただつて?
最後庇つてくれたの?」

そのことか。

助けたのに文句を言つていらされた筋合には無い。

「なんだ、文句なら聞く義理は無い。

わざわざと帰れ。」

そつと扉だったものから引き摺り下ろし、部屋から出でた服の襟をつかんで歩き出す。

「ちよつ、ちがつ！」

来訪者の言葉を無視し、部屋と廊下の境界線まで連れて行く。

「じゃあな。
俺はこれから修理に忙しい。」

そつと扉の「骸」を立てて修理を始めようとした時、ある言葉が飛んでくる。

『』

何だ？ 何て言った！？

その言葉に驚いて振り返るとそこには来訪者が俺の顔を見ていた。

「ちゃんと書いたわよ？
これで二回分だからね。
じゃあー。」

そつと扉で俺の部屋の前から離れていく来訪者に俺は声をかけようとす。

なんて声をかける？

俺は、あいつの・・・

「おいつー。」

来訪者を呼び止めよつと普段出れないよつた大きな声を出す。
来訪者は立ち止まり、ちらりと振り返る。

「何よツ？」

その顔は少し驚いている様だ。

「う、う、う・・・お前、名前はつ？」

そう言つと来訪者は、

「あたしの名前は・・・」

それだけ言つて去つていった。

それから俺は一人扉の応急処置をしながら考える。

いつ振りだらうか。

自分から相手に名前を尋ねたのは？

そしてあの言葉を聞いたのは？

扉を直し、向かう先はグラスが待つてゐる椅子ではなく、ベット。

自然と体がそちらに導かれ、俺もそれに抵抗することなく従つた。

その夜俺は見ると思つていた悪夢は見ることはなかつた。

いつたいどれだけ久しづびりだらう？

アルコールに満たされずに眠るのは。

いつたいいつ振りだらう？

こんな感情を思つのは。

春の不憫な扱いに涙が出そうです。（Ｔ・Ｏ・Ｔ）
と、こんな感じでドタバタは終了ですかね。

今回のタイトルは自分の中では内容に合わせることが出来たんじや
ないかなと思います。

まあ、ありきたりつちゃ ありきたりなんですが（笑）
転校生二人がやっと出できそうですが、以前どこかのあとがきで書
いたように今月中に出せるかどうか・・・（笑）
感想お待ちしています。

「旭日重工」
「研究所」
「ベニーベ

今日はダッヂが収集したデータを持って研究所に来ているんだが、どうにも様子がおかしい。

「ねえダッヂ？」

そう声をかけるだけで、ダッヂはビクッと体を震わせ、こちらの言動に注意を払っている。
僕が何かしたのかい？

その行動の不自然さは消えないが、今日は仕事の話だ。

「これが今月分のデータだ・・・」

そう言つて拳銃不審ながらに僕にデータを渡す。

「了解。
確かに預かったよ。」

そう言つてデータ内容を確認する。

かなりの量の映像データだ。

これだけの量があればかなり第三世代兵器を解析できるだろ？

「いぐるいりさま、ダッヂ。

お詫びひつほじじゃないけど、面白いものを見せてあげるよ。」

「へえ、そいつはクールなもんなのか？」

そつ言つてダッヂチは「ひりに身を寄せてくれる。

「わがらん。」

そつ言つてまづはダッヂチに給料明細を見せる。

「最高にクールだぜ、ベニー！」

「こつを見りや昨日までの地獄が報われるつてもんだ。」

そつままでの拳動不審な彼とは別人のよつて騒ぎ出すダッヂチ。

びつやら今月の給料はずいぶんと羽振りがよかつたらしい。

上乗せ分で稼いだ分でおつてもらわないと。

そう考えながらもつ一つ、僕は画面を開きダッヂチに今度は別のものを見せる。

「ダッヂチ、もう一つあるんだけど、どつ思ひつへ。

多分世の中でこれだけだと思つよ。

こんなクールなものは。」

そう言つて見せたものにダッヂチの顔はそつままでとは一変して難しそうな顔をしている。

「・・・何だこれ？」

「トゥーハンドのオートクチュールみたいな物かな？
だけど、このタイプの設計は多分どこも着手していないと思つよ。」

そりや そうだろ？

ISは宇宙空間での活動を想定した上で開発された物。今僕の前に写っているそれは、確実にそれとは真逆のコンセプトの元に設計されたものだ。

ダッチにもそれがわかつたらしい。

「・・・これ、実用化しても需要あるのか？」

確かに、そこは難しいところかもしれないけれど、宇宙という未知の領域を食い物にする前に、自分達の星を徹底的に食い潰すための発明品だ。

需要がまったく無いわけではないだろ？

「まあ、トゥーハンドには後付武装領域に余裕がないから、専用のハンガーに取り付けて、展開してからの装備になると想うけどね。まだ完成もしていない試作品だからどうなるかはわからないけど、おそらく試験運用に君に送られることになると思うよ？」

そう言つとダッチは心の底から嫌そうな顔をしてこっちを見る。

「これ、開発にベニーも絡んでんのか？」

「いいや？

これは僕の管轄外だね。

確か今年入社した社員が企画して設計もしているって話だったけど

・・名前なんていったかな？」

大して興味が無かったので名前なんて覚えちゃいない。
ただ、僕のトゥーハンドにどんなものを付けるのか、それだけが気になつたからこのデータを頂戴しただけだった。

「何でもいいさ、好きにしてくれ。

俺はただそいつのデータをどうやいいだけだろう?」

「そう言つてタバコに火をつけるダッヂ。
どうやら諦めたらしい。

「ああ、実験品のデータ収集も君の仕事だからね。
立派な会社員の務めてわけだ。」

「俺にクソつたれのホワイトカラーみてえなスース着ろつてか?
勘弁してくれ。」

そう言つとダッヂは深いため息をついて扉に向かって体を動かせる。

「どう行くんだい?」

「トイレだよ、こちしきしじう。
また面倒なもん押しつけられるかと思つと気が重くなつてよ。
クソと一緒に出していく。」

そう言つてこの部屋から出て行つた。

その後姿を見届けた後、僕は春の集めたデータを検証する。
そうして大量の映像を見て考える。

これだけのデータがあれば、うちでも・・・

そう、今僕の目の前にあるのは世界でも力をいれて開発されている
物達の貴重なデータだ。

それを余すところ無く利用しなければ・・・
僕は思考の海へと潜つて行つた。

（春）

トイレに向かつて歩みを進める。
タバコを銜えながら息を吐くその姿はもう完全に十代が見せる姿ではない。
また面倒なもん押し付けられそうだな・・・
今から気が重いのを払拭しようとしているある部屋の前を通りかかる。

そこにはもう一年ほど誰も使っていない部屋。
春の頭にはその部屋の住人との映像が一瞬映し出される。

「クソッ！」

その映像を見なかつたことにしてトイレに向かつて歩を進めた。

古鳥（後書き）

本日はもう一話更新いたします。
18時でごめんなさい。

銀と金（前書き）

何とか、このお二人の投入が間に合いました・・・
ではどうや。

（春）

休みが明け、再びあの学園での生活が再開する。

気が重い。

もう行きたくねえな。

少し遅れてやつてきた五月病に恼まされながら嫌がる頭を無理やり体で制し、学校へと足を進める。

相変わらず朝から騒がしい教室の前に立ち扉を開けると一瞬で静寂が訪れる。

静かになって何よりだ。

そんなことを思いながら自分の席に着く。

そして机に突っ伏していると周りに人の気配を感じる。

「なあ吉田、ちょっとといいか？」

また厄介ごとを持ち込んでくれそうな声を俺は無視していると暴君がやつってきたのか教室が完全な静寂に包まれ、空気が変わる。

「おはよう諸君。
休日は充実していたか？
そんな諸君に新しい活力をくれてやろう。
入つて来い。」

そう言つと扉が開き、その後に訪れたのは超音波攻撃だった。

「 「 「 「 キヤ————ツ————！」」「

ウゼハ、やつ思ひ顔を上げるとヤリヒは信じられない光景があった。

教壇の前に立つてるのは暴君と山田先生と、もつ一人。
そのうちの一人に異常があつたのだ。

金髪、整つた顔立ち、そして、

「シャルル・デュノアです。

皆さんよろしくお願ひします。」

そう、その格好は完全に男のそれだつた。

「 「 「 「 キヤ————ツ————」」「」

何度騒げば気がすむんだこのクラスの馬鹿どもは・・・
それにしててもデュノアか・・・

旭日重工と同じようにI.Sの開発企業だ。

嫌々ながら会社員を兼任している春だ、それくらいの知識はある。
そして、こんなクソみたいな時代、企業なんてもんが考えることは
どこも一緒だらう。

・・・別口で稼ぐのも悪くないかもな・・・

その頭には真っ黒い文字で、転売という言葉が明確に表示されてい
た。

そんなことを考へてみると、

「ウケ、お前も挨拶をしや。」

「はつー。」

そう言つて姿勢を正し、背筋を伸ばして言葉を口にする。

「ラウラ・ボーデヴィッシュだ。」

それだけ言つと姿勢を軽く崩す。

あつさりしている。

あれぐらいのほうが好感がもてそうだ。
よく見るとそいつはクラスを值踏みするかのように視線を飛ばす。
そして、ある人物のところでその視線が止まり体が動いていった。
そして次の瞬間。

バシンッ！

痛快な音が聞こえ俺は思わず笑つてしまつた。

「ハハハッ！」

そのリアクションに回りは困惑している。

初対面にビンタか。

最高にクールじやねえか。

そんなことを考えてくると暴君が言葉を発する。

「馬鹿はそこまでだ。

貴様ら、さつさと着替えてグラウンドに集合。

遅れたものはどうなるかわかつてゐるだらうな。」

その言葉を聞き春以外の人間の時が早送りで再生される。

その中を一人いつも道理の動きでグランドに向かおつと教室を出る。

その道筋は織斑達と同じ道。

だが、俺には何の面倒ごとも降りかかる事は無いだろ？。

なぜなら、厄介ごとは先に行つた連中が引き連れて行つてくれたからだ。

5

俺の前方から大音量の奇声が飛んでくる。おめでたい連中を無視して俺は一つ下りる階段をずらして更衣室に向かった。

更衣室

俺が着替えていると疲労困憊の一人がやつてくる。

「吉田つ、お前何でもう着替えてんだよつー。」

肩で息をしている織斑に理不尽な言葉を浴びせられる。

「知るか。お前たちのおかげでいつもより廊下が空いてただけだ。」

そう言って俺はエスースの上半身に腕を通して着替えを終える。着替えが終わったので更衣室から出ようとすると声をかけられる。

「君が吉田春君だよね？
シャルル・デュノアです。
これからよろしくね。」

そう言って手を出してくる」この手を払おうとしたが・・・
取引先になるかもしれない相手を邪険にすることは無い。
その手をとつて力を込める。

『ナニカの心』

そのやり取りが一夏には信じられなかつた。

春の行動が最初に自分と交わしたやり取りとはまるで違うものだつたからだ。

訽然としない気持ちを抱きながら着替えを始める。

そんな織斑を横目で見ながら手をつないでいる相手、デュノアに耳打ちをする。

「お前の欲しいものは、もう俺が持つてゐる。
心当たりが無かつたら無視してかまわないが、心当たりがあるなら、
放課後俺の部屋に來い。」

その言葉に体を硬直させるデュノア。

間違いないな。

そのリアクションに確信を持つて更衣室からでてグラウンドに向かつた。

銀とい金（後書き）

れい、どんなやり取りになるのでしょうか？
その内容はまた数話後に。
感想お待ちしてます。

攻める快感（前書き）

サディスティック星の王子様の誕生です。

攻める快感

「グランド」「春」

着替えを終え、グランドに到着すると、そこには着替えが終わった女子達が集まり話をしている。

「えへ、でも・・・」

「いや、意外と・・・」

「確かに、ありかも・・・」

所詮くだらない話だらうとその話を無視して適当にグランドに立つている。

そのとき春は知らなかつた。
女子達が話していた内容が自分のことだと。

あの襲撃の際、脱出するために動いた春の株価は連日ストップ高を記録し、今まで避けていた女子達の中で吉田春を一時期ドライアイスとまで言つていたが、今では逆にありなんじゃないかといふ話が出ていたのである。

そんなことを知るはずも無ければ興味も無い春は静かに教師達の登場を待つた。

少し待つと織斑達がやつてきて、その後すぐに織斑先生がやつてくれる。

「全員そろつているか？
いない者の名前を挙げる。」

その言葉に誰も返答を返れない。

「よし、そりつていろな。
では今日は実際に起動と歩行の訓練だ。
その前に面白ことじをやつてもらうがな。」

その顔は大変楽しそうに、そして悪いことを考えていろ顔だった。

「オルゴット、凰。
前に出る。」

その言葉に両者は驚いて前に出る。

「何でしょ'つ？」

「何ですか？」

両者ともに前に出された理由が理解できていなかつた。

「お前たち一人には模擬戦をやつてもらう。
全員の手本になるようにな。」

そう言つと一人は言葉にはしないがめんじくせうな空氣をかもし出す。

だが、暴君に何か耳打ちされるとやる気がうなぎのぼり、

「ソレは私の出番ですわねっ……！」

「私以外に誰がやるつていうのよつ……！」

あの一人がやりあつたのならそれはそれでありがたいデータが取れそうだな。

そんなことを考えていると、上空から異音と奇声が降りて、いや降つてくる。

『ど、どこでぐだぞーい……!』

その声に空を見上げると、小さな点が大きくなり、明らかに止まるスピードではない速度で落ちてくる。

・・・またか。

俺は黙つて工事を開けし、その後にやつてくるであらう衝撃に備えた。

ドォ――――――――!

どうやらこの学園は地面に穴を開けるのが恒例行事らしい。

その落石後には山田先生と織斑が重なり合つていた。

その光景に田を奪われている春の後ろではある会話が行われていたことを知るよしも無い。

「ひれつて、守つてもらひつたのかな？」

「えつ、でも……！」

「こや、やつぱはつ意外と……！」

そんな会話を知るよしも無い春はその光景に目を奪われていると、

織斑パー・ティーが動き出す。

最初に動いたのは白人だった。

ブルーティアーズが、的確に織斑のいた場所を狙う。偶然動いたために避けられた織斑に残念そうに言葉をかけている。そのつぎに動いたのは、確か・・・今世紀最大の天才の妹、掃除用具。

織斑に向かつて言葉の刃を振り下ろす。

その次に動いたのは警報機だった。

両手に持つた剣を織斑に向かつて投げつける。

それを打ち落としたのはなんと、間抜けに地面に激突した山田先生だった。

その光景は意外と言えば意外だったが、春にはそれとは違う感情が一瞬だがよぎる。

ムカツ！

ん？

何だ今の感じ？

そんなことを考えていると暴君から指示を与えられた一人が、山田先生と勝負をすることになつていて。

あんなことをした人物と勝負になるのかと思つていて、俺の予想を裏切り勝負は圧倒的なまでの強さを見せた山田先生の勝利となる。その華麗な操縦技術は俺と同じ機体を使用しているとは思えないほど華麗なものだった。

才能の差に嫉妬すら覚える。

そんなことと思つていると暴君から言葉が飛んでくる。

「専用機持ちがリーダーになり他の者に指導するよう！」
振り分けはさつき並んでいた列でいいだろつ。

わかつたらさつさと分かれて指導に当たれ。

無駄な時間をとるようななら私が特別な指導を『与えてやる』。

その言葉を聞いて速やかに行動を開始する生徒達。
織斑とデュノアのところは予想道理といふべきか、やけに騒がしい。
対して俺と眼帯の・・・名前なんだっけ？

最初の行動に興味はもてたがその前の自己紹介を聞いていなかつた
ので名前がわからない。

まあいい、独眼竜で。

この二つはやけにおとなしいものだった。

独眼竜のグループはさばさばと指示を与える、こなして終了。
その繰り返しをしていたが、俺のグループは違う意味でおとなしか
った。

その理由は俺のグループの面子にあった。

女子達がやけに大人しい。

それどころかどこか拳動不審だ。

どこかで見た顔だな。

名前は知らないが確かに話したことはある・・・。

何だけ・・・

しばらく指示も『えず自分の記憶をさかのぼる。

そして答えを見つけたときの春の顔はとても悪い物だった事は間違
いないだろう。

「よしひ、誰でもいい。
とりあえずこいつに乗れ。」

そう指示を『与える』と譲り合つてゐる女子達の一人がじぶじぶ工Sを
装着する。

どうか、お前が生贊か。

「Hを装着した生徒をビートじてやめつかと考え、答えを出した。

「まあは歩行だな。
とつあえずここまで歩いて来い。」

そつぱつて少し距離をとり、自分のところまで歩いてくるように指示を出す。

今まで決して見せたことの無いような毒の言動に困惑しながら生贊は少しずつ俺に向かって歩いてくる。

少し時間はかかったが俺の元に無事到着し、ほっと胸をなでおろす。

「よし、JR苦勞様。」

そつぱつて労をねぎらひ言葉をかける。

だが俺の中での本番はこれからだ。

無言で生贊の後ろに回り、Hを装着した体の両脇に手を入れ急上昇する。

突然のことによりの生徒も、そして暴君も言葉をかけるまもなく俺は人が点に見えるほどどの高さまで上昇する。

「えつ・・・・えつ・・?」

「ちゅつ・よ、吉田君ー!？」

生贊が俺に声をかけるがその声を無視してその場で浮遊する。

「えつ・・・・えつ・・?」

そう言ひてこの状況からどうとか脱出しようとすると、無理だらう。

まだ数えるほど、そして稼働時間も限られたような奴がどうにかできるような状態じゃない。

あわててこの生贊の耳元である言葉をちぎりこしてやる。

「わあ、これから楽しい事をしようじゃねえか。」

そう言って俺のとる行動は、もはや俺が上昇する=

ところ方程式が出来てこるものでないが如きとなつた行動、急降下だつた。

「……………」

声になつていなほど甲高い叫びを上げつつあることもできずその

まま急降下に身を任せた。

そして生贊に言葉をかける。

「わあ、地面まで一〇〇三で止めてみなっー。」

そつと手を離す。

そんなことがパニック状態の生贊に出来るはずがない。

手足をバタつかせながら、どうにかしようと必死にあがいている。

そして、地面まで後10mといつとこりで諦め、目を瞑つて激突に覚悟を決める。

だが襲ははずの衝撃がやってこない。

恐る恐る田を開くと地面まで後3mといつとこりで体が止まつている。

周りを見渡してみると、自分の車の足を掴んだ吉田春がそいつた。

「楽しかつただろ？」

その顔はとても楽しそうに、無邪気な子供のような表情だった。

春が手を離すと重力に逆らわず生贊は当然のように地面に落下する。自分が思っていた衝撃よりもはるかに軽減された衝撃が襲ってくる。とりあえず自分の身が安全であることにホッとした。

そして生贊を襲つた恐怖が今になつて訪れる。

その彦にはあふれ出でている涙は鼻水

「えええええええええん」指総角が張総し、体の外は

その光景にその場にいた全員が視線を集めます。

「中田川」

まあ、今日は仕方ないか。

そのお叱りを受けている中、視線をさっきまで俺がいた位置に向けると、泣き叫んでいる生贊の周りには俺が教えるはずだつた他の生徒達が集まり慰めの言葉をかけている。

暴君のお叱りの最中に他の行動をとるなんてことは自殺志願者に等しいだろ？が、今回だけは動かないわけにはいかなかつた。

「お二八、畠山つ……」

暴君の言葉が飛んでくるが歩みを進める。

泣いている生贊の周りにいる奴らのほうに向かい歩を進めると生贊の周囲にいた生徒達から敵を見るような目で睨まれる。

「あつと、何で」としてられるよ……。」

「せうよつ、もつ座我でもしたうびつてくわこのよつ。」

「あんた頭おかしいんじやない？」

様々な暴言が俺に向かつて飛んでくるが、そんなものは敗者の言葉、無いものに等しい無力な言葉だ。

一切視線をそらさずその場にいる全員に向かつて言葉を向ける。

「たまたまそいつだったってだけで、お前らの誰が同じ皿にあってもおかしくなかつたんだ。

そいつに感謝しろよ。

そして、そいつの感じた恐怖が、織斑があの時感じた恐怖だ。

それに耐えられもしねえ様な奴らが馬鹿にするような言葉吐くんじやねえよ。

なんなら今からお前ら全員体験してみるか？」

その言葉を聞いて俺に向かつて言葉を止めしをやめる女子達。そつ。

俺の教えるはずだつた奴らはあの時織斑を嘲笑した奴らだつた。

あの時発した言葉を後悔させてやる。

それが俺の目的で、その目的は達成された。

れこつひつひつひつの気分だ。

「吉田・・・貴様、私の存在を無視とは・・・
楽しい話しあいをする必要があると思わないか・・・？」

「そう・・・」の一言也えなければ。

その後俺は残り全ての時間をグラウンドで正座で説教とこうシユール

な画でかうじて元なつた。

攻める快感（後書き）

まだまだこれからそひらの道を探求していくつもりのものです。
感想お待ちしています。

見えない影（前書き）

変化にいたるための道筋ですか

見えない影

（春）

織斑先生との大変楽しいお話から解放され、己の物ではないようになつた足を無理やり立たせ更衣室に向かつ。

次の授業には確實に間に合わないだろう。

そんなことを考えながら更衣室の扉を開けるとまだ人がいた。デュノアだ。

制服に袖を通し、もうここから出るばかりといった格好で俺と目があう。

「きやつー」

そつと急いで自分の体を隠す。
そつと急いで自分の体を隠す。

「は？」

何やつてんだこいつは？

その行動を無視して着替えを始める。

「ね、ねえ、吉田君？」

な、何もみてないよね？」

質問の意図が見えない。

何もつて、制服の袖に手を通していた姿を見ただけだが？
意味がわからないので聞き返す。

「何もつて、何をだ？」

そう言つと勝手に納得したのか息を吐き、

「うーごめんね。

な、何も見てないならそれでいいんだ。」

は？

わけのわからない奴だ。

この学園にはつづくづく変な奴が集まるらしい。
その中に自分も入っているとは露とも思っていない春である。

「ねえ、吉田君……

授業が始まる前に言つてた事だけど……」

そう言つて俺に言葉を投げかけてくるトヨノア。

ここで話してもいいが、あの担任のありがたいお話をお前も聞くことになるだ？

「放課後と言つたる。

ここで話してもいいが、あの担任のありがたいお話をお前も聞くことになるだ？

そつ言つと状況が理解できたらしこ。

「うー、えー、あー。

そ、そーだね。

じゃあ放課後。

「

そつ言つて扉の前に急いで走り出すトヨノア。

だが不意に立ち止まりこちらを向く。

何のようだ？

そんなことを考えて「」と言葉をかけられる。

「そう言えば今日のお昼に一夏達と一緒にお昼をとりたかったのになつたんだけど、よかつたら……」

相手の言葉を全て述べさせる前に俺の言葉でその先を制する。

「断る。」

まさかの即答にどうリアクションしていいのかわからなかつたのか、扉の前で拳動不審になつてゐるが、すぐに冷静になりその答えを受け入れる。

「そ、そ、う。わ、か、つ、た。
じ、や、あ、ま、た、後、で。」

そう言つて部屋から出て行つた。

このやり取りをしている間も足の感覚は戻らず、俺が着替えて教室に戻るのは次の授業が終わる10分前。

ありがたいお話を再び聞くことになつたのは言つまでもない。

（昼）

もはや自分の指定席になつた屋上の入り口の裏で、【10秒チャージ一時間がんばれ】を口に流し込みながら時間が過ぎるのを待つ。チャージが終わつたので上着の内ポケットからタバコとNIPPO、携帯灰皿を取り出す。

喫煙者の最低限のマナーだ。

公共の場で吸つていふことについては完全無視を決め込みながらタ

バコに火をつける。

自分の時間を満喫していると扉が開く音が聞こえタバコを落としそうになる。

「お、俺たちしかいないじゃんか。」

・・・あいつらか・・・

額に手を当て、この時間が終わってしまうことにがっかりしながらも、その場から動くことなく、ただ時間が過ぎるのを待った。
あいつらはのんきに昼食のようだ。

声から察するに5人。

デュノアの誘いを断つたことは正解だったが、この場所取りは失敗
だつたようだ。

やけに騒がしい昼食をとりながら話しているあいつらの会話を聞いていたわけではない。

だがパー・ティー効果がこの場で適用されたのかあいつらの会話が耳に入ってきた。

「なあ、吉田つてさ・・・」

不意に自分の名前が聞こえたことに驚く。

まさかあれだけのんきな話をしているときに俺の名前が出るとは思つていなかつたからだ。

予想外の出来事について脳が続きを聞こえつと会話を集中する。

「一夏へ

「あこいつって、一体どういう奴なんだうつむか？」

そつ言葉を口にするとセシリアから早速返事が返つてくる。

「どうもひともありませんわ。

あんな男、ただの野蛮人で充分です。
いえ、人とつけるのもおこがましい。
野獸と呼ぶのがふさわしいですね。」

「野獸つて・・・

まあそりやちよつとやりすぎな所もあるけど、今日のことはこの前
俺が言われたことがあつたからだろ?」

「まあ確かに。

やり方に問題はあるが、やつたことせ一夏を馬鹿にした者達への指
導と取れなくもない・・・」

「いや、あれはさすがにやりすぎでしょ。

あの子、あの人数の前で赤つ恥かかされたのよ?
いくつなんでもあれはきついでしょ。」

「もうだけど、あれって吉田なりの優しさだったんじゃないのか
?」

一夏のその言葉に一夏以外の時が止まる。
どうアクションしていいのかわからなかつた。

あれが優しさ？

そうだとしたら、不器用にもほどがあるだろ？。

【自分、不器用ですから。】

その言葉を口にする吉田の姿がまるで想像が出来ない。
一夏以外の全員が困惑の表情を浮かべた。

「あの時、ほら俺が地面に激突した時だつて、俺が激突したのを笑つてる人たちに向けてはあんな態度だつたけど、俺には激突したこと自体を笑つたりはしなかつたろ？
まあ、あの後ちょっとあつたけど・・・」

そういうわれると確かにあの時吉田春は一夏自身を馬鹿にしたような態度はとつていなかつた。

「まあ、そうだな・・・」

「確かに、そうですわね・・・」

糀然としない気持ちもあるが一夏の言葉に賛成の票を投じる一人。

「ちょっと、私そんなこと知らないんだけど。」

「僕もちょっとわからないかな・・・」

その状況を知らない一人はどういう状況だつたのかを説明してもらいたい気分でいっぱいだ。

「いや、一人が転校していくる前に・・・」

状況の説明をすると理解できたのか、しぶしぶ賛成に票を投じる。その後しばらく、あ～でもない。こ～でもないと議論を酌み交わしていると一人が思い出したかのように言葉を口にする。

「あ～、そういえば私、あいつに一回・・・」

そう言って鈴が案内してもらつたことを話し出す。
その話を聞いたあとにリアクションをする。

「なつ、やっぱあいつみんなが思つてるよな奴じゃないんじやないか？」

なんつづ～のが、こう、人と付き合ひのが苦手・・・みたいな？」

そう口にする一夏。

だがそれ以外のメンバーは・・・
いや、苦手な奴は人前であんな恥を書くようなことはさせないだろ
う・・・

そう思いながらも吉田の行動の中に微かな。
本当にかすかな優しさを見た気がした。

「まあ・・・確かに少しばかり印象が変わったか・・・」

「仕方ありませんわね。

野獣から、野蛮人に昇格させてあげてもよろしいですわね。」

「まあ、ちょっとだけいい人つてことにじといてあげるわ。」

「・・・そうだね・・・」

一夏に上手く丸め込まれた気がしながらもそれの中で春のイメージがわずかだが好転的なものに変わった。

一人を除いて・・・

（シャルル）

そんなことやつてたんだ・・・

春の入学してから今日までの行動を聞いて正直驚いた。

あの食事に誘つた時、あそこまで即答で断つたことにも自分の中で納得できる理由が出来た。

そして考える。

ひょっとして自分はとんでもない人物と取引をしようとしているのかも知れない・・・

そんなことを考えながらこの場の空気を壊すことなく会話の中にはいつて話を続けるがその頭の中は、彼どじのように取引をしようか、それだけをただ考えていた。

（春）

今まで自分のいないところでどれだけ陰口を叩かれようと知ったこ

とではなかつた。

それは周りが勝手な期待を俺に押し付けてきただけで俺がそれに応える必要がないと理解できるよつになつたから。

だが今は違つた。

確かに陰口を叩かれたが、俺という人間を卑下する類のものではない。

むしろ、俺という人間を認めるといった驚きの内容だつたからだ。

そんなことを言われたのはいつ以来か・・・

またしてもある人物との映像が頭を過ぎるがそれを無視しながら新しいタバコに火をつける。

その煙は空にとけ、形は一瞬しか残らなかつた。

それと同じく、春の顔には一瞬だけ、ほんの一瞬だけだが暖かな笑みがあつたことを本人も含め誰も知らない。

そして、春の新しい伝説が学園の新聞部によつて知らせられることがなる。

【吉田春！まさかの行動！！！

公衆の面前での調教か！？ペットにまさかの聖水プレイ！？】

その新聞が春の目に入ることはなかつたが、その記事を読んだ一部の変わつた趣味、趣向を持つた生徒の間で春の株価が最高値がとんでもなく跳ね上がつたことはあまり知られていない。

見えない影（後書き）

人間、いないといけなさるのが日常で、褒められることがほ
うが圧倒的に少ないことでしょう。

皆さんも自分がないところで自分がほめられていると
したら、その時何のリアクションもとうずこいられますか？
私には無理でしょう（笑）

真っ黒な商談（前書き）

今回でお一人の（会社との）取引です。
色気のある話で張りませんな（汗）

お気に入りに登録してくださっている方が50名を超えた。
大変ありがとうございます。
これからも呼んでいただけるようがんばっていきたいと思いま
での付き合いください。

真っ黒な商談

（放課後）
（春）

放課後になり、アリーナで織斑が訓練をしている。
目新しい上達はない。

あいつは馬鹿の一つ覚えのように常時雪片を展開し、エネルギーを
消費しながら戦闘をしている。

馬鹿だ。

そんなことを思いながらデータを取っているとデュノアがやつてくれる。

あいつの機体もリヴィア・イヴか・・・

そりゃ自社の作品なのだから当然か・・・

そんなことを考えていると二人が模擬戦を始める。
圧倒的な。

操縦技術の差がありすぎて世代差など関係なかつた。
山田先生と白人達の試合のような一方的な展開で織斑は撃墜される。
ちつ、やはり俺にI-Sを操る才能はないな。

そのことを再確認させられるような試合展開だった。

二人が話している様子を遠巻きに見ている三人。

自分が好意を寄せている相手が同じ男子とはいえ仲良くしているの
が気に入らないようだ。

どうでもいいな。

そう思い記録をつけるのをやめ、離れようとしたときに田の端が大
変面白そうなものを見つける。

真っ黒いI-S

それに乗っているのは独眼竜だった。

それを見つけた春の顔は醜くゆがんでいたことだらう。
さあ、何を見せてくれる？

そんな期待を胸に、再びアリーナでの記録を再開した。

いくつかの言葉を交わしているようだが、ここからでは何を話しているかなんてさっぱりだ。

だがどうやら独眼竜は気に入らなかつたらしく、織斑に向かつて攻撃を仕掛ける。

肩に積んだレールカノンが轟音を奏でる。
直撃だろう。

そう思っていたが、そうはならない。

デュノアが防いだのだ。

ずいぶんお優しいことだ。

そんなことを考えていると放送がかかり、それに興がそれたのだろう。

独眼竜は離れていった。

あれがあいつのエラか・・・

そのデータに興味を示しながら俺は寮へと足を向けた。

（寮）

部屋で俺の時間を楽しんでいると、

コンッコンッ！

どうやら来たようだ。

ドアの隣に張りなおした【クマ出没注意！！】に対し、蹴破るのではなくノックしてきたので間違いないだろう。

ゆっくりと体を起こしドアに向かって足を進める。ドアノブに手を伸ばし、扉の前に立っていた予想通りの人物に声をかける。

「ようこそ。」

そう言って部屋の中に招き入れた。

「そこに適当に座れ。」

デュノアをベットに座らせ、自分はさつきまで座っていた席に腰掛、グラスを手にする。

「えっと・・・

それは何を飲んでるのかな？」

会話の糸口を探して口にした言葉だったのだろうが、俺はそれに対して行動をとる。

黙つてグラスに注いでやり、デュノアに手渡す。

それにおいを嗅ぎ首をかしげながら口に入れる。

「・・・？」

「けほっ！！」

咳き込みながらグラスを置き、自分の中に入ってきた物を吐き出

そうとする。

その光景を見ながらタバコに火をつけ一服する。
だがあまりにも長い間咳き込んでいたので仕方なく水を入れたグラスを差し出す。

「う、ごめん。」

喉が焼けてしまったようだ。

だがそんなことはこれから話すことに関係ないと、飲み終えるのを待つて俺から声をかける。

「で、率直に聞こう。

お前、いやデュノア社いくら出す?」

「デュノア」

まださつき口に入れたもので喉が痛い。

水を飲んでも洗い流せるようなものではなかった。

それは彼は僕の前で飲み干し、再びグラスに注いでいる。

気が付けばタバコまで・・・

そんなことを考えていると彼から直球。

時速300キロの剛速球が投げかけられる。

「で、率直に聞こう。

お前、いやデュノア社いくら出す?」

「けほつ?!

その言葉に思わず咳き込んだ。

もう少し前置きがあると思ったのにいきなり本題とは・・・
本当に彼は一夏が言っていたような人間なんだろうか？
そんなことを考えながらその商談を進めるため返事を返した。

（春）

「えっと、まず君が持っている物が何かを教えてもらえるかな？」

デュノアにそう尋ねられる。

当然だろ？

ゴミみたいなデータに金を積む企業などいない。

俺がこれまで記録したデータの概要を大まかに伝えてやる。

「まずは白式の一次移行後の戦闘データ。

その次にブルー・ティアーズの装備の概要と実戦データ。
甲龍の映像データ。

そして・・・これは多分どこに手を回しても手に入らないだろうな。
この前突然乱入してきた所属不明のISの戦闘映像データだ。」

そう言ってデュノアに概要を説明する。

「・・・それ、全部君が？」

「当たり前だ。こんなこと手伝ってくれるような奴がいるわけない
だろが。」

こんなことが公になれば社会的にただで済むわけがない。

それでもこれだけのデータを収集した春に、テュノアはただ素直に感心した。

「……すいじいね。」

「全部給料のためだと思えばこなせる。
で、わざの質問に戻るが?」

やつぱりトヨノアは会社に確認したであらひ金額を提示してきた。

「100万boroでビリへ、

普通に聞けばその金額で飛びつくだらう。
だが、この男は違う。

篠ノ野東により、日本の通貨価値は跳ね上がり、1\$が10円、1
boroが8円とこう世界金融を崩壊させる事態に陥っているのだ。
そんな中、世界最強の通貨を使用しないような取引など話にならない。

俺は黙つて扉に向かつて歩き扉を開ける。

「帰れ。」

やつぱりトヨノアはあわてて金額を吊り上げてくる。

「120、いや150で・・・」

やつぱりデータが欲しいらしいが、そんなはした金でやるようなデータは無い。

「出で。」

そつ言ひとままだ諦めが付かないのだひつ。

「ちよつと待つて、今会社に電話して聞いてみるから・・・」

そつ言ひで急いで電話をかけ始める。

「もしもし、僕です。

はい、そのデータのことなんですが、提示した金額でほどうにも・・・

・・・

フランス語で話してこむことの言葉はさつぱりだが、感じからするひづても進行速度は期待できない。

デュノアの肩を叩き俺のまつを向かせ言葉をかける。

「おー、俺が言葉を出来るだけ強く訳せ。」

そつ言ひで言葉を口にする。

「よく聞けドテチン、コーラなんて言ひたことは言ひとんじやねえ！」

円だ。それで3000万。

それ以外で取引するつもりは無ねえ！

わかつたらとつとと口座番号控える準備しやがれ、このクソッたれ！！！」

そつ言ひと少し驚いていたようだがその言葉を句とか訳そつと電話の相手に伝えてくる。

そのやり取りを待つていると向こうから提示額が出される。

「えっと……2000で……」

「3000だ。」

二〇〇〇年

「うやつもねえやつだ」と、口に呟く。さすがに、この子は、おじいちゃんの言ふことを理解していない。

「これも云えや。」

そう言って深呼吸をし、確実に電話の向いの相手に聞こえる声量で話す。

「第三世代のこれだけのデータなめてんじゃねえぞ！
他の国でデータがこんな金額で買えるわけ無ねえんだ！
てめえ以外にも取引先なんかいくらでもあんだぞ！
3000なんてはした金で貴重なデータが手に入るんだ、黙つて用
意しやがれ！！！」

じゃねえとこの話は無しだ！
わかつたかこのボケナス！――」

その言葉をテュノアが伝えようとするべく、わざわざ電話の向こうでやけにうるさかったすでに静かになつてゐる。

「……えっと、振込先の口座番号を教えてもらえるかな?」

その顔は完全に伝言板としての役割から開放されてほっとした表情だった。

全ての処理を終え、俺はパソコンで入金を確認する。

「・・・っしー

最高だ！」

そう言ってガツッポーズをとる。

思いもよらぬボーナスだ。

その後ろでぐつたりとしているテュノアがベットで横になっている。

「おーい。」

そう声をかけると、

「は、はい。

なんでしょうー!？」

完全にさつきのやり取りで春という人間に飲まれてしまつたため背筋を伸ばして返事をする。

「・・・まあ、あれだ・・・
あ、あつ、あり・・・」

首をかしげるテュノア。

「~~~~~っ！」苦労！』

そう言つてデータの入ったチップを投げる。

「えつ・・・・・あ、うん・・・・」

その表情には困惑の色が見えたがそれを見なかつたことにすら。

「おこ、お前の口座は？』

そりこ困惑の表情を見せるデュノア。

「えつ・・・・・ぼ、僕お金なんか持つてないよー・？」

手と首を、もげるんじゃないかというスピードで勢いよく振つてい
る。

「誰がお前から金取るなんてといった。

今回の手間賃振り込んでやるからわざと口座番号言へ。』

そりこいつことこのことが理解できたらしい。

「えつ？でも僕はデータをそりつ側で・・・・

「そりやてめえの会社がだらうが。

厄介な使いつ走りの駄賃だと思つてもううとけ。』

そういうと少し考えてから答えを出したらしく。
その顔はわずかだがさつきよりも明るい。

「ハハツ！ そうだね。
じゃあもうひとつおこいつかな？」

そつ言つて俺に振込先を教えてくれ。
少し色を付けておいてやるか・・・
そう思いながら金を振り込んでやる。

「これでこっちで必要な物は大体買えるだろ？
後は好きに使え。」

そつ言つてテュノアを見るとなぜか笑顔だ。

?

なんだ？ 気味が悪いな・・・

そんなことを考えていると、

「一夏の言つてたことも案外的外れじゃないかもね？」

「は？」

「何でもないよ」

そつ言つてごまかされた。

用件が済んだのでこいつを部屋においておく理由も無くなつた。

「おい、そろそろ帰れ。

俺はこれから一杯やって寝るんだ。」

そう言つと物分りがいいのかすんなりと扉に向かつて移動する。

「じゃあね。

また明日。」

「ああ・・・」

そう言つて俺は静かに扉を閉めた。

真っ黒な商談（後書き）

春の中でのお金の感覚は庶民とはかけ離れた物ですのであまり気にしないでください。

次は春に大きく動いてもらう予定です。
どうなるかは更新で「確認ください」。

黒の豪爽と白い傘、壊れた傘

（放課後）

（春）

デュノアにデータを売つてから数日がたち、あれからも相変わらずな日常が過ぎている。

ただ、妙なことがいくつか・・・

一つは女子の反応が以前と違うということ。やけに人の顔を見てこそそと話をしている。

まあそれはいつものことだが、その感じが少し変わった気がする。たつたそれだけだが、それが一つ。

次にデュノアだ・・・

あいつは織斑と同室ということらしい。

限られた環境で同姓の友人が貴重というのもわからなくはない。

だが・・・

あいつの放っている空気というものが・・・

妙にこう・・・色で言つところのピンク色みたいな・・・

それも織斑に対して・・・

考えるのはよそう。

頭をかすめる考えを消し去るよつに今日もデータ収集のためアリー

ナに足を進める。

「アリーナ」

そこにはいつもより多くの人がいる。

なんだ？

そんなことを思いながらその中心に足を進めると途中でいくつかの声が耳に入る。

「ちよつと、あれってやばくない？」

「誰か呼んできたほうがいいんじゃないの？」

何をやつてるんだ？

その言葉の意味するものがわからず、足を進めるとそこで行われていたのは・・・

（一夏）

シャルル達と話していたからいつもより遅くアリーナに向かう。その途中である言葉が耳に入つてくる。

「アリーナで代表候補生同士がやりあつてゐて！
急いで見に行かなきや！」

セシリ亞と鈴か？

そんなことを考えながら俺達もアリーナに向かつた。

アリーナについて俺達が目にしたものは、鈴の攻撃を手をかざすだけで防ぎ、セシリ亞の攻撃をものともしないラウラの姿だった。

その強さは圧倒的で、一人を相手に余裕さえあるようだつた。

「あれは・・・A I C! ?

そんな、もう実用化できる国があつたなんて・・・」

そつと驚いているシャルル。

「どんなものなんだ?」

その問いかけに応えてくれるが難しいことはよくわからない。要は相手の動きを止める。

そのことだけは理解できた。

勝負は決した。

ラウラの勝ちだつた。

悔しかつたがあれがあいつの力などと、視線を落としその現実を受け入れていると、

「なつ、あれ以上は危険だぞ!」

篝の声に再び視線を上げるとラウラはもう動けない一人に対しても攻撃を仕掛ける。

「あれ以上は危険だよ・・・

急いで止めないと…

その時俺の体は反射的に白式を纏い、真っ直ぐ、迷うことなくアリーナのシールドに雪片を衝きたて、そのままラウラに向かって突進した。

その時俺は気付かなかつた。

俺以外にもう一つ、ラウラに向かつて突撃するエリの姿…

「春」

その姿を見たとき、何故だか理由はわからないが体がピットに向かっていた。

何故だらう?

足が急げといつていよいよ徐々に速くなる。

気がつくと全力で走っている。

何故だ?

そんなことを考えながらピットに付き中を見ると状況はさつきよりも確実に悪いほうに傾いていた。

その時からの記憶がない。

一体自分が何をしたのか…

気が付いたとき、そこには暴君がなぜか田の前にいた。

（十数分前）

その光景を見たときに衝動的にトゥーハンドを起動し、真っ黒いISに向かつて突撃を開始する。

そのISは涼やかな顔で俺の突撃を避け、こちらに肩のレールカノンを向けてくる。

知つたことか！

そう思い再び突撃するが俺以外にもう一機ISがあいつに向かつて突っ込んでくる。

「やめろっ……！」

そう言つて突っ込んできた織斑の突撃は奴の前で完全にその力を失

う。

「くつ、動けねえ・・・」

その姿を無視し、俺はジルバを転送する。

そして織斑にかまわず、奴に向かつてぶち込んだ。

「なつ？！」

「くつ？！」

爆発の衝撃がその場を包む。

その衝撃で一人を拘束していたワイヤーが外れ、その場に力なく崩れる一人。

その爆炎の中から織斑が咳き込みながら出てくる。

「何すんだよつ？！」

その声を無視し、奴を探す。

どこだ？

その時センサーがこちらに向かつての攻撃を感じ。急いでその場から離脱し、再び突撃を開始する。

「ふつ、馬鹿め！」

そう言つて俺に向かい手をかざす。

その直後動けなくなる。

知るか。
動け。

あいつに届け。

そう思うが体は動かない。

「さつきの攻撃はよかつたが、その後がお粗末だつたな。」

そう言つて俺に砲弾を食らわせる。

俺は後ろに吹き飛ばされ、その衝撃に流され数回転しながら地面と対面する。

「クソッたれが！！！」

体勢を立て直し、両脇からカトラスを抜き、一気に奴に向かつて攻撃を仕掛けるが、一発も届くことはない。

「この国にいるのは馬鹿ばかりだな。
やはり、こんな国に教官はふさわしくない。」

そう言つて俺に向かつて再び砲撃を繰り出そうとするが、もう一人の攻撃によつてそれがやつてくることはなかつた。

「ちつ、貴様は邪魔だ。
織斑一夏！！！」

そう言つて織斑に向かい直し、攻撃対象を俺ではなく織斑に変更。

両腕からエネルギー状の刃を作り出し、織斑と対峙しようとした時、この世界で最強の女傑が現れた。

「やめろ馬鹿ども……！」

その声に一人はその体を急停止させる。

「馬鹿騒ぎをしてると聞こえてみればなんだこれは！」

その言葉に一人は言い訳を並べて居るが、暴君に一蹴される。

「こんな面倒を起しあれでは困る！』

この続きは学年別トーナメントでつける！

それまでの一切の争いは禁じる！

いいな？』

その言葉に一人はしづしづ納得しているようだ。だが俺は……

「貴様もだ！

いいな？」

そう言葉をかけられるが、体はその言葉に逆らうように行動を起す。

両手にビームを転送。

それを一気に奴に向かって掃射する。

「つ……！」

急いで腕をかざして、が間に合はずビーの攻撃をへりこ数歩足が下がる。

「おーーー！」

吉田つーーー！」

その声はもはや春には届かない。

ビーを投げ捨て、カトラスを再び抜き、それもまた奴に向けて撃ち出し、一気に距離を詰める。

「つ貴様！

教官の命令が……」

その言葉の続きを述べることとなかった。

その続きを述べる前に俺の突進を受け、空を見るように倒れこむ。俺はそのまま馬乗りになり、やつを見下す。

「つぐ、離れろー！」

そう言つて俺に両手の刃を衝き立てるが俺はそれを無視し、ジルバを呼び出す。

「ロケット・マンだ、ベイビーーー！」

そう言つてジルバの引き金を躊躇つ事無く引き、やつと一緒に爆炎に包まれた。

「つぐ、一夏！」

あの二人を引きずり出して来い！」

その声を聞き爆炎の中に歩みを進めようとしたとき一夏は信じられないものを目にする。

「なつ、嘘だろ！？」

二人はあの爆炎の中、まだ戦闘を行っていたのである。

一人は腕からはやした刃を相手に突き刺し、一人は馬乗りの状態で銃を撃っている。

信じらんねえ・・・

その姿に呆然としていると・・・

「早くしろっ！・・・」

その言葉に急いでその間に割って入る。

「おい、やめろ、やめろって！」

そう言つて無理やり一人の間に割つて入り、両方からの攻撃をくらう。

その攻撃をくらいながら、どうにか一人、確実に頭の冷えていないほうを羽交い絞めにしながら引っ張り出す。

「離せつ、離せよこらつ！」

あいつ、あいつは・・・

ここで手を離せば確実に再び突進するだろ？
それに姉の言葉があつたため絶対に離すまいと全力でその体を押さえつける。

「や、貴様っ！」

そいつに向かって突撃しようとしたとき、あの方が前に立ちはだかった。

「いい加減にしろ！
これ以上は許さん！
一人とも武器をしまえ！」

その言葉にやつは納得できないといった顔でしぶしぶ武器を收める。

「離せつ！
あいつをぶつ飛ばすんだよ！
邪魔すんなつ！」

そいつで纖斑の手の中でもだ暴れている春に向かって歩みを進める最強の女傑。

そしてエリの突起を足場に飛び上がり俺の目線と同じ高さまで上がつてくると、

バシンッ！――！

左頬を思い切りはたかれ意識を取り戻させられた。

俺は何をやつていた?
何で体中が痛いんだ?
何故暴君が目の前にいる?

わからない事だらけで啞然としている春に暴君が声をかける。

「馬鹿が、自分が何をしていたか覚えているか?」

そう問われ、

「いいえ、全く。」

その言葉に大きくため息をしたかと思えば頭が遠ざかり、

「ゴンシッ!!

頭突きを食らわせて俺の目の前から離れる。

「もう一度だけだ!
これが最後の忠告だ!
学年別トーナメントまで一切の戦闘を禁止する!
これが守れないようならこの学園から出て行つてもいい。
いいな!」

その言葉を聞き、よく理解できない状況だがYESという以外に選択肢はないようだ。

「わかりました。」

「はい、教官！」

そうしてこの場は収められた。

何をしていたのかまるで覚えていない・・・
だが何故俺はあんなことを？

そつ思いながらピットに向かつとその途中であるものを田にする。

デュノアが抱えていた二人を。

その時理解した。

俺は・・・

そして記憶が飛んでいた間に何をやっていたのかも思い出した。

「クソボケがつ！」

その言葉は誰に対していったものでもない。

ただ自分に対して。

なんと言つていいのかわからない感情に向かつて発したものだった。

そして思つた。

あいつは絶対に負かす。

そう思い早速頭をフル回転させ案を考える。

頭が活性化された状態だったためかやけにスムーズに行動を起こし

てくれ、一つの案が思い浮かぶ。
さつそく行動に移さねえと。

ISを解除し、制服に戻つてから携帯電話を取り出した人物に電話をかける。

『もしもし、どうしたんだい?』

「お仕事の時間だぜベーー、それも旭日重工からの仕事じゃねえ。
俺個人の依頼だ。」

『へえ、君が僕に仕事の依頼なんてね。
一体何があつたんだい?』

「別に何もねえよ。

ただ、どうしても負かしてやりてえ相手ができた。
そいつを負かすための算段を立てたから、それに必要なものを大至
急用意してもらいたい。』

『いいけど、君も知つてるだろ?』
僕は高いよ?』

『かまわねえよ。

前金で500、残りは終わつてからもう500。
もちろん円で。

それでどうだ?』

『乗つた。

で、僕は何をすればいい?』

『これからいつもの用意してくれ・・・』

そつとつて俺はあいつを負かすために考えたことを実現するために行動を起こした。

黒の豪爽と白い傘、壊れた傘（後書き）

春のわからなかつた感情に対してもう少ししたら本人に自覚してもらひつもりでいます。

この流れでアル事について、なんとなくわかつた人もいるかと思いますが、その辺には触れずもう少しあ付け合いください。

ご意見・ご感想お待ちしています。

席には着いた。わあ、ギャンブルの始まりだ！（前書き）

今回は次に向けての繋ぎの話ですので短めです。
ではお会いください。

席には着いた。さあ、ギャンブルの始まりだ！

（春）

あれから日にはあつという間に流れる。

俺はベーーに頼んだものを携え、アリーナの更衣室で静かに時を待つ。

織斑達もいるが自分達もラウラとやることで頭がいっぱいらしい。

椅子に腰掛け自分の行動を振り返る。
やれることは全てやった。

後重要なことは・・・

そう考ながりトーナメントの組み合わせ表の開示を待った。

人数が多いため、二つのグループに分かれ、アリーナを複数使って試合をするようだ。

これを乗り切れば・・・

そう思い同じグループにやつの名前がないかを探す。

Aグループ

吉田春

Bグループ

織斑一夏

Aグループ
ラウラ・ボーデヴィッヒ

パチツ、パチツ・・・

そのトーナメント表を見たときに指を鳴らす。
よしつ、よし、よし、よしつ！

自分の望んだ最高の形だ！

指を鳴らすのをやめ、右手を左手に殴りつける様にして胸の前で合致させる。

バシツ

その音がやけに心地いい。

自分のパートナーの名前など見えていない。

あいつらのパートナーの名前もどうでもいい。
ただ必要なピースの名前を探しただけ。

どうやら神もこの勝負は見たいらしい。

そんなこと考えながらやりあう場所を確認する。

あいつとやりあうのはグループの決勝か・・・

それまでは絶対に負けられない。

俺の考え方通りに事を運べば・・・

そう考へながら自分のやらなければならぬことを再確認しながらやつとの会合のときを待つ。

俺がここの田までにせつたこととはこたつてシンブル。

回避訓練。

ただそれだけだ。

あの後やつとやりあつた記録を確認したが、一対一では勝負にならないだろう。

それもそうだ。

相手は他国の代表候補生一人を相手にして余裕で勝利するよつな化け物なのだから。

そのことを念頭において練つた案だからこそ、回避訓練が何より必要だったのだ。

ベニーに頼んだものの一つはすぐに用意できるといわれたが、もう一つがとんでもないものだつたらしい。

「僕の部屋の機材を全て新調してくれ。

じゃないともうやめる……！」

と、軽くストを起こされかけたぐらいたからな。

だが、あいつを負かせるなら正直今日は報酬なんてどうでもいい。口ハでさえ、今の俺には安すぎる報酬だ。

デュノアからのボーナスもあったことで余裕があつた俺にためらいはなくすぐに機材を手配した。

ベニーが新調した物の伝票を見て、機嫌だったときに面白いものを見せてくれた。

どうやつて調べたのか、あいつのデータだった。
何でも俺達の年齢で少佐というふざけた階級の持ち主だ。
それ以外にも、銃器、兵器のスペシャリスト。
そしてあの暴君の元教え子ときた。

やる前からやる気をそがれる情報を読んでいくと面白いものが目に入る。

「…………へえ…………」

その項目に目を通したとき、確実に俺は悪人の顔をしていたに違いない。

トーナメントが始まった。

程なくして俺の順番になるが、変化がある。

俺は訓練のかいあつてか、ほとんど攻撃を受けなくなつた。

これだけの向上が見られたのもある意味あいつのおかげだろうか・・・

そんなことを考える余裕があるほど回避技術が向上していたのだ。
それとは別の変化もある。

それはいつも戦闘の際には、服用していたある物をトーナメントの開始前に捨ててきたことだ。

このトーナメントでは絶対に使わないと決め、初めて自分の意思で、このアリーナで戦闘を行つている。

体は小刻みに震えるがそんなものに構つている場合じゃない。
さつせとあいつとやりあつんだ。

そのためだけに俺は相手に向かつて銃を向ける。

順当に勝ちを重ね、俺はAグループの決勝にやつってきた。
いよいよ俺のやりたかった勝負の席に着けるといつこじがたまらなく面白かった。

掛け金は充分持つた。

後はあれをするだけだ・・・

その顔は薬も飲んでいないのにひびくのがんだものだった。

席には着いた。わあ、ギャンブルの始まりだ！（後書き）

よくある弓きの形ですがすいません（汗）
次がいよいよ本番です。

原作や、他の方々が書いている小説とはまた違った形で勝負が展開しますが、次がこれまでの話の中で自分が最も書きたかったものになっています。

ただ・・・それを上手く表現できないこの手が憎い・・・
ではまた次の更新でお会いしましょう

それは、今からが勝負だー。（前編）

わは、パーティータイムだ。
ですが、今のうちに終わらせて。
無双は、わざとセド。
あしかばか。
でござる。

「ああ、IJJからが勝負じいだ！」

アリーナに出るとグループ決勝といつともあり、会場の空気は最高潮だ。

そんな中、俺は黙つてあいつを見据える。あいつも俺を睨み返していく。

相思相愛で何よりだ。

そう思いながらあいつに向かい、右手人差し指で頭の横を数回叩き、ジエスチャーで奴にＩＳネットワークに接続させ、プライベートチャンネルを開かせる。

「何のつもりだ？」

その声は当然不機嫌そのものだ。

「いやあ、少し話をしようと思つてな。」

「私にはない。

貴様を片付け、次はあの男を始末する。それで終わりだ。」

そう言って戦闘体制に入る。

「そう言つなつて、ブーダン。」

そう言つと奴の体が一瞬固まる。

そしてその眼光は光を増し、俺を視線だけで殺せそうなものになる。

「・・・なんだと？」

貴様、今何て言った？」「

「もう一度言つてやるよ。

俺の話を聞けよ、ブーダン・ノワール。」

完全におちくっている。

だがやつは俺にかかるこない。

それはまだ試合が始まつていなか。

俺のパートナーがEISを装備できていないためアリーナに姿を現していないので。

まあ、その原因は俺にあるんだがな・・・

パートナーのリヴァイヴを壁に向かって叩きつけて、高価な鉄くずにしてきたので代わりのEISを用意するのに時間がかかっているのだろう。

「そんな風に私を呼ぶな！」

自分を馬鹿にされたのが気に入らないようだ。

ブーダン・ノワールとは豚の血の入ったソーセージのことだ。

「何だ、知つてたのか。

お隣の国の食材だものな。

そりや知つて当然か。

でも一緒だろ？

あれには腸にひき肉と豚の血、後スパイスが適当に詰まつてて、て

めえは人の皮に血と臓物適当に詰まつてゐつて」と。」

そつ言つて奴を笑つ。

ベーーに見せてもらつたデータで、あいつが試験管ベイビーと知つたときにからかうにはちょうどいいと思つた。

「よかつたじやねえか。

お仲間は世界の厨房で大活躍だぜ。
姿、形はてめえとは違つがな。」

「貴様、これが試合だと思つて調子に乗つていなか……？」

その体は小刻みに震えだす。
完全に怒り心頭だ。

だが俺はかまわざやつを馬鹿にする。

「調子になんて乗つてねえよ。

ただブーダンにはどんな言葉を添えてやると見えるかと思つてよ。」

そつ言つと奴は眼帯に手を伸ばし、それを剥ぎ取る。

「貴様は壊す！」

「上等だよ。

」つむきの氣だ、ゲシユタポがつ！

その言葉を放つたとき、俺のパートナーがやつてくる。

「おじっー。」

このトーナメントが始まつて初めてパートナーを見る。

「は、はいっ！
な、何でしようか！？」

驚いているがそんなことどうでもいい。

「あのゲシュタポは俺がやるから、もう一人の相手でも適当にして
うつ！」

そう言つて奴を再び見据える。

「ゲッ、ゲシュ・・・?
は、はいっ！わかりました！」

実際は全然わかつていないが、あの日の出来事で二人の間に因縁があることは学年全員が知つていた。

それで推理して自分の中で答えを出したのだ。

それはあいつも同じだつたのだろう。

あいつも視線を俺から外し、パートナーに向かつて指示を飛ばす。
それが終わると確実にさつきより鋭い目で俺を見る。

左手が震える。

薬も飲まずここまでこれがたが、相手は確実にこちらを殺そつとしているよくなやつだ。

正直言つて超怖い。

ビィ――――！

試合開始だつ！

俺はジーを両手に呼び出し奴に向かつて撃ち出す。
もちろんそんなもの届きはしない。

そんなことはわかってる。

片手をビーからジルバに変更し、奴に向かつて照準を合わせる。

本来両手持ちのジルバは片手で撃つことを想定されていない。
そんなことをお構い無しに俺は奴に向かつてジルバの弾頭を打ち込んだ。

「馬鹿が、まだわからないのか！
私に実弾はきかんつ！」

そう言つて回避動作をしようともせずジルバの弾頭を止めよつとするが、

「グルメ・パーティーは好きかよ、ブータン？

「んがりローストしてやるぜっ！」

そういつた瞬間、完全に俺以外の誰も予想していなかつたようなことが起つる。

ドカアアアアア-----ン！――

その轟音が響き渡ると同時に、アリーナの半分のスペースは爆炎に包まれ、完全に視界を炎によつて失つた。

俺がベニーに頼んだ物の一つだ。

「ジルバの弾頭、それにありつたけの爆薬を詰めてくれ。」

その言葉を聞いたときのベニーの顔はついに春も薬のやりすぎで壊れたのかと、残念な子を見るよつたのを覚えている。

それを気にせず要求を続けた。

そして、対象にぶつかつてから爆ぜるのではなく、一定の距離になつたら自動で起爆するよつにしてくれと追加の要求を頼んだのだ。

その距離は奴の手前5mの距離。
映像データから必死に計算してはじき出した距離だ。

それにある量の爆薬。

あの量の爆薬でおきる、あの爆発をよけられるやつはこの世にいな
い。

そしてそれはエリート少佐も例外ではなく、やつは爆炎に包まれながら後方へと体を動かすしかなかつた。

「くっ、なんて非常識な・・・」

そう言つて視線を動かしこの馬鹿げた攻撃を仕掛けてきたやつを探す。

ガンッガンッガンッ！

銃声が上空から聞こえてくる。

「ちいっー！」

ワイヤーブレードを展開し、俺に向かつて攻撃を仕掛けるが回避が向上した俺をなかなか捕らえることは出来ない。

「どうした？

この数日でEISの操縦がへたくそになつたんじやねえか？
やつぱり、出来損ないなんじゃねえのか、お前はよつ？

そいつ言いながらカトトラスでの攻撃を継続する。

「貴様、どいままで私を侮辱すれば・・・」

「てめえが負けるまでだよ。」のクソボケがつー

その言葉を口にした瞬間、俺の目の前に突然あいつが現れた。
俺には出来ない瞬時加速、それにより突然俺の目の前に現れ思いつ
きり俺の腹に向かつてひざを入れる。

「がはつ！」

その衝撃で俺は吹き飛ばされ前回の真逆の体制に追い込まれる。

俺を見下しながら、楽しそうな顔で、

「心配するな・・・
しばらく動けなくなる程度で済ませてやる。
わたしは大人だからな。」

そう言つてトウーハンドの両腕に自分の両手の刃を突き刺す。
シールドが発生するがそれもお構いなしで全体重をかけ俺の腕に刃
の墓標を立てる。

「ハハハハハハッ！

いい格好だ！

やはり貴様みたいなやつにはそりやつて地面に横たわるさまだよく
似合つ。」

シールドエネルギーが切れ、ISの機能が停止する。
トウーハンドの両手に風穴を開け、満足げに俺を見下す奴に向かつ
て俺に残された、最後の口撃を放つ。

「何が大人だよ。

まだ初潮も来てねえ様ななりしやがつて！」

その言葉は奴にとつても、俺にとつて超えてはいけない一線だつたらしい。

こちちを再び見る目は完全に人殺しの目だ。

「・・・死ねつ！－！」

リニアカノンを俺に向ける。

シールドエネルギーは残つてはいない。

そんな状態でこの攻撃は確実に死ぬな・・・

そんなことを考えていたとき、アリーナに音声が響き渡る。

【勝者

ラウラ、篠ノ之ペア】

その音声に会場が一気に沸く。

どうなつてゐる？

そう思い視線を動かすとそこには掃除用具にやられた俺のペアがいた。

どうやらあいつがやられてくれたおかげで勝敗が付いたようだ。

ホッとしていると、まだリニアカノンは稼動している音を静かに響かせている。

やばいっ、完全に俺ここで死んだ・・・

そつ思つてたところにあのお方の声が響く。

【会場の整備をしなおしたら決勝だ！

時間が勿体無いからやつせと戻れ。】

その言葉を聞いてしぶしぶ砲口を俺から離します。

そのままアリーナから離れようとするやつに声をかける。

「おいつー！」

不機嫌を超えたような表情で俺を睨む。

やはり今ここで死にたいのか？」

その辺は本気だったが、それにびっくりする場合じゃない。

「賭けをしないか？」

そう、ここが勝負どころだつ！

奴はその提案に完全に呆れているようだ。

「何を言つてゐる？

貴様は私に今！ここで！負けたばかりだらうがつ！

そんな貴様と賭けをする必要などない！」

そつぱつと伸び、俺に背を向け離れようと歩みを追加する。

「何勘違にしてやがる。

この後やるてめえと、織斑の決勝の勝敗を賭けるんだ。」

その言葉に動きが止まつたりを見直す。

「まう・・・

で、賭け金は何だ？

ギシッ！

そんな音が聞こえ気がした。

奴も席に着いた音が。

「てめえがかつたら俺をサンドバッグにする権利をやるよ。
今回の続きが出来るぜ？」

「いいだろ。」

そつぱつと二度背中を向けっこから離れようと歩みを二度
声をかける。

「おー、待てよー。
てめえの賭け金をきめてねえだろがー。」

そつぱつとこちらを振り返り、こちらの言つてこる言葉の意味が理
解できないといつコアクションを見せる。

「そんなもの必要ないだろ？
私の勝ちは揺るがん！」

そりゃそうだろ？
代表候補生二人を相手にして勝てるってこと、軍人で、戦いな
れてるっていう自身がそうさせるのだろう。

「なら、賭け金はこっちで決めてもいいか？」

「好きにしろ。」

もうこの話に興味は無いようだが、ここからが俺にとって重要な
んだ。

「じゃあ、織斑が勝った時には・・・」

俺はやつにその条件を飲ませることに成功した。

これで後は玉が落ちるのを待つだけだ。

織斑という玉が、俺がはった目に入るのをな・・・

その前にもう一つだけやることがあったな・・・

そう思い俺はこの勝敗に大きく係わる大役、玉を務めてくれる役者
のもとへ足を動かした。

運以外のあらゆることを塗り潰すのは定石だ。
そうして隙間を埋めていつて、運だけが純粋に残つたとき
それが最高の賭けになる。

れあ、ソレからが勝負じいだー（後書き）

次でけりがつきます。

皆さんは春がしなければならなかつたことがわかりましたか？
そして、春が奴に賭けさせた掛け金が想像できますか？

では次の更新で

ご意見・ご感想お待ちしています。

ジャックポットが必ず出るやー（前書き）

今回は独自解釈の入った内容になります。
ご理解いただけるとうれしいです。

ではどうぞ。

ジャックポットは必ず出るやー。

（アリーナ）
（春）

どうにかやつを席に着かせることができ、舞台が整ったことにホッとする。

「多少綱渡りなところはあつたがこれで・・・」

そんな言葉を口にしながらある場所に向かう。

それはこの勝負の鍵を握る役者の控え室へ・・・

あいつはBグループの決勝を終え、こちらのアリーナの更衣室で体を休めているだろう。

こうこう時にああいう熱血を上手く乗せるには・・・

漫画で読んだような臭い台詞、そういうのが一番効果的だろうか・・・

そんなことを考えながら俺は更衣室の扉を開けた。

（織斑）

吉田とラウラの試合はすぐかつた。

前回もすぐかつたが、今回もそれに負けないような試合だった。

そんなことを考へていると更衣室の扉が開く。

「よお、決勝進出おめでと!」

そつこいながら吉田が入ってきた。

「あ、ああ・・・」

なんだ?

こいつこんなこと言つ奴だつたっけ?

そんなことを考へてると吉田が続けて言葉を口こす。

「あいつを倒すのは俺だと思つたんだけどな。
俺じゃ力不足だった。」

悔しいが、お前に託すしかないんだ!」

そつ言つて顔を伏せ、俺の肩に手を置ぐ。
その手はかすかに震えている。

「お前・・・
わかった。
俺があいつを倒してあのときの雪原と、お前の海じかを晴らしてく
るぜー!」

その言葉を聞いたとき吉田は顔を上げ、俺の眼を見る。

「すまない。

今まであんな態度を取っていた俺が言えた台詞じゃないのはわかっ

てる・・・

だが言わせてくれ！

勝つてこーーー！」

「おうひー。」

そう言つと吉田が手を出してくる。

俺も手を出し、熱く握手をする。

「さうだ織斑、お前に俺が勝利のおまじないをしてやるよ。
ISネットワーク、開けるか？」

そう言つて吉田は自分の首にぶら下げたネックレスを俺に見せる。

「ああ、開けるけど・・・
おまじないって何だ？」

そう言つて、ガントレットを胸の高さまで上げると吉田がネックレス
を近づける。

「何、大したものじゃない。

ただの願掛け程度のものだと思つてくれ。」

そう言つてネットワークを繋げるとあるデータが俺の白式に流れ込
んできた。

「これは・・・時計か？」

そこには数字が並べられてこる。

その時間は少しずつ減っていく。

「時計じゃない。

タイマーだ。

そのタイマーがゼロになったときに攻撃すると、絶対に当たるんだよー！」

そう言ってシャルルも呼ぶ。

「シャルルも来いよ！」

突然声をかけられて驚いているが、

「やうだぜ、シャルル。

こいつを受け取って、俺とシャルルと吉田。三人で戦うんだっ！」

そう言つと少し驚いているようだがこいつはやつてへる。

「うん。

じゃあ、僕にもお願ひしようかな。」

やつて俺と同じタイミングでタイマーを吉田から受け取る。

「よしひ、これで俺たちは一緒に戦う仲間だ。
頼んだぜ、織斑！」

そう言つて俺の肩を叩く。

「織斑なんて呼ぶなよ。

俺のことは一夏でいい。

俺も春って呼ぶからよ。」

そつぱんと春は笑顔で、

「わかったぜ、一夏！」

そう言って再び握手を交わしたとき放送がかかる。

【決勝戦を始める。

両ペアはピットまで集合する。】

「時間だな・・・

頼んだぜ、一夏。」

「任せとけ。」

そつぱんと春たちは別れ、シャルルとピットへと向かった。

シャルルが難しい顔をして声をかけてくる。

「ねえ、一夏・・・

吉田君、なんか変じやなかつた？」

「何言つてんだよ。

あいつとせつかく仲良くなれたんだ。

変なんてこ'うなよー。」「

そつ言つと納得してくれたのか、

シャルルは自分達が出た更衣室を一度振り返つたが、その後にまた俺の方をみて、

「！」、「めんね変な！」と言つて。

決勝、がんばろうね。」「

「ああ！

いよいよ俺たちが望んだ決戦の場だ。
絶対に負けられないからなつ！」

そつ言つて俺たちはピッタへ進ませる足を速めた。

（春）

ロッカーの自分の制服に着替え、ポケットからいつものセットを取り出す。

それを口に銜え、火を点ける。

煙を吸い、そして息とともに一気に吐き出す。

「・・・・・つつつつ！」

ハハハハハハハハハツ！

最高だつ！

あいつ、最高に馬鹿だつ！」

笑いが止まらなかつた。

途中から笑いをこらえるのに必死でぼろが出ないかと心配だつたがそれを乗り切り、今それを放出する。

ヤベツ、腹筋がねじ切れそうだ。

自分でもよくあんなクソ臭え台詞を口にしたもんだと、自分で自分をほめてやりたくなつた。

笑いすぎて田の端に堪つた涙を指で拭い、更衣室に映し出された映像を見る。

そこにはすでに準備ができた両ペアが試合開始の合図を待つてゐる。

「あいつの負け、あいつの負けだぜ。

ジャックポットは必ず出すぞ！

ざまあみろだ、クソッたれつ！」

そう言つて俺は試合開始の合図を待つた。

ビィー――――――

ルーレットは廻った。

さあ、いけっ！

織斑とあいつ、デュノアと掃除用具の一組に分かれて戦闘を行つて
いたが、デュノアと掃除用具の勝負はあつという間に付いた。

実力が違うからな・・・

そんなことを考えながら画面を見る。

そして、俺が望んだ最高の状況、一対一といつ状況だ。

タイマーを確認する。

【04・13】

俺の勝ちが見えてきた・・・

そう考えながら、俺は新しいタバコに火をつける。

（一夏）

くつ、二人がかりでこんなに強いのかよつ！
ラウラの強さに押されながら何とかその攻撃を凌ぐ。
白式の画面に表示されている時間は三分を切つた。
せつかく春が俺たちに託してくれたんだつ！
絶対に一撃だけでも決めてやる！

その思いだけでラウラの攻撃を凌ぐ。

【01：48】

ラウラのワイヤーブレードが俺の脚を捕らえ、俺は遠心力を加えられた力で放り投げられる。

「うわああああああっ！」

壁に激突し、シールドエネルギーも200を切つた。
ヤバイ、攻撃に回すエネルギーを考えたらもうダメージは受けられない。

そんなことを考えていると、

「一夏っ、離れてっ……！」

そつ言われ、急いで前を見る。

そこには俺に向か、リニアカノンを構えるラウラの姿。

「ヤベヅー」

急いで動こうとするが体が壁に食い込み、なかなか動けない。

「終わりだ。

貴様を倒した後、私はあいつを・・・」

その顔はやけにうれしそうに笑っている。

「さうさせないよー」

そう言つてシャルルがラウラに向かつて攻撃を仕掛ける。だがその攻撃に左手を向け、シャルルの攻撃を全て止める。

「学習しない連中だ。

私にそんな攻撃は聞かないと何度も言つたらわかるんだ！」

そつ言つてシャルルの攻撃を無視し俺に向かつて攻撃を撃ち出す。

「まだあーつー！」

シャルルが時間を稼いでくれたおかげで脱出した俺は何とかその攻撃を避け体制を立て直す。

タイマーを見るともう時間が来る。
俺はシャルルに通信を入れる。

「シャルル、このままじゃやられる。

春の願掛けに賭けてみよう！」

「ううん・・・

そうだね。

もつままできたらそれに賭けるしかないよねー。」

そつて俺たちはラウラを挟むよう、一直線に並ぶ。

タイマーはもう一〇秒を切った。

「準備はいいか?」

「もういいだよー。」

「こくぱー。(やつー)」「

そつて俺たちはラウラに向かって瞬時加速を行った。

（春）

やべえー

織斑の実力、読み違えてたか?

タイマーの時間まで持たないんじやないかと不安になりながら画面を見つめる。

それでジャックポットだ。
さつきの試合で痛む体を軽く動かし、腰掛けていた椅子から立ち上がる。

後40秒

俺は口に銜えていたタバコを右手の指に持たせる。
それはまるで指揮者がタクトを持つように。

後20秒

それをご機嫌に振り回し、誰もいない更衣室を歩き回る。

後10秒

画面の前に立ち、ある言葉を口にする。

後9秒

「ああ、

7

魔法が

5

解ける

3

時間だぜ、

1

シンデレラ
姫！」

その瞬間俺の左手は中指を立て画面に向かって見せ付けるような形になっていた。

～ラウラ～

ふんっ、苦し紛れの突撃か・・・
停止結界で動けなくしてから惨めに負かしてやるつ。
そう思い両手を奴らに向かつて出したとき、HISの画面に見慣れない言葉が表示された。

【ディイビー・クロケットは孤独星のもとへ】

何だ？

何のことだ？

自分の専用機となつて久しいがこんな表示は見たことがない。
だがそれが意味するところはすぐにわかったことになった。

キュウーン・・・

ISが力を失う。

動かなくなつたわけではない。

ただ、兵装が全て力を失つたのだ。

もちろんそれは停止結界も例外ではない。

「な、こんなつ・・・」

そのとき私は戦場でのタブーを犯した。
動搖と状況把握を怠つたこと。
それが意味するものは・・・

死神に目をつけられるのと等しい。

（春）

俺の目の前でやつは織斑の斬撃、デュノアの轟撃の挟撃を受けた瞬間だつた。

左手はわざと同じ形のまま、俺は今の気分を表す言葉を口にした。

「してやつたぜえ！――！」

その瞬間、俺がどうしても負かしてやったかったラウラ・ボーデヴィッシュは地面に頭を垂れ地に伏した。

説明すると簡単なことだ。

あいつのHIVのシステムがダウンしたのは俺がやつこくれてやったウイルスせいだ。

それも質の悪いやつ。

そして、織斑達に渡したタイマーがそれが発病するまでの時間を表示したもの。

それが発症し、やつのHIVはただの的になつた。

と、要はそれだけのこと。

ではこいつやつはその質の悪いウイルスに感染したのか・・・

それは試合が始まる前・・・

俺とのプライベートチャンネルで会話を交わしたその瞬間から感染は始まっていた。

通常の会話の回線はINSネットワークに接続しなくても行えるが、プライベートチャーンネルは本人が許可した者としか交わせない。それはINSのコアネットワークを駆使して行われるものだからだ。

俺はそこを衝いた。

コアネットワークはコアに直結している回線だ。

神経みたいなものだらう。

そしてそれは必ずコアに繋がっている。

コアはINSの心臓や脳といった部分だ。

そこにウイルスを流し込んだ。

そんな重要なところに疾患があれば当然体である機体はどうなるか？

答えは簡単。

今やつがおちいつた状態になる。

そのウイルスがベニーに電話で頼んだもの。

そしてストを起こされかけ、機材を新調してまで俺が欲しかったものだ。

今世紀最大の天才の創つた物。

それに効くようなウイルスを作るのは大変だったらしい。

ストが起こしたくなるほどに・・・

だがそれを創ったときのベニーの顔は解けなかつた問題が解けた子供のようにうれしそうなものだつた。

だがそんなウイルスにも弱点があつた。
感染するまでに時間がかかること。

だから俺は時間を稼ぐことができるよう回避訓練をし、プライベートチャンネルを切らせないよう絶えずあいつを馬鹿にし続けた。あいつが避けなければならなかつたのは、俺の銃弾でもなければ、の弾頭でもなく、ただ俺の言葉。

それが本当の弾丸だつた。

どこへ飛ぶかわからない、銀の弾丸だ。

そいつは無敵の化け物も葬ることができ、値の張る無敵の弾丸だ。
だけど、使い時を間違えたら最後、化け物に食われることになる。

そして今回は使い時を間違えなかつた。

それが綱渡りだつたところだろう。

正直死ぬかと思つたからな・・・

あいつを負かす。

それが俺一人の手で実現できなかつたのは正直悔しいが、奇麗事で目的を達成できなくては何にもならない。
できること、使えるものは全て使い、ただ目的を果たす。
それを追求した答えがこれだつた。

そしてやつは今地に伏すという敗者が取るべき格好を取つてゐる。
これで目的は達成だ。

やりがいのあるイカサマだつた。

だが勝ちは勝ちだ。

払つてもらわないとな。

やつに賭けさせた賭け金を・・・

今から楽しみで仕方ない。

今田はどれだけ飲んでも眠れそうにないな。

遠足を楽しみにする子供のような顔で俺は寮に戻り、明日が来るのを待つた。

ジャックポットは必ず出るやー（後書き）

バーチャルシステムのぐだりは出てきませんでした（笑）

期待と違つた方、申し訳ありませんでした。

後ちょっとで今回のいざこざも終わりです。

今までの更新ペースからしたら話が進むのが少し早かつたですが、今後ちょっと更新ペースが落ちると思ったのでとりあえずきりのいい所まではしっかりやっておきたかったので駆け足で更新させていただけました。

これからもお付き合いいただけるとうれしいです。

「」意見・「」感想お待ちしています。

ジャックポットが出た・・・だが一つ忘れていた。俺に運がなかつたところ

今回はおふやけの回ですかね。

お気に入りに登録してくださつた人が60名を超えたので調子につて、調子に乗つたものを書いてしまいました。

次はまじめに書きます。

適当に読み流してください。

ジャックポットが出た・・・だが一つ忘れていた。俺に運がなかつたところ

（春）

本当に眠れずに夜が明けてしまった。

俺はガキか・・・

そんなことを考えながら制服に袖を通して、朝食を食いに向かう。

いつも誰もいない朝一に朝食をとり、そのまま学校へ。

そして屋上で一服。

そこで時間をつぶして教室へ。

それが俺の日課だった。

だが、その日はいきなりその日課を崩された・・・

「よお、春！
早いな。

今から朝飯か？

俺たちも今から朝飯なんだよ。

一緒に行こうぜ！

出会つてしまつた・・・

あの熱血馬鹿に・・・

しかも、昨日の演技を信じ込んでいるもんだから質が悪い。
完全に俺とお友達気分だ・・・

うなだれていると腕を掴まれる。

「よし、飯だ！

朝はしつかり食わないとなー。」

「ちょっと一夏つ、そんなに引っ張つたら危なによつー。」

デュノアの声も届かず俺は引っ張られて、食堂に連行された。
最悪な一日が始まりそうな気がする・・・

そんなことを考えながら俺は食堂へと向かう事になった。

朝食をいつもの倍は食わされ、あの熱血から何とか逃げ、屋上で一
服しようと扉を開けると、そこに居たのは・・・

「あら、野ば・・・

コホンツ！

吉田やんじゅ あつませんの？

一体どうしたんです？

こんな時間に屋上に御用ですか？」

そりゃこつちの台詞だ。

完全に今野蛮つて言おうとしたよな。

はあ～

覚悟は決めた。

不幸よ。

今日だけはとにかく付き合ひにやるよ。

「どうしましたの？」

そいつ言われて顔を向けると白人が不思議そうな顔をしている。

「いやつ……

そうだな……

考えてたんだ……

そうつ！

お前らが一体織斑のどこに惚れたのかを？」

しまつた～！！！

俺は何を言つている！

自分から開けるなつて書いてあつた箱を開けるようなことを……
そんなことを考えながら後悔していると、

「なつ、な、なな……

何でそのことをあなたが知つていますのツ！？」

・・・はい？

こいつ、まさか周りが気付いていないとでも思つていたのか?
そんなことを考えていると白人が動き出す。

「ほ、他の方には何も言つてませんわよねーー?」

慌てふためき、混乱しているようだ。

何とか適当に流すか・・・

「勿論だっ!」

ただ、織斑がその「」とこいつにて話があるとか何とか・・・

そつ言つと白人は生身で瞬時加速を行い、

「それは本当ですのーー?」

俺の目の前までやつてくる。

「おつ、おつ・・・」

「で、一夏さんは今ビルにーー?」

「た、多分食堂に・・・」

「わかりましたわ!」

吉田さん、貴重な情報、感謝しますわーーー!」

そう言つて一瞬で姿を消した。

人間、あんな動きができるのか・・・

そんなことを考えながら指定席に向かい、一服して時間をつぶす。

一服を終え、教室に向かつて足を進める。

この調子だとことん不幸は舞い込んできそうだな。

そんな」とを考えてみると廊下を歩いてくると・・・

「じゅーーーん！――」

その言葉と同時に腰に強烈な衝撃が俺を襲う――

その衝撃の招待を確認しようと振り返るとそこには奴がいた。

「あなたはなんといひで向してんのよ？――

そこに立っていたのは警報機。

こんなところって、ここは廊下だ。

俺がいて何が悪い？

そんなことを考えてこむと警報機からサイレンが発せられる。

「やつだった！――

そんなことはどうでもいいわ――

それよりあなた、セシリアに向言つたのよ？――

そんな」とつて、お前が聞いてきたことだらうが・・・

そんな事言つたらもう一回蹴られそだつたので無難な質問を返す。

「何つて、何だ？
何があったのか？」

そう質問すると、

「あつたのかじゃないわよー！」

あんたから話を聞いたとかでセシリアが食堂にやつてきて一夏に迫つたら、一夏は、

『話？』

特にこれといったことはないけどな・・・

そうだ、セシリアも食つだら?

朝はしつかり食べないとなー!』

つて、いつもの調子で返したらセシリアが暴れだして、食堂使えないくなつちやつたんだからー!!!
どうしてくれんのよー!』

・・・ そつか、不幸はそれほどのレベルで迫つてくるのか・・・
自分に降りかかるうとしている不幸のレベルを確認できることを考えていると、

「聞いてんのー?」

そつ言つて今度はローキックをくいひつ。

突然の衝撃に思わず膝をつく。

本氣で蹴りやがつて・・・
そんなことを思つてこると、

「あんたのせいで朝食食べられなかつたんだから、今度『飯お』んな
かよつー!』
『言つとくナビ、私遠慮ないからねー!』

そつ言つて俺の前から姿を遠ざけていく。

「じとん厄介！」とは舞い込んでくるが、一つ確認できた。

あいつら、すっかり元気なようだ・・・

そんなことを考えながら俺は足を引きずりながら教室へ向かった。

（教室）

椅子に座もたれながら天井を見上げる。

さあ、不幸よ。

これ以上何を起こす？

そんなことを考えていると、不幸は当然の様にやつてきた。

まず教室に入ってきたのは山田先生。

「は～い、みなさ～ん、席についてください・・・」

心なしか、いや確実に元気がない。

いつもあれだけいじられても元気な人が珍しい。

そんなことを考えていると・・・

「ええ～、今日は新しいお仲間を紹介しなければなりません・・・」

ざわつく教室。

また転校生？

そこにざわついているようだが、俺は違った。

何でみんなに嫌そうなんだ？

そんなことを考えてくると教室の扉が開き、そのお仲間がやつてくれる。

「どうも皆さん。

シャルル・デュノア改め、シャルロシト・デュノアです。よろしくお願ひします。」

そう言つて挨拶を決め込む奴のその格好は朝とは違つ、完全に性別を超えたものだつた。

「…………な、何つ……！」

クラス全体が声を上げる。

そこにいつもなら混じらないはずの俺の声まで混じつた。

「と、いつわかれでこれからデュノアさんとこいつと一緒に皆さんと仲良くなれる勉強してこへ」とになりました……

皆さん……

仲良くしてあげてくださいね？」

そういう山田先生に「元気がないのは気になつたが、今そこは正直どうでもいいことだらう。

男じゃなくて女だったのか……

それならあの織斑に出していたピンク色の空氣は許されるな……そんなことを考えていて、周りの言葉を聞いていなかつた。

「ねえ、昨日って、男子がお風呂使ったのよね？」

「それって、もしかして、織斑君と吉田君・・・そして『トコノアさん』が一緒にってこと！？」

「まさか、三人で・・・キャツ／＼／＼

そんな会話をしながら春に視線を向けているが、今日の春は朝から起きている立て続けの出来事の影響で気がついていない。

「一夏つ！――！

貴様、そんなふしだらな事をつ――！」

掃除用具が席を立ち、織斑に向かつて歩み寄る。

「一夏さん・・・

私と大事なお話をしません」と・・・？」

そう言つて白人も立ち上がり、織斑に迫る。

その背後には確実に、達人だけが発することを許されたオーラが出ていたことだろう。

不幸は俺だけではなかつたのか・・・

そんなことを思いながら織斑の追い詰められるさまを眺めていた。その時だ。

不幸は俺に向かつてとんでもない爆弾を投下してきた。

「なんだ、やけに騒がしいな・・・

「こんな国はやはり教室には向かないな・・・」

そう言つて堂々と遅刻してやつてきたあいつに視線が集まる。

「？」

なんだ、私の顔に何かついているか?」

そう言つて自分の顔を触つて確認する独眼竜。

そして一通り触つて確認を済ますと教室を移動しだす。

そして歩みを止めたのは・・・

俺の席の前。

「貴様、昨日の試合ではやつてくれたな・・・」

イカサマがばれたのか・・・

そう思つていると独眼竜は言葉を続ける。

「賭けは私の負けだ。」

そして、私一個人としても負けだ。」

「・・・はい?」

「こいつは何を言つているんだ?」

と疑問に思つてはいると言葉を続ける。

「貴様がやつたことはあの後全てわかつた。」

私を負かすという目的のために、私との試合であのよつなふるまいをした理由も、周りさえも利用し目的遂行にあくまで貪欲なあの精神も、全て理解した。

同じ年齢にあそこまで徹底してできるやつがいると思わなかつた。正直言つて、今回は私の完敗だ。」

そう言つて頭を下げる。

いや、俺は別にそんなことビービーもいこんだが・・・

そんなことを考へていると独眼竜の顔がやたらと近い。

「な、何だ？」

そう言つて顔を遠ざける。

「私はお前を氣に入つた。
日本では気に入ったものを嫁とすると聞いた。
嫁とは妻のことだろう?
ならば婚姻の証を立てなくてはな。
さあ、その唇を私に差し出せっ！」

おかしい。

言つてこねりどが完全におかしいぞ、ここつ。

急いでその席を立ち、逃走を図る。

だが、本当の爆弾はこれからやつてくるのだった。

「吉田・・・」

貴様・・・昨日の試合・・・ずいぶんと好き勝手にやつてくれたようだな・・・」

そう言って俺の前に立ちはだかる、暴君にしてこの世で最強の生命体。

織斑千冬。

その体からは完全に何かが出ていたことを感じ取ることができた。

「えつ・・・・と・・・・。

やつたとは、なんじょつか・・・?

「じりを切ると思つなよ・・・・。

試合中にボーデヴィッヒにしたことだ・・・・。

貴様、あの試合を学校授業の一環といふことを忘れていたようだな・・・・。

授業。

それは生徒に学ばせ、その実力を向上させるためのもの。

そして、教師はその姿を評価し、成績をつけなくてはならない。

「貴様が行つた行為が、正当な評価を受けられなくしたんだぞ・・・・。そのおかげで私は無用な残業という労力を割くことになつた・・・・。その点についてはどう思つ?」

その日は真っ黒い瞳で俺のことを見ている。
見続けていると俺もその間に飲まれてしまつた。

「す、すいませんでした・・・・。」

そう言いつと暴君の表情が一変する。

「やうか、謝罪の気持ちはあるんだな・・・」

やけに優しそうな表情が気になるが、余計なことに触れてはならない。

「はいっ！

勿論です。」

「では、私の言ひことを一つ聞いてはくれないか？」

そう問われ、俺は一瞬で返事を出す。

「よろこんだつ！」

その一言が爆弾の導火線に火をつけてしまったのだ。

「やうか・・・

私は前々から人の体で変形ロボットの変形シーンを見てみたかったんだ・・・」

「・・・はつ？」

その言葉の意味を理解する前に俺の体はサイバトロンの司令官の変形シーンを生身でやらされることになった。

そのとき俺は見たこともない自分の爺さんと婆さんの顔を見たことだけを覚えている・・・

ジャックポットが出た・・・だが一つ戻っていた。俺に運がなかつたところ

はい、おふやけでした。

こんな事書いてると調子に乗っていると見放されてしまつので、次回は本当の続きを投稿させてもらいます。

おふやけして、わあ～せんつしたつ！――！

行動とされた本の（記書き）

やつせこ だいじであります。

いや～、この話の前の話はまつと自分の中で悪ふざけが過わたと
いよいよな内容だったこと、このお詫び申し上げます。

これを読んでくださっている皆様のご期待に応えるべく、悪ふざけ
が過ぎない作品作りをしてきましたのでこれからもお手を合ってくだ
さるといつれです。

今回は春が普通なりあるはずの行程を二段飛ばしで動かします。
ぜひお付き合ください。

行動とそれに伴つもの

（春）

「よせつゝ、これ以上の戦闘行為はやめるんだ、織斑千冬^{メガトロソウ}・・・
はつ？！」

起床

なんだかつ、妙な夢を見ていた気がする・・・

記憶に無いが体の間接部分がやけに痛む気がした。

そんなことを考えながらシャワーを浴び、一服しながら時計を見る。

【08：10】

視線をそらし、再び息を吸い煙を取り込む。
そしてもう一度時計を確認する。

【08：11】

見間違ひじゃないようだ。

そんなことを考えていると、頭が冷静になっていく。

Q・始業は何時からだ？

A・8時30分

Q・ここから教室までは歩いて何分？

A・歩いて10分、走って5分

Q・準備にかかる時間は？

A・普通で10分、急いで5分

Q・今こんなことを考えている時間的余裕はありますか？

A・ギリアウトです

・・・やつべつ！

適当に着替え、急いで部屋を飛び出した。

遅刻なんてしてみる、体がロボットフィギュアの様になる事間違い無しだ。

なぜかそんな気がして真っ黒な肺に無茶をさせ、全速力で教室に向かつ。

（教室）

始業ギリギリに向とか間に合ってゼンゼン言ひながら席で呼吸を整える。

何で朝からこんな疲れなきやならないんだ・・・

そんなことを考えているとすぐに山田先生がやつてきた。

「は～い、みなさ～ん、席についてください・・・」

心なしか、いや確實に元気がない。

何故だろ？、どこかで見たことあるような・・・

そんな感覚に襲われながら、山田先生の話を聞いた。

「ええ～、今日は新しいお仲間を紹介しなければなりません・・・」

ざわつく教室。

また転校生？

そこにざわついでいるようだが、俺は違った。

何であんなに嫌そうなんだ？

そんなことを考えていると教室の扉が開き、そのお仲間がやつてくれる。

「どうも皆さん。

シャルル・デュノア改め、シャルロット・デュノアです。
よろしくお願いします。」

「「「「「「「「な、何つ～?」」」」」」」

クラス全体が声を上げる。

何でだろ？、この叫び声も聞いた気がする。

耳を押さえながら、騒音が通り過ぎるのを待つ。

「と、いづわけでこれからデコノアさんといつひとで話をと仲良しくお勉強していくことになりました……皆さん……

仲良くしてあげてくださいね？」

そういう吉田先生に元気がないのは気になつたが、今そこは正直どうでもいいことだらう。

「ねえ、昨日で、男子がお風呂使つたのよね？」

「それって、もしかして、織斑君と吉田君……そしてデコノアさんが一緒につてことー？」

「まさか、三人で……キャツ／＼／＼

そんな話し声を聞きながら春は教卓を見る。

どうでもいい……

そこには相変わらず、他人の事に無関心な春がいた。

だが、そんな春の興味を引くことが起ころ。

『――夏つ――――つ――』

そつまつてエスを展開した状態で教室の壁をぶち破つてきた警報機。

文明が開発した、扉といつものと、トコトコ相性が合わないようだ。

その光景を呆れながら見ていると、警報機の肩がゅつくつと光を放ち始める。

あれって・・・確実にせばいよな・・・

そう思い自分へやつてくるリスクを最小限にするためトゥーハンドを展開し、衝撃に供える。

「ゴォン！」

衝撃砲は放たれた。

射線軸上の物体をなぎ倒しながら織斑に向かって一直線に駆け抜ける。

ああ～あ、貴重な金づるが・・・

そんなことを考えていたとき、一瞬でそいつは現れた。

独眼竜。

あいつが織斑への攻撃を防いだのだ。
意外な光景にちょっと驚いた。

「貴様、随分と無粋な真似をしてくれたものだな・・・」

そつと警報機を見据える。

「何よつ、一夏に用があつただけで、あんたには関係ないでじょう

がつ！

その通りだ。

クラス全員がそう思つた。

「関係大有りだつ！」

こし一には私の嫁たのたかひ！

クラスの時が止まる。

• • • • • ハ

その時その台詞をはいた本人以外、クラス全員アホ面全開だつた。それは山田先生も含めてだ。

その言葉の意味が理解しきれていないうちに、独眼竜は行動をとる。

織斑の体を抱き寄せ、なんどキスをした。

それと黒に響く黄色い懸念

『...』『...』『...』『...』『...』

そう言つてクラスのガラスにビビをいれる女子達。
そしてそれとは違うリアクションをとる女子達。

「な、何をやつてこむー。(んですのー。) (だよー。) (だよー。)

۱۰۷

そう言つて四人が一斉に動いた。

相変わらず騒がしい。

面倒だなと思う意外に違つ考えが俺の中にはあつた。
胸の辺りがムカムカする。

何でだ？

織斑とあいつが一緒に騒いでいるのが面白くない。

その時に見せる笑顔にムカムカが増す。

その顔が見たいが、織斑といふときに出る顔は見たくない。

なんなんだこれ？

思春期を大人に囮まれ、ある感情に近づく機会の無かつた春が、その感情に気付き始める。

これつて、ひょつとして・・・

俺は・・・

そつ考へていると独眼竜のある言葉が入つてくる。

「私はこいつが『好き』だつ！

気持ちを伝える手段は人それぞれだ。

『好き』な者へ愛情表現するのに、何故他人の許可を取らねばならん！」

独眼竜の言葉が何かの鍵を回した。

そうか・・・

確かにそうだな・・・

そう思い俺の脚は前に向かって歩き出す。

？？？？

「このつ・・・いい加減に・・・」

そう言つてラウラに攻撃を繰り出さうとしたとき、不意にその手を誰かに止められた。

誰？

他の面子は全員視界に入っているのに、何故腕が動かないのだろう?

まさか、A I C?

またやられるのか・・・

そう考えたが、ラウラの両手は別の方向を向いている。

では誰が?

そう考えていたとき、引っ張られるように振り返され、

「なつ！」

その瞬間視界はある人物の顔で覆われた。

卷之三

俺はそいつの腕を掴み、こちらを向かせる。

「なつ！」

何か言葉を口にしたが、体は止まらなかつた。

そいつの口に向かって俺の口を寄せた。

その姿はさつきの織斑と独眼竜の姿とまったく同じだった。

「」「」「」「」「」「」「」

二〇一〇年

わつと全く同じ悲鳴を上げる女子達。

飽きない連中だ。

織斑達も自分達の目の前で起こった光景が理解できないようだつた。そんなことを考えていると、俺と唇が合わさつた人物がプルプルと震えだす。

「どうした？」

そう質問すると、

「今……何したの……？」

「何つて、キスしたぞ。」

「何で……？」

「何でつて、そりゃ好きだからだる。」

「好きって、それは友達的な意味で？」

質問がまどろっこしいな……

そんなことを思いながらその質問に答える。

「イエ、性的な意味で。」

その質問に出題者よりも先に周りが反応する。

「ハ、えつ、エ？」

「どういうこと？」

今織斑君取り合つたんじゃないの？」

「何で？」

いつの間に一人はそこにはいたる関係になつてたの?」

「何?

性的な意味つてどういう風に捉えるの?」

「私のご主人様になつてもらひはずだつたのに・・・」

周りに視線をまわすとそれぞれが勝手なことを口へてそれぞれの世界に入つていく。

クラスが騒ぎ始めるが、そんなことに興味は無い。

俺は視線を戻してそいつを見る。

しばらく口がパクパクと酸欠の金魚みたいなり、顔が青くなつたかと思つたら今度は突然真っ赤になる。

かと思えば今度は俯いた。

どうしたんだ?

そう思つてみると・・・

「く・きよ・・・・い・・・

あ?

その続きを聞くと顔を近づけると・・・

「空氣読みなさこよ~~~~~!」

そう言われ俺はそいつからの攻撃の直撃を頭にくらひで意識が途絶えた。

その日の放課後

またしても新たな伝説が新聞部の手によつて刻まれた。

その号外の見出しにはいつもの名前ともう一人、今度は連名で・・・

ラウラ・ボーデヴィッヒ&吉田春！

クルーな中に潜んでいた熱い情熱！

公衆の面前でまさかの愛の告白！

SキャラからまさかのMキャラへ転身か？ジョブチエンジ

その号外は30分もしないうちになくなつたとか

もちろん本人達はその伝説を知ることは無い・・・

行動とそれに伴つもの（後書き）

ぶつ飛んでいたんじゃないでしょうか（笑）

今回の春のムカつきは片思いをした経験のある人なら誰でも思ったことがあるんじゃないでしょうか？

理解していただけるとうれしいかな～なんて思っています。

ご意見・ご感想お待ちしています。

順応するには時間がかかる（前書き）

どうも。

ひ です。

連日投稿していたんですが、仕事が繁忙期のためパソコンに向かっている時間が減ってしまい、更新ができずに心苦しい思いをしています。

前回のお話で感想をいただき、考え方はやはり人それぞれだということを痛感いたしました。

多くの人に共感していただける作品が作れたらいいかなと思います。

今後はちょっと量と更新日数が減ると思いますが、それでも読んでくださるという方々を大切にしたいと思います。
ではお付き合いください。

順応するには時間がかかる

（週末）
春

あれから数日が過ぎ、俺は旭日重工の俺の部屋で目が覚めた。

何故旭日重工で朝を迎えるのか。
原因は何なんだろう・・・

あの後気を失つたまま一日が過ぎ、次の日を迎えたときに俺を待つ
ていたものは今までの日常とはまるで違つたものだった。

「…………春くくくーん…………」「…………」

何故か俺に声をかけてくるようになつた女子達。

理由はさっぱりわからないが厄介ごとが増えた日常を送る羽目にな
る。

そのせいでどこにいても織斑の様に女子の視線に追い掛け回される
ようになつた。

面倒ごとはごめんだと相手にしなかつたが、寮の中でもそれが続き、
さすがに鬱陶しくなり、金曜の夜から旭日重工の俺の部屋で週末を
過ごすこととした。

春は知らないが、女子達が話しかけてくるようになった原因はこの
前に起こしたことが原因だ。

彼女には織斑と言つ好きな人がいる。

そのことは織斑以外の人間にはすでに明白なこと。

つまり、春は告白した瞬間に失恋が決まつてゐる。

ならば、そこを優しく慰め、あわよくば自分が・・・

と言つ、浅ましい考へで女子達が春に声をかけ始めたということを。
顔はもともと整つていた。

よく見ればかっこいい分類に類する男だ。

だが、言動が近づきにくかつたため周りも距離をとつていていたがあの告白で、春も普通に感情を表現するような人間なのだとわかつたため、それならば・・・と行動に移すようになったというわけだ。

現在の人気は一夏と春、五分五分の派閥に分かれている。

大躍進だ。

だがそんなことを知らない春には鬱陶しいだけだった。

洗面所で顔を洗い、ベニーの部屋に向かつてタバコを吸いながら足を進める・・・

ベニーの部屋の前に立ち、扉を開ける。

そこは相変わらずクソ汚い部屋だ。

「おこじひつ、来たぞー。」

いつも言ひて瓶をかけると、

「ああ、おはよひつ・・・」

いつも言ひて重しつこ体を引きびつけてからつけてくるベニー。
歩きながら周りのものを崩しながらけしからに向かってくる。

「もういい、おこじひつ。

俺が行く。」

いつも言ひて物を崩さないように慎重にベニーの元へ向かう。

「へへ、で今日はデータでも持つて来たのかい?
提出する予定日じゃないけど?」

あぐびをしながら俺の来た用件を確認する。

「別に・・・

学校が面倒だからこっちに着ただけだ。

そのついでにデータ渡しておこうと思つてよ。

それと、後払いの報酬もな。」

そう言ひて封筒とデータを出しつとしたとき、ベニーは田が覚めた
ようだ。

封筒とデータを受け取り、至福の笑みを浮かべている。

「やうかい、やうかい。

それならやうと書いてくれればいいの。」「

バーでも出でやうかい？」

そう言ひてバーカップを探し始める。

「こりねえよ。

そんなに探さなきゃ出てこねえ様なカップで飲み物が飲めるかっ！」

そう言つとバーは探すのをやめ、パソコンに向かい始める。

「まつたく、人の親切は素直に受けるものだと思ひはじな・・・」

そう言つてパソコンに向かい始める。

「今回の僕の傑作はどうだつた？」

パソコンに向かいながら俺に声をかけてくる。

「いい出来だつたぜ。

あれでもう少し早く効果が出れば上出来だつたがな・・・

そう言つて少し悔しそうな顔をする春。

「あれ以上は無理だよ。

僕も自分でよく創ったと思ひよつた一品だつたからね。」「

「あれを提出すつや出せできたんじゃねえのか？」

そう問いかけると、

「あれは趣味で作ったものの一つだ。

その領域にまで会社に乗り込んでもらいたくないからね。もつテータは消しちゃったし。」

平然と言い放つベニー。

あんな大した代物を平然と消したとか・・・やつぱりこいつは変人だ。

そんなことを考えながら「△△部屋を掃除していると、話憶えてる?」

パソコンに向かいながら俺に話しかけてくるベニー。

「ああ、例のわけわからんねえやつな。
それがどうした?」

「臨海学校には間に合ひかへ、そのとき元やせんと確認しておいてくれよ?」

そう言われるが・・・

「・・・何の話だ?」

自分に関係のある行事を全く知らなかつたこの男に、ベニーは再び残念な子を見る目になつた。

順心するには時間がかかる（後書き）

短くて申し訳ありません。

また明日も投稿させていただきますのでお手数ごへだたると幸いです。

そう、それは突然に・・・（前書き）

途中まで一切登場予定の無かつた人物です。
どのように絡んでいくのかは考え中です（笑）
ではお付き合いください。

あと、ラウラとの賭けについてご意見をいただきました。
海についたあたりで書くつもりでいますのでそれまでお待ちください。

内容は

「春らしくない！」
といわれても仕方ないかもしれません、人間関係を円満に運ぶためには必要なこと。
それだけ言つておきます。

そう、それは突然に・・・

（週末）

（織斑）

どうも皆さん。

織斑一夏です。

なぜ俺はこんな状況に立たされているのでしょうか？

後ろでは着替えをしているシャル。

それも、更衣室のカーテンを隔てた中と外という状況ではなく、同じ更衣室の中といつ状況で。

何故？

そんなことを考えながら俺はこの時間が早く過ぎるのを待った。

（春）

マジかよ・・・
面倒な・・・

そんなことを考えながら俺は今大型ショッピングモールの中を歩いている。

サルエルカーゴに、カットソー。
その上にカーディガンシャツ。

そして、何故か頭には肩まであるブロンドの髪。

ベニーのやつ・・・

（数時間前）

「・・・ダッチ・・・それ、本気で言つてるのかい？」

そつとつて残念な目で俺を見る。

「何の話だ？」

記憶に無いものはしょうがないだろ？

そんなことを思いながらベニーの話を聞く。

何でも臨海学校と言う行事があるらしい、そこで専用機持ちは追加装備の確認作業などがあるらしい。

そこで旭日重工も一緒に春に新製品の確認をせよ？と言つておいた。

ついでに他国の最新鋭装備のデータも記録したこときた。

そつちが本命だらうが・・・

思つても口にしないのが大人なところだ。

「で、何かいるのかそれって？」

そう問い合わせると、

「僕が知るわけ無いだろう？

適当にいりそうな物買ひ物してきなよ。

6桁の物だつて躊躇無く買えるだけの給料もひつてゐだらう？」

そう言われ残高を思い出す。

・・・確かに余裕で買えるな。

そつちが早速買ひ物に行ひと部屋を出ようとすると、

「ちょっと待つてよダッチ。

まさか、その格好で行く氣かい？」

「ああ、来たのも似たような格好だぞ？」

そういう春の格好はジャージ。
頭を抱えるベニー。

「～～～あ、もひつ！」

春これに着替えるんだつ！

そう言つて「ミミ部屋をあさり始めるベー。
せつかく片付けたのに・・・

そんなことを思いながらベーの出してきた物に袖を通した。

（現在）

つたく、服はいい趣味してる。

何でいつもこうこう格好しないんだ。

それはいいとして、何でこんなかつらを・・・

そう思いかつら半手を伸ばし、外をうとしたときベーの言葉が頭
を過ぎる。

「君は一応有名人なんだからね。
これぐらいの変装しないと。」

そう言つたベーの顔は間違いなく笑っていたのを憶えていた。

確かに学生の身でタバコを吸つている姿を見られるのは多少まずい
か・・・

そんなことを考えながら一軒の量販店に買い物をしようと足を進め
る。

「？？？」

「なあ、まだ買い物するのか？」

そう言つて聞いかけた相手は俺のほうを振り返り、

「何言つてんのよ。

当然でしょーーーー！」

理不尽な言葉に荷物持ちに決定権が無いことは明白である。

「一夏さんと一緒にいたつて言つ金髪さんに負けないようなハイパー・ウルトラ・インジャラス水着を探すんだからッ！……」

そう言つてまたしても水着売り場へ足を進める。

探すつて、一夏を誘えるかもわからないのに・・・

そんなこといつたら今度は殴られるのでその言葉を胸に留め足を止める。

「じゃあ俺そこベンチで待つてるから、終わったら出でこなよ。」

「はーーーい

そう言つて店に入つていった妹を見送り、ベンチに荷物を置き、腰

をかける。

荷物持ちは疲れるぜえ。

そんなことを考えながら待つていると、視線に入った自販機に入る。

のども渴いたし、また長いだろうから一息つくか。

そう思い自販機に向かつて足を進めた。

ジューースを買い、その場で蓋を開ける。

一口口に入れただけで体が喜んでいるかのよつた感覚がやって来る。

労働の後の一一杯は格別だな。

そんなことを思いながらベンチに向かおうとしたとき、

ドンッ！

「ちよっと・・・

何すんのよつー！」

事件は突然おきるものだ。

やう、それは突然に・・・（後書き）

この後の展開・・・
どうしようか考えながら書くことになると思います。
どうせならここも考えておけばよかつた・・・
ではまた次回の更新でお会いしましょう。

返信をしよう（複数形）

昨日の今日で申し訳ありません。

掛け金のことを今回の中止で記載させていただきます。

流れ的に、ここで乗せておいたほうがいいんじゃない?

と自分の中で出したので前回の話をほつたらかしてこの話を書かせてもらいました。

いや、女の子なのに汗臭い。

そんな話はいかがでしょうか?

支払いをしよつ

現在、ある人物を捜索するという極秘任務を進行中である。

その相手を探す道中で合流した一人、計三人でその相手を捜索する。

「一体、どこに行きましたの？」

「あいつら・・・見つけたらただじゃおかないとだからねっ！」

そう言って私ですら身構えたくなるような殺気を放ちながら捜索活動を行っているわけだが、本来私がこの者たちと行動を共にするなど不可能だったであらう。

これもあいつが持ち出した賭けのおかげなのかもしれないな・・・
そんなことを考えながら数日前の出来事を思い出す。

（数日前）

私は賭けに負けるはずが無かつた。
実力差は明白だったのだから。

だが私は負けた。

何が起こったかは理解できなかつたが、それでも私は負けたのだ。

勝ち続けなければならない。

私は強くなればならない。

それが私の存在理由・・・

そんな私が負けたとき、あいつが言つてくれた。

「別に一人で勝たなくともいいし、一人で強くなる必要も無いだろ？
お前が何かと戦わないといけないのなら、俺も一緒に戦つてやるよ。」

その瞬間、私の心中に私しか座ることの無い席の他にもう一つ席
ができた。

そこに座つたのは敬愛する教官の弟。

織斑一夏

こいつと一緒に居たいと思つた。

そんなことを思うのは初めてだった。

心というものがあるのなら、暖かくなつたこの感情がそうなのだろう。

だから私はあいつを嫁にする。

それは何があつてもだ！

嫁にキスをしたやり取りをした日の放課後、あの一人をアリーナへ
と呼び出した。

「ちょっと、話つて何なのよっ！」

「そうですわつ！』

朝一夏さん「あのようなことをしておいて、私達にも何かするつもりですのつー？」

そう言つて私を睨む二人。

そう言われても仕方ないか・・・

だが、賭けには敗れたのでしっかりと掛け金は払わなくてはならない。

胸を張り、しつかりと二人を見つめる。

「何よ？』

「何ですか？」

そう言葉を投げかけられるがその言葉に対する回答は・・・

「先日は大変失礼な言動を取つた事をここに謝罪いたしますつ！」

そう言つて頭を思い切り下げる。

「「・・・はいっ？」」

突然の謝罪に状況が理解できていない二人。

～トーナメント会場～

「じゃあ、織斑が勝った時には謝罪をしてもらおうか。」

「謝罪だと？」

やつが持ち出した掛け金が理解できなかつた。

何故謝罪？

何に？

どうして？

そんなことを考えていると、

「人間誰かと喧嘩した時はきちんと謝るもんだ。
てめえが傷つけたあの二人にしつかりと謝罪の言葉を。
それが俺の掛け金だ。」

こいつは馬鹿なのだろうか？

自分がサンドバックになるかもしないような状況で、要求するものが謝罪だとは・・・

「いいだろう。

もし私が負けるなどということがあれば、あの二人に謝罪をしよう。
だが、私が勝つたときは遠慮なく貴様の体を破壊させてもらうから

なつ！

そう言つてその場を離れた。

その時頭の中にはやつの体をどうから壊死させるか。
それしかなかつた。

だが敗れた私にそれを行う資格は無い。

賭けには敗れたのだからしっかりと掛け金は払わなければならない。

頭を上げ言葉を続ける。

「あのときの私の行動はこのよつた謝罪では済まされないだらつ。
だから、私を殴つてくれ。
なんなら武器を使つてもらつてもかまわない。」

そつ言つてポケットからさまざまな武器を取り出す。
バタフライナイフにメリケンサック、銃まで選びたい放題だ。

「えつ？あ、ちよつと・・・」

「いえ、私達はそこまで・・・」

そつ言つて私を止めようとする。

「では、どうすれば許してもいいんだ？」

そう問い合わせると、

「そうですね……」の前のことは先ほどの謝罪で許して差し上げますわ。

ですが……朝のこととは別です。

歯を食いしばつてくださいません」とへ

「わうね。私もそれで勘弁してあげるわ。」

歯を・・・？

少し考えた後、何が行われるかが理解できたので己の歯を食いしばり、やつてくるであるが衝撃に備えた。

バチンッ！

一つの音が響いた後にもう一つ同じ音が響く。

「ふう……これで勘弁してあげるわ。」

「やうですわね。

ラウラさんもそれでよろしくいらっしゃい。」

やつて声をかけてくる一人。

「ああ……この程度で済ませてもいいなら」ひかりとしては感謝の言葉を出したいくらいだ。」

そう言つて一人を見る。

「これで朝のことませキャラリしてあがるナジ、一夏は渡らないからね。」

「私もですわ。

行動を起こすことを躊躇っていた私にも落ち度はありましたが、これからは私も迷いません。

誰にも一夏さんを渡したりはしませんわ！

そう言って私に宣戦布告をしてくる。

そつか・・・

これがクラリッサの言つていた強敵と^{じゆ}思ひやしつか。

そんなことを考えながら両者に向かってひらめきも同様に宣戦布告をする。

「私も嫁を誰にも渡すつもりはない。

ここからは正々堂々と勝負だつ！」

そう言って私たちの間にあつた一つの障壁は崩された。

支払いをしよう（後書き）

どうだったでしょうか？

女の子の心の中って多分男には一生かけても理解できないものだと
思い、無理やりかもしれませんのが何とか形にさせてもらいました。

汗臭いのは勘弁してください。

なんとなく、ISならこんな感じの青春模様もありなんじゃない?
と思ったものですから・・・

そして、掃除用具と軽い露出狂のお二人をほつたらかしにしてこの
様なやり取りをしてしまったことを申し訳なく思います。

ですが、この状況の中での一人がいることが不自然に思えたもの
ですから・・・

「意見など」や「あしたらどんどん書き込んでください」。
隨時参考資料として勉強させていただきます。

アンタッチャブル（前書き）

一日ほつたらかしにしてしまいましたが、春の周辺で起つた出来事に戻らせていただきます。

お付き合いください。

アンタッチャブル

（春）

買い物を終え、喫煙所で一服をしている。

ガラスで外の光景が見えるが、周りの視線は喫煙者に對して冷たいものだ。

こうして分煙していても周りの田が厳しいのは時代のせいなのだろうか・・・

そんなことを考えながらガラスの向こうの光景を見る。

こうやって見ると、ガキのこひとはやつぱり違つな。

男女が仲良く歩いている姿もあるが、女子が男子を小間使いの様に扱っている姿も珍しくは無い。

現に、赤い髪の男女が、男に荷物を持たせて歩いている。年を重ねることにあの光景が増えるのだろうか。

そんなことを思つてゐるとある事をふと考へた。

俺は何でエスを動かせるのだろう・・・

そんな考へても答えの出ない難問を考へていると、タバコを吸い終ってしまった。

のども渴いたし、ジュースでも買って帰るか。

喫煙所に入る前に見かけた自販機に向かい足を進めると、そこには

わざかだが、人だかりができていた。

～？？？～

「ちよつと、これびりじってくれんのよつー。」

やつぱわれてモナ。

話に夢中で俺に気付かなかつたのはそつちだらう・・・
そんなことを言つたらもつとひどくなるだらうと思つてその言
葉を心に留め相手の言葉を受け止める。

「しみになつちやうじやない！
クリーニング代払いなさいよつー！」

「せうよ、それとちやんと謝罪してよねつー。」

そう言つて俺に詰め寄る女子たち。

これが文句を言われる状況じゃなかつたら幸せだつたんだらうな。
そんなことを考えながらどうにかこの場をやり過ごすとしていた。
その時、

「邪魔だ。」

そう言つて、俺の腰に突然の衝撃がやつてくる。

（春）

自販機の近くに行くとそこにはわずかな人ばかり。
自販機に並んでいるのか？

そんなことを考えていると、

「しみになつちやうじやない！
クリーニング代払いなさいよつ！」

「さうよ、それとちやんと謝罪してよねつ！」

そんな言葉が聞こえる。

どうでもいいな。

俺には関係ないと、その人だかりを進み人だかりの最前列へ。

そこにはさつき見かけた荷物持ちをさせられていた男がいた。
そしてそいつのいる位置は俺が自販機に向かう道をふさぐようにして立っている。

「……ツ！」

「……！」

まだ言葉を続いている奴らが面倒になり始める。

これが終わるまで自販機は使用禁止か？

そんなことは関係ないと、自分の進路を妨害する者を取り除くための行動に出る。

「邪魔だ。」

そう言って俺は障害物に蹴りを入れた。

普通こいついう状況では弱いものに味方するために身を乗り出すのが定石だろう。

だが、そんなもの知ったことではないと我が道を行くのがこの男だ。

蹴られた男が地面に倒れこんだ姿を見て、周りの時は止まる。

静かになつて何よりだと、自販機でジュースを買ってその場を去ろうとしたが、

「あんた、何なのよー！」

そう言つて春に矛先を向ける女子たち。

「はあ？」

そつ言葉を返すが、その田は何故声をかけられているのかが理解できていない。

「私たちの話に入つてこないでよねー。」

「そうよ、何なのよあんたつー。」

そう言って先を完全に変えてくる女子たち。

知つたことではないと、無視して歩き始めるが、

「ちよつと、私たちの話聞きたこよつー。」

そつ言つて春の肩を掴んで無理やり振り返らせる。

その時彼女達は自分の行いを後悔する事になるとも知りずて手を出してしまったのだ。

IIS学園では皆が知つてゐるこの男に書かれた注意書きを知りずて。その言葉はまるで洗剤の様な注意書きで・・・

『触るな危険！――』

アンタッチャブル（後書き）

続きます。

堪忍袋、その大きさは人それである（前書き）

自分の書いたものがサイト内でどれくらい需要があるのかが気になりました。週間アクセスの多い順で検索したところ、100位以内に入っていました。

他のものでは探すのが大変そうだったので一番わかりやすいものに逃げただけなんですが・・・

やはり、転生者や最強系は人気があるんですね。

上を見ると3万アクセスなどと言う雲の上のような数字もありますが、自分の中では今の現状で満足しています。

読んでくれる人がこうしていくれるだけありがたいことだと思つていますから。

タイトルですが、キリストが一ガロン入るほどの大きさの容器なら、私はせいぜいエコバックくらいの大きさでしょう。春のは・・・せいぜい小銭いれぐらいでしうかね。

堪忍袋、その大きさは人それぞれである

（春）

いきなり肩を掴まれ、振り替えさせられる。

イラッ

軽く苛立ちながらその手を払う。

「何だ？

俺の用は終わつた。

後は勝手にやつてくれ。」

そう言つて振り返り、この場を離れようとすると、

「あんたに無くともあたし達にはあんのよ。
大体、男子が私たちに何口答えしてんのよっ！」

そう言つて再び俺の肩を掴み向き直させる。

イラッ！

まあ、まだこの程度では怒らない。

この程度、この世界ではよくある事だ。

そう思い自分を抑える。

「あんたも一緒に謝んなさいよ。

『愚かな僕達をどうか許してください』ってね！

「超うける。

それいいじゃん。

あんた達、やつせとひこなわこよつー。」

そつ言つて俺達の謝罪を待つ女子たち。

地面に倒れこんだ方は諦めて立ち上がり謝罪の準備をしている。

この時代、女子に逆らうことはできないのだから当然のことだらう。

周りもこの理不尽な態度を見えていないかのように振舞う。

だが、この男には女子たちが威張れる要素など一つも無いことを周りは知らない。

「ちゅうど、早くしなさいよつー。」

そう言って俺の肩を押してきた。

人間、案外簡単に我慢の糸は切れる。

ぶちん

トウーハンドを起動させ、周りにその展開の衝撃が放たれる。

「「キヤツー」」

「「つまつー。」」

その衝撃で女子たちと男子が腰から地面に座り込む。

「つばひえ・・・」

そう言い放つと女子たちを見据える。

「えつ！？」

何つ！？

ちょつと、ビックリして…？」

「私が知るわけ無いでしょっ！？」

女子たちは軽くパニック状態だ。

その光景を見ながらゆっくりとホルスターからカトトラスを抜き取り、
撃鉄を起こし、銃口を女子たちに向ける。

「えつ？

何？」

「嘘でしょ？

ちょつ・・・？」

動搖が激しくなる女子たちに向かって…・・・

「バーン！・・！」

そう言つと同時に思い切り自分の身を小さくする女子たち。

その姿はさつきまでの態度ほど「へ行つたのかと言つぽどこみすぽらしいものだった。

「おー、さつと立て。」

そう言ひて男のまつを見る。

「わっかとこから離れたほうがいいと思ひついだ。
厄介」とに巻き込まれたくないならな。」

そつ言ひでトゥーハンドを解除し、荷物を片手にその場を離れる。
まったく、なんて休日だ・・・

そんなことを考えながら急いで寮に戻るため足を進めた。

？？？

な、何だつたんだ？

その場に取り残された俺の周りの光景はさつきとは一変したもの。

威張り散らしていた女子たちが小さくなり、俺はそれを立つて眺め
ている。

完全に俺が悪者のような構図だ。

その時後ろから声が聞こえた。

「おにい、何してんの？』

そう言って俺を呼ぶ妹の腕を掴み急いで足を動かす。
もちろん荷物は忘れずに片手に持つて。

「ちよつ・・・何やつたのよ、おにい？」

「そんなの、俺が知りたいっての！」

そう言って急いで家に向かつて足を進める。

家に帰り、改めて状況を整理した。

あれって、間違いなくEISだつたよな・・・

男でEISが使えるって・・・

ある事を思い出して友人に向かつて電話をかける。

数回のコールの後、その友人が電話に出た。

『もしもし？

どうしたんだ？』

相変わらずのんきそうだ。

そんなことを考えながら電話の向こうの友人に自分の疑問を問いかける。

「なあ、お前以外にＩＳが使える男って確かもう一人いたよな？」

『ああ、いるぞ。

同じクラスで俺の友達だ。』

友達か・・・

それなら・・・

「そうか。

ならちょっと頼まれてくれないか？」

『ん？

何をだ？』

「伝言だよ。」

そう言ってあの状況を逃れることができた恩人への伝言を友人に頼んだ・・・

ちゃんと届くといいんだが。

そんなことを思いながら電話向こうの友人に言葉を継げる。

堪忍袋、その大きさは人それぞれである（後書き）

次はまた別人物の視点から書かせていただきます。
短めですがよかつたら読んでやってください。

更新時間の変更をお知らせします。

今後は0時ではなく7時に更新予約を入れましたので、その時間からチェックしてもらえればと思います。
何故変更したのか？

理由は簡単です。

更新したばかりの時間が一番チェックされる数が多いのですが、0時だと、次の日に眠たくなるかな？
と今更ながら気付いたものですから。
まあもつと早くに気付くべきだったかもしだせん。
またいつ変更になるかわかりませんが、しばらくおつきあいください。

では次回の更新でお会いしましょう。

そのとれ　はその一部始終を捉えたー（前書き）

今回もまた別人の視点です。
テレビの衝撃映像の言葉のようですがあながち間違っていないと思
います（笑）

やのとせ　はやの一部始終を捉えた！

（千冬）

全く・・・

山田君も頗らぬことを・・・

しかし、あいつは「」いう物が好みなのか・・・
そんなことを考えながら一夏が選んだ水着を持ってレジに向かう。

「あの、織斑千冬さんですよ？」

セーフティレジの店員に声をかけられる。

「やうだが？」

反射的に返事をしてしまったことが間違いだった。

「やつぱりっ！」

あの、私あなたのファンなんです！
握手してもらえませんか？」

しまった。

こういう奴がいるから気をつけなければならなかつたのに、一夏と
いたせいで調子が狂つてしまつたか・・・

そんな事を考えながら、簡単に握手を済ませる。

「あの・・・一緒にいらっしゃった方って、ひょっとして恋人が何かでしようか?」

どうこう教育を受けているんだこの店員は?
失礼と言つて言葉を知らないらしい。

その言葉に対し、一言で切り捨てる。

「そんな事を貴様に応える必要はない。」

そう言つて会計を済ませ店から出て山田君を探す。

一体どこで時間をつぶしているのだろうか?
探すのも面倒だ、携帯で場所を聞いたほうが・・・
そう思い携帯電話を取り出し通話ボタンを押す。

『あつ、織斑先生。

買い物は終わつたんですか?』

「ああ、一夏は先に帰らせたから後は君の水着を選ぶだけなんだが・・・」

『そのことですが、生徒の皆さんと一緒に選んで買つたんで大丈夫ですよ。

今みんなでお茶しているところなんです。
織斑先生もぜひ。』

確かに冷房が効いてはいるが、それと喉が渴くのは別だ。

「わかった。」

私もそつちに向かおう。
場所はどの辺りだ?」

『えつとですねえ・・・』

山田先生に聞いたカフェに向かい足を進めるとその手前で人だかり
ができている。

一体何の騒ぎだ?

学園の影響か、騒ぎを見るとじつにも氣になってしまい足が進む。
そこで見たものは・・・

「えつせえ・・・

そんな言葉を吐きながら工事を見に纏っている者。

あの工事、まさかな・・・

そんな事を考えながらその様子を伺つ。

「えつ!?

何つ!?

ちよつと、ビリビリ」と一?「

「私が知るわけ無いでしょつ!?

そいつの前に立つ女子たちはパニック状態。

銃を抜き、その銃口を女子に向ける。

「えつ？」

「何？」

「嘘でしょ？」

「ちよつ・・・・？」

動搖が激しくなる女子たちに向かって・・・

「バーン！――！」

そつと同時に思い切り自分の身を小さくする女子たち。

何をやつているんだあいつは・・・

そう思いながら眉間のしわを抑えるようにしてこの状況に呆れてい
た。

「おい、さつさと立て。」

そう言葉を放つあいつ。

よく見るともう一人男がいる。

あれは確か一夏の友人の・・・

名前までは出てこなかつたが友人の一人として見かけた事のある顔
だつた。

「さつさとここから離れたほうがいいと思つぞ。

厄介ごとに巻き込まれたくないならな。」

そう言つて離れていくあいつ。

その状況に取り残されていたものも声をかけられ急いでその場を離れていった。

何だ・・・

そういう事か。

瞬時に何があったかが理解できた。

そしてそれがわかつたとき、わずかに頬が緩んだ。

この数ヶ月で随分と変わったものだ・・・

だが、こんなところでエスを起動させた責任はどうせないとな・・・
そう思いながら山田君たちがいるカフェに向かつ。

その足取りは軽く、さつきの店員とのやり取りすらなかつたことになるほど晴れ晴れとした気分で足を進めるのであつた。

そのとれ　はその一部始終を捉えた！（後書き）

春の変化にあのお方の驚きなどが書けたりいなと思い書かせても
らいました。

本来この件自体を書く予定が無かつたので駆け足で書かせてもら
ましたが、理解してもらえたなら幸いです。

ではまた次の更新で「意見・感想お待ちしています。

正直な話、乗り物に強いわけではない（前書き）

バスの中でのお話です。

全く関係ありませんが、私の友人に以前

「バスガス爆発」

と言つ早口言葉を言わせたところ、

「バスバスバスバス」

といわれたことがあります。

バスが連続して走行していたんでしょうか？

関係ないお話でしたが、バスつながりと言つことで・・・

正直な話、乗り物に強いわけではない

六次の隔たりと言つ言葉を知つてゐるだらうか？

人は自分の知り合いを6人以上介すると世界中の人々と間接的な知り合いになれる、という仮説である。

俺はそんな簡単に世界と繋がるとなんて思つてはいない。
俺の世界は恐ろしく狭いものだと思っていたから。

だが、ここに来た影響で俺の世界は思わず形で広がった。

それがどう影響するかは、まだまだこれから時間を重ねてみないと
わからないだろ？・・・

週があけ、俺たちはバスに揺られて臨海学校の宿泊施設に向かって
いる。

バスに揺られると、あの社会見学を思い出す。

何での時・・・

そんな事を考へるが、今更どうかなるようなことでもない。窓の外を流れる景色を見ながらそんな事を考へていると、声をかけられた。

「春、ちょっとといいか？」

「……」こつはまだあの時の演技を信じているのか・・・。そろそろあのときのこととは演技だったと説明したほうがいいだろ？。そつ思い織斑の方を見る。

「あのな、あのときの事だが・・・」

言葉を続けようとした時、先制パンチを食いつく。

「伝言があつてよ、日曜日は助かつた。』

。』だってよ。

その言葉を聞いたとき、俺の思考は停止した。

日曜？

助かつた？

何のことだ？

俺はお前には関わっていなイぞ？

その事を考えようと思考が再開したとき周りが食いついてきた。

「えつ？何？何の話？」

「教えて、教えて！」

そつと聞いて織斑に詰め寄る女子たち。

「ああ、日曜に春が絡まれてた俺の友達を助けてくれたんだよ。」

「その言葉を聞いてもピンとこない。」

「助けた？」

「こいつの友人を？」

「せっぱり理解できないが、せっかく聞いた言葉が今になつて俺の頭に届く。」

「ちょっと聞いた？」

「吉田君が人助けしたんだって。」

「本当につ？」

「本当ならきっと今までの冷たい態度は演技だつたのよ！
きっとあのクールな態度の裏にとんでもなく熱い情熱が・・・」

「私、本気で考えてみようかしら・・・」

「女子たちは織斑の一言でヒートアップしている。
だが、そんな様子が春に届くことは無かつた。」

『

』

「その言葉を理解したとき、顔が熱くなる。」

「その姿はよくある言葉で表現すれば茹鶴のよつたな顔だ。」

「ちよつ、春大丈夫か？」

言葉をかけられるがその言葉が春の頭に届くことは無い。

あいつに言われてからどうにも『』と『』言葉に異常に反応するようになってしまったようだ。

状況を打破しようと織斑の胸倉を掴み、座席に叩きつける。その顔は相変わらず茹蛸状態だが今はこれ以上ここに口を開かせるわけにはいかない。

トウーハンドを部分展開し、ビーをその手に持つ。そしてその銃口を織斑の額に押し付ける。

「額でタバコを吸う？」「教えてやるつか？

いいか？

これ以上その口を開くんじゃねえ！」

その行動は周りから見たら照れ隠し以外の何ものでもないが、それを考える余裕が春には無かつた。

「わ、わかった。

わかつたからそいつをしまえって！」

その顔は驚いてはいたが恐怖が表れた様子は無かつた。

しばらくその状態だったが熱が冷めたとき後頭部にもはや[走番となつた攻撃が飛んできた。

バシンッ！

「馬鹿者！
バスの中を血風団ブランチーバスにするつもりか？！」

そうつて俺に注意を入れる。

今回は全面的に俺が悪いので黙つてのありがたい説法を聞く」とになつた。

その間女子たちが春について今後どうするかを本氣で議論していたことは春は知らない。

（一夏）

びっくりした。

まさか銃を突きつけられるとは……

そんな事を考えながら自分の席に戻る。

「一体吉田君に何を言ったの？」

シャルが俺に聞いてくる。

「そうですねよ？」

何を言つたら銃口を突きつけられるよつた事態になるんですの？」

セシリ亞も身を乗り出しへ聞いてくるが、大したことは言つてない
んだけだな・・・
そんな事を考へてゐるとラウラが席を立つ。

「ラウラ、どうした？」

そつ声をかけると、

「私の嫁に銃口を向けるとは・・・
やはり、あいつは賭けなど関係なく壊しておつか・・・」

そつ声でビビりから出したのか拳銃を持つて春に向かおうとしてる。

「ちょっと待てって！」

俺は大丈夫だから、そんな物騒な物しまえって。」

そつ言つて急いでラウラを羽交い絞めにする。

「しかしだな・・・
！・・・嫁よ、人前でずいぶんと大胆だな。
そんなに私が恋しかったのか?
言つてくれればいつでも・・・」

そつ言つて俺の腕の中でくねくねし始めのラウラ。
何言つてるんだ?

その意味を理解しようと考へてみると、肩にものすごい力をかけら
れる。

「イタイ、痛い！」

その痛みでラウラを離し後ろを振り返ると、

「ねえ、一夏・・・

女の子にそんなことしちゃいけないよね・・・？」

そういうシャルは笑顔だが、何故だろ？
とてもなく怖い。

「一夏さん、レディにそんなに気安く触るものではありませんわよ・・・」

そういうセシリアの髪の毛が重力に逆らっているように見える。

一体俺が何をした？

そんな事を考えながら、何故か俺もバスの中で一人から説法を聞か
されることになった。

正直な話、乗り物に強いわけではない（後書き）

次回は旅館かな？

海かな？

まあそこら辺だと思つてください。

では次の更新でお会いしましょう。

水に浸かるときは水着が裸で（前書き）

お盆休みに突入です。

更新量は若干減りましたが何とか毎日更新できていることがうれしい
い！ です。

気が付けば、ありがたいことにPVが10万人を天元突破！
ユニークも1万人を突破しました。

最初の頃にはどうがんばっても実現不可能な数字が今こうしてある
のは読んでくださっている皆さんのおかげです。
本当にありがとうございます。

ですがここで難題が。

この話をみなさんができるか・・・
少し不安ですがお付き合いください。

水に浸かるときは水着が裸で

旅館に到着し、適当に挨拶を済ませたといひで自分の部屋に案内された。

ありがたいことに一人部屋だ。

あの馬鹿と一緒に部屋だつたらどうしようかと悩んでいたが、それは杞憂だったようだ。

だが、隣の部屋には最強の女帝。

魔王。

暴君。

それらの言葉全てが似合つ女性が控えてくる。

下手なことはできないだろう。

そんな事を考えながら扉を開けた。

そこは驚くほど整えられた一室。

部屋が客をもてなしてくれているように思えるほど綺麗なものだった。

すげえ・・・

旅館と言つものを少しなめていた様だ。
考え方改め、着替えようとする。

もちろん浴衣にだ。

海？

そんなどこに行つて何になる？

暑いだけだ。

そんなどこより涼しいといひで一杯やつてゐるほうがよっぽど楽し

い。

完全に臨海学校に来た学生の自由時間の過^ハりしが春にとつてはそれが正解だつた。

着替える前に持つてきただ荷物の一つを残し、他の物は冷蔵庫にしま
う。

さて、ここでの着は何にしよう・・・

そんな事を考へていたときあることに気が付いた。

お茶菓子はあっても着にならぬよひなものが無い・・・

未成年が泊まる部屋にそんなものがあるはずも無い。
頼んで出てくるようなものでもないか・・・

そんな事を考えしぶしぶ着替えの手を別の服に伸ばし、残していた
物も冷蔵庫にしまい部屋を出る。

何かしらの店は近くにあるだろ^ハ。

そんな事を考へながら私服で旅館から足を伸ばした。

海岸沿いの道を歩いているところの中を無邪氣にしゃいでいる
連中が目に入る。

元気だな・・・

うだるような暑さにうんざりしながらポケットからいつもセッテを取り出し火をつける。

海に夢中でこいつに気付く奴などいないだろ?と思つたからだ。

呼吸と同様に煙を吸いながら歩いているとあることに気がついた。あいつもあそこで遊んでるんじゃ?

そう思い視線を向ける。

だが人数が多くてよくわからない。

「ちつ・・・」

舌打ちをして諦めかけたがあることに気がついた。
あいつのそばにいるんじゃないのか?

イラッとはするがもつとも有力な候補が上がった。

森の中から一本の木を探すのは大変でも、きこりを探すのはそうでもないんじゃないかな?

そう思い一人のきこりを探す。

上半身に布を纏っていなければ・・。

そのきこりは予想通り木を探すより簡単に見つかった。

オイルを塗つていてるようだ。

あの光景、どう考へても恋人にやつてもらひ行為だよな・・・
そんな事を考へていると俺の探していた奴も見つかった。

相変わらず慌しく動いている。

元気で何よりだ。

そんなことも思つたが、やはりあいつと一緒に居るといひを見るのは腹が立つた。

だがあの行動をとつた後、俺のことを徹底的に避けるようにしていったあいつに、これまで人と接していなかつた俺がどうしていいのかもわからなかつた為現状に変化は無い。

訖然としない気持ちであいつらの行動を見ているしかなかつたが、あいつらが海に向かつて歩き出す。

その光景を見ていることできない苛立ちを紛らわせるよつてタバコを吸う。

しばらく見ていると様子が急変する。

あいつの姿が突然海に消えた。

「なつ・・・・・」

その瞬間、ISが砂浜を翔る。

「　　「キヤア～～～！～！」」

「何？何なの？」

「今何か飛んでかなかつた？」

その衝撃で砂が舞い上がり砂嵐のようになり、その衝撃で周りに被害が

出るがそんなこと春は考えていない。

その頭にあるのはあいつの安否。

その衝撃が海に届き、あいつの姿が消えたあたりについた時工Sを解除する。

そのまま重力に任せ海に飲まれる。

服が水を吸い、体が重い。

その重さに任せてその身を沈ませると探していった姿を確認する。

急いで手を伸ばし俺より深く沈もうとする体の手を掴む。重たい体を無理やり浮かせ必死の思いで海面に顔を出す。

「ぶはっ・・・

おいつ、大丈夫かよつー。」

そつ言つてほほを叩くが反応が無い。

そこに織斑もやってきた。

「おい、大丈夫かつー？」

「さつとといつ浜まで運ぶの手伝えつー！」

そつ言葉を吐き、織斑と協力して何とか浜まで運び終える。

少し水を飲んだだけで大したことは無いらしい。

ホツとしたが急いでその場を離れることが頭に浮かぶ。

今は近くにいても気が付けばまたいつも様になるだらう。

避けられたぐらいなり・・・

そう思い歩き出すとしたときあることに気が付いた。

服がクソ重い・・・

下着までびしょ濡れだ。

携帯は・・・

旅館においてきた自分を褒めてやりたくなった。

財布は・・・

ポケットに入つてはいるが札は全滅だ。

いつものセットは・・・

こつちも全滅だな。

出た結論は一つ。

ATMも探さないとな・・・

そんな事を考えながら上半身の服を脱ぎ、絞ると面白こぼど水が絞れる。

それを何度も繰り返し少しはましになつた服に袖を通して、砂浜を離れる。

あんなことがあつやもう深いところまで行かないだろう。

そう思いながら砂浜を離れとりあえずコンビニを探して足を向ける。

／？？？＼

調子に乗つて足をつって体が海に沈んでいく。

嘘でしょ・・・

「こんな」とで・・・

そんな事を考えながら自分の意識が薄れていいくことがわかる。

こんな」とで私の人生終わっちゃうの・・・?

後悔の念だけを抱えその体が海の闇の中に沈もうとしたとき、自分の手を掴まれるのを感じた。

あつ・・・

この手つて・・・

そんな事を考えたとき意識は闇の中に沈んだ。

意識が戻ったときに目に入ってきたのは自分の手を掴んでくれたで
ある人物。

「い、一夏・・・」

「大丈夫か!?」

心配してくれたんだ……

それが無性にうれしかった。

あの状況で自分を助けてくれたことが自分の気持ちを高ぶらせる。

ああ・・・これで周りに人がいなかつたら……

そんな事を考えているとある人物が視線に入つた。

そいつは背中を向けここから離れようとしている。

一体何をしに来たんだろうか？

そんな事を考えていたとき、思ひがけない一言を言われた。

「よかつた……

これも春のおかげだな。」

そう言われた時その言葉の意味が理解できなかつた。

えつ？

一夏は何を言つているんだろう。

あいつのおかげ？

あいつが何をしたつていうの？

そんな疑問を解決するため問い合わせる。

「えつ……

何言つてるの？」

状況が理解できない私に一夏が言葉を告げる。

「一番最初に助けてくれたのは春だぞ？

いきなりESで飛んできたときはびっくりしたけど、そのおかげで

間に合つたんだ。

俺はこゝまで運ぶの手伝つたぐらいだぞ?」

そつぱつ一夏の顔は嘘をついているよつには見えない。

「あ、そう・・・

そつなんだ・・・」

その言葉を聞いたとき少し、いやかなり動搖した。

あれ以来避けていたのにまさか最初に来たのがあいつだつたなんて・
・

心にわずかな罪悪感があつた。

私はあれ以来ずっと避けてきたのに・・・

そんな事を考えながら体を気遣われセシリア達に旅館へと連行された。

水に浸かるときは水着が裸で（後書き）

こんな簡単にフラグが立つんなら世の中苦労しねえよ！

と思われた方もいるかもしませんが、彼女は現在、大好評絶賛織
斑LOVEです。

ですが、自分のために動いてくれる人を嫌うという人も少ないと思
います。

これが春に対する態度の変化の切欠になるといいかなと思います。

私の言い訳は以上です。

いや～難しいですな、恋愛って。

つまみの基本は柿の種（前書き）

お気に入りに登録してくださっている人数が増えたり減ったりと落ち着かない日々を過ごしています、（笑）です。
食事を取りましょう。

夏ですから夏ばてしないようついでに皆さんしっかりと脂っこいものを取りましょう。
そういう私の主食は主にそうめんです。（笑）

つまみの基本は柿の種

濡れた格好で買い物をする姿は周りから見たら異様なものでしかなく、俺の周りに人はいなかつた。

買い物はしやすかつたが店員の手が痛かつたことだけを憶えている。

買い物袋を両手に持ち、旅館に帰るとロビーで声をかけられた。

「あ～、『ダッヂ』だ～。
どうしたの～その荷物？」

一瞬体が固まつた。

『ダッヂ』と言ひ呼び方をするのはベニーだけだったからだ。
誰がその呼び方を？

そう思い視線を向けるとそこにいたのはやけにどうぞうな女がいた。
どうにも行動に機敏さが感じられない。
こひに向かう姿すらゆつくりで軽く苛立ちを覚えるほどに。

だが俺を『ダッヂ』と呼んだことが印象的だったのでそいつが寄つてくるまで動けずになつた。

「買い物してきたの～？
何買つて来たの～？」

やつぱり袋の中身に興味があるようだ。

中身は肴になるような物とわつかの出来事で運氣つてしまつたセツ

ト。

見られるのはまずいと、その中から一つ取り出してやつて渡す。

「それやるからひとつ部屋に帰れ。」

そつまつてチヨコを渡して自分の部屋に戻る。

その光景を見ていた他の女子が、やけに羨ましそうにそのチヨコを見ていたことに春は気付くもしない。

部屋に入る浴衣に着替える。

磯臭くないだろつか？

そう思い袖を通した浴衣の匂いをかぐ。

こうして浴衣を着るのは初めてだが、着てみると随分楽だ。

これから寝巻きはこれにしようか・・・

そんな事を考えていると部屋をノックされる。

誰だ？

これから始まる俺の至福の時間を邪魔しようとした奴に向かってなんていおうか考えながらその扉を開ける。

だが、そこに立っていた人物に俺は何も言えなかつた。

なぜなら僕にいたのは・・・

「夕食の時間だ。

大広間まで来い。」

そう言つて暴君に拉致られ俺は大広間まで連行されることになった。

そこにはすでに多くの生徒が集まり、食事を前に浮かれていくようだつた。

そんな中、一箇所空氣の違つところがある。

一つは織斑が座るであろう座布団の両脇。

もう一つは俺が座る椅子の両脇。

やけにその周りだけ女子が緊張しているように見えた。

織斑の方の事は知ったことではないが、俺の方は簡単な理由だろう。

俺が座るんだ。

その両脇は空気が重くなっているに違いない。
そう思いながら自分の席に座る。

だが春は知らない。

自分の両脇の席に座る女子たちが緊張している理由を。

キス事件（勝手にそう呼ばれているだけ）以来女子たちの中で春の人気は高まっていた。

それに加えて今田の救出劇。

しかも自分が助けたとは名乗らずに颯爽と去つていったその姿。さらにバスの中で見せたあの恥ずかしがる姿、それらの出来事で春派閥の女子たちの中でその人気はピークを迎えていた。

食事を取りながら会話を交えて何とか仲良くなろう。

そう考え気合の入っている女子たちの緊張状態を違う意味で勘違いした春はある事を考えていた。

・・・面倒くせえな・・・

そんな事を考えながらどう食事の時間をすゝむかを考え、答えが出たのでそのタイミングを待つ。

「では、 いただきます。」

『 いただきま～す！』

織斑の号令にあわせて全員が食事の号令を復唱する。

その号令と同時に大広間はやけに騒がしくなる。
それは俺の席の周りも例外ではない。

やつぱりあわないな・・・

そう思い席を立つ。

「えっ、あ、吉田君？」

「どうしたの？」

そつ声をかけられるがその声を無視して大広間を出た。

5分経過

春の立つた席に春の姿は無い。

10分経過

まだ戻らない。

15分が経過したとき、さすがに変だと隣の席に座っていた女子が動いた。

廊下を覗いてみると春の姿は無い。

一体どこに行つたんだろう？

そう思い教師達が食事を取つてゐる部屋を訪ねた。

部屋に戻り、テレビをつけ手には飲みなれたラムを片手に買つてきたつまみを口に入れる。

テレビでは野球をやつてゐる。
別に野球が好きなわけではないが、特に面白いものがやつていなかつたからだ。

場面はノーアウト2塁1塁。
打者は四番とチャンスの場面。
上手くいけば得点のチャンスだろうと画面に集中し、ピッチャーが球を投げた瞬間、俺の頭にも球が飛んできた。

ガンッ！

ストレートで球速160キロほどだらうか。
だがその球は丸くなく、四角く黒く硬い。
やけに見慣れたものだつた。
頭は出血していないうちか？
そんな事を考えながら投手のほうを見る。

その球を投げてきた投手は背後には見える人には完全に人型の幽波スタンド紋が見えていただろう。

「貴様・・・
今が何の時間が・・・
わかつてゐるか・・・?」

言葉を切りながら俺に問いかけてくる暴君。

馬鹿でもわかるだらう。

完全に怒つてこらつしやる。

だが現状なだめる手段を持たない俺にはどうしようもないのでもその
間に答える。

「えつと・・・

夕食の時間ですか?」

そう応えると、

「正解だ・・・

では貴様は今何をしている・・・?」

正解したようだ。

10ポイントいただい!。

次の質問にも答える。

「夕食をとりますが?」

そう言つて机の上に手を向け、それを見よー。言わばばかりに並べら
れた肴を見せ付ける。

「さうか・・・

この臨海学校は授業の一環だ・・・

団体行動は基本中の基本だ・・・

そこで提案だ・・・

その基本を守れなかつた貴様を今ここで肉塊にするのと・・・

大人しく大広間で食事を取ると・・・

どつちを選ぶ・・・?

その問いに選択肢はあるのだろうか?

そう思いながら生きるために必要な選択肢を選ぶ。

「・・・大広間に行きます。」

選択肢を選んだ時に画面に映っていたのは、まさかのトリプルプレーでチエンジになつていた残念な光景だつた。

肩を落としながら再び大広間に向かう。

その道中で言葉をかけられる。

「何故一緒に食事を取らなかつた?

別にさつさと食べて部屋に戻ればこんなこと言つ手間もかからなかつたのに。」

そう問われ、すでに軽く酔つていたせいか普通に返答してしまつた。

「もう長いこと他人と一緒に食事を取りつてことをしてなかつたん

で、正直落ち着かないんですよ・・・」

その言葉を聞いたとき暴君の顔が一瞬曇るが、その後に言葉を口にする。

「だつたら、これから慣れていけばいい。

お前が思うほど他人とどる食事は悪いものじゃないぞ。」

そう言われた時大広間につく。

後ろから肩を叩かれ、言葉をかけられる。

「今のお前は入学した時とは別人だ。

今を楽しみ、大事にしろ。

そうすればきっと今までとは違つものが見えるはずだ。」

そう言つて離れていった。

言つている事はよくわからなかつたが、とりあえずここで食事を取らないと俺は肉塊になることだけは確かだらつ。

仕方なく大広間の扉を再び開けた。

つまみの基本は柿の種（後書き）

私のつまみはどんなものにも基本柿の種がセットです。
私情が出たタイトルで申し訳ありません。
皆さんのつまみはなんでしょうか?
ではまた後日お会いしましょう。

酔つと人はいつもとは違う行動をとるものだ（前書き）

前々回の感想で自分の作品に自身が持てそうな〇 です。

酔つた春が学園の生徒達と初めて絡みます。

前は一日酔いでしたが今回は酔つていますので前回とは違う行動を
とります。

何をするのか、どうぞご覧ください。

酔つと人はいつもとは違う行動をとるものだ

（第4

風情ある旬の食材をふんだんに使われた夕食を味わっていると、急に広間が騒がしくなった。

「…………キヤー…………シ…」「…………」

何事だ？

そう思い視線を向けるとそこで行われていたのは一夏が隣に座っていたセシリアになんと、

あ～ん！

をしている光景だった。

バキッ

箸が折れてしまった。

どうやら安物の箸だったようだな・・・

そう思いながら箸をおく。

その手はかすかに震えているが本人はそんな事を気にしない。

箸が使えないなら次は汁物を・・・

そう思い漆器の器に手を伸ばし、口に向かい傾ける。いい香りだ。

においを楽しみながら口に運んでいたとや・・・

「 「 「 「 「 キヤー————シ————」「 「

「

その言葉に飲んでいたものを噴出し、再び視線を向ける。

今度は隣に座っていたシャルロットにも同様の行為を行っていた。

グシャツ！

器が変形して元の原形をどぎめでいない。

汁も浴衣にかかつてしまつた。

そんな事を考えながら平静を装い浴衣を拭くが、その手の震えは最初よりも激しい。

最初は皆と同様その光景を見入っていた隣の生徒も、簞の様子に気付き、顔色は蒼白そのものだつた。

この器つて、あんな形になるんだ・・・

そんな事を考えながら簞の様子を伺つてゐる。

箸が無くなり、汁物も飲めなくなつた。
後はデザートか・・・

そう思い果物に手を伸ばす。

夏ということで梨が出されている。

これは涼しそうな・・・

そう思いそえられていたフォークを梨に刺した。

知っているだろうか？

梨には解熱作用があるらしく、夏にぴったりの果物なのだ。

その果物を今最も解熱が必要な人物が口に運ぼうとした瞬間・・・

「　「　「　「　「　キャー—————・@^￥^@
“　＝　＃　\$　%　&　！　！　！」　！」　！」

もはや後半は言葉ですらない。

その声の方向に三度視線を向けたとき、口に向けられていたはずの
フォークはその力を失い、完全に重力に従うように方向を変えた・・・

・
箒の起こしたその光景を見ていた隣の生徒も箒の手と同様、震えが
止まらなくなっていた。

超能力を身につけてしまった彼女が見た光景は・・・

ラウラが一夏の膝の上に座り上目使いで一夏の口に向かい、

あ～ん！

と食べ物を向けている光景。

今までのしてもらつていたのとはベクトルが180°。違うその光景
が織斑千冬以外にも幽波紋スタンを使うことができる人物の出現を呼んだ。

完全に私の目の前にある食物を食べる手段を失った。

その場にいることがいたたまれなくなり広間を出て自分の部屋に向
かう。

廊下を歩きながら思ひ。

本当ならあの場所にこるのは私のはずなのに・・・
そう思つてわざわざの光景を思い出す。

その光景と同時に思い出したのは以前に一夏たゞと屋上で食事をしたときに自分もしてもらつた、

あへん！

の光景だつた。

あれは私だつたから・・・
私だけの・・・

やつ想い自分の中の醜い感情に気付かないふりをする。

嫉妬

言葉にしてしまつのは簡単でも、認めてしまえばこれほど醜いものは無い。

その感情が自分を支配して「こぐれ」とこな付かないふりをした。

昔はずつと一緒にたのに・・・
子供のころの光景を思い出す。

あのころは楽しかった。

私が誰よりも一夏のそばに居れた・・・

だが今は違う。

一夏は力を手に入れ、遠くへ行ってしまった。
そして、同じくその力を持つもの達がそばにいる。
それは私では届かない場所・・・
今では私よりも彼女たちの方が一夏に近い・・・
それが耐えられなかつた。

だからこそ、この世で一番頼みたくない相手に頼んでまで欲したの
だ。

一夏と同じ力を・・・

それがあればまた私は一夏と同じ場所に立てる。

その力が手に入ると思うからこそ今日一日一夏の周りの行動に声を
出すことなく耐えられた・・・

明日・・・

そう、明日になれば私も彼女達と同じ場所に立てる!
いや、そこよりももっと一夏の近くに・・・!

そう思い大人しく自分の部屋に向かい足を進めた。

「春」

大広間に戻ったときに田に入った光景に俺は自然と足が後ろに下がる。

織斑の周りにはとんでもない人ばかり。

その半数はすでに人の解する言葉を発してはいない。

・・・これを楽しめと?

とても楽しめそうに無い状況ができていたが、それを見なかつたことにして自分の席に近づく。

両脇の生徒は春が戻ってきた瞬間に声をかけてきた。

「「おかえりっ!」」

その顔がやけに笑顔なことに驚いた。

何故にこいつらは笑顔なんだ?

そんな事を思いながら席に着く。

「い・・・ます。」

小さく言葉を口にし、田の前の食事に箸をつけた。

うまい・・・

最初の一回目に感じた感想がそれだった。
学園の食事も上手かつたが、この食事は面白い。
美味しいと思えた。

何故そう感じたのかはわからなかつたが箸が止まらなかつた。
箸を進めていたときにあることに気が付いた。

両脇の生徒が春と同じように箸を動かしていたのだ。

食事が始まつてから時間がたち、すでに食べ終わつている生徒が何人もいる中でその生徒達の食事の量は春と大差なかつた。

そのとき思ったことが口に出てしまつた。

「お前ら、食べてなかつたのか？」

いつもなら決して口にしないであろう、周りを気にする言葉。
酔つていることが原因だが、本人に自覚は無い。
その疑問を投げかけたときに返ってきた返事を聞いたとき、その言葉を口にしたことを後悔した。

「うふ、吉田君と一緒に食べよつと思つて・・・」

「せつかく隣なんだし、お話しながら食べたくつて・・・」

その言葉を聞いたとき無性に体が熱くなる。

どうしていいのかわからず、真っ赤になるしかなかつた。

こいつらは何を言っている？

誰と食べる？

誰と話すつて？

自分の許容量を超えた言葉を前に唇のとつた行動は、織斑先生に言われたことを実行するものだった。

そつと食べて自分の部屋へ。

一気に残りを食べ、急いで席を立つ。

その速度にさすがに両脇の生徒も付いていけなかつた。

話できなかつたな・・・

そつ思つていたとき、予想だにしていなかつた言葉をかけられた。

それはとても小さく両脇だから聞くことができるのはどの音量だったが確かにその言葉が発せられたのだ。

その言葉を言った本人はすでに広間から姿を消し、その後に残ったのは顔がとんでもなくにやけた女子一人の姿だった。

酔つと人はいつもとは違う行動をとるものだ（後書き）

「どうでしょ、……？」

納得いかないという方もいらっしゃるかも知れませんが、ちょっとと人間味のあるところを表現したかったもので。

春の口からこのお話の中で初めてある言葉が出ました。
どこで出でつたか悩んだんですが、いつこいつ所で出すのもあつなんじ
やないかなと思い初お披露目です。

「」意見、「」もこました、「」おっしゃってください。
お待ちしております。

死刑宣告（前書き）

自分ではわかっていても、他人に言われるときつい事つてありますよね？

今日はそんなお話です。

死刑宣告

（春）

広間を出て、まず最初に向かつたのは男湯。

全身から火が出るほど熱い体を冷ますために水風呂に浸かりに来たのだ。

浴衣を無造作に脱ぎ捨て、下着も脱ぎっぱなし。

脱衣籠の存在を無視して浴室に向かう。

そのまま一気に水風呂に潜る。

数十秒もぐり、冷えた体を震わせながら水風呂からでる。

そう、あれは酔っていたせいだ・・・

俺は飲みすぎたんだ・・・

そう自分に言い聞かせさつきの行動を酒のせいにする。

『

』

一体いつ振りに口にしたのかもわからない言葉が出たことが驚きだつた。

俺に一体何がおきている?

自分でも感じる変化に戸惑いながら風呂に入りなおしそうな体を温めなおす。

「客が来たぞ。

風呂から上がり、部屋でゆっくりとお酒の晩酌の続きをやる。

グラスに氷を入れ、酒を注ぐ。

こいつのせいだ……

そう思こせつきの行動の原因とした物を口に流し込んだ。

それはいつもと同じもののはず。

だがその味に違いがあるみたいに感じる……

皿い・・・

そんな事を感じながら口に入れていたとき、俺の部屋の扉は再び突然開くのだった。

もてなしの一杯を出してもうおつか。」

そう言つて扉を開けたのは隣の部屋の住人の魔王だった。

「部屋、間違つてますよ。」

その声の主を見ずそう魔除けの言葉をかける。
だが魔王にその手の呪文は通用しなかつた。

「やうか、客をもてなさないといつのだな・・・
じうするか・・・

確かに、先日学外で工事で起動させた大馬鹿者を見た気がする
な・・・
教師としてはそんな大馬鹿者に特別指導のメニューを組まなければ
ならないんだが・・・」

その言葉を聞いたとき、魔王の方を見た。

あごに手を当て、ずいぶんと楽しそうな顔をしている。

「どんなおもてなしをお望みでしょうか・・・?」

うそぞうしながら客の注文を聞く。

「お前の持つてきた物の中で一番高い奴を出してもらおつか。
それとつまみだな。
そのもてなしがあればきっと先日何があつたかは醉つて忘れてしま
うだろ?」

ずいぶん楽しそうな顔をしながら言つてくれる。

一番高い酒だと?

せっかく楽しみにしていた俺の一一番の楽しみを奪おうとしたのか」

の魔王は・・・

だが特別メニューは「めんこいむ。

そんな時間があったら候補生のデータ集めの時間が欲しい。

心の葛藤で金に軍配が上がったのでそのとんでもない密を店に招ぐ。

「こいつしゃいませ・・・

」

冷蔵庫で冷やしてあつた酒の蓋を開け、密に注ぐ。

その香りを楽しんで口に入れ。

最初の一一口は俺が・・・

悔しくて涙が出た。

「・・・いい趣味だ。

将来は酒屋か居酒屋でもやるとこ。」

「それは、俺にこの先一回でやつていけなこと叫つてゐるよいひなもん
ですよ・・・」

やつて葉を口にすると魔王が口を開く。

「・・・正直に言おう。

お前の操縦技術は学園に来たばかりのときと比べると確かに向上した。

だが、私の目から見て正直今以上の向上は望めない。

それが私の見解だ。」

生徒の将来を見事に切り捨てる一言だ。

自分の中にあった一つの考えではあつたが、実際に言われると正直つらい。

「よくもまあ、ギロチンの刃を落とす紐を放せますね……でも、そりでしうね。

俺の適性、最初に起動したときから上がってないんですよ……ずっとじ。

最初は上がると思ったんですけど、人生そういうまくはないものらしいです。」

そういつて俺も魔王と同じ酒をグラスに注ぎ、口に入れる。

不味いな……
何故だろう……

そう思いながら自分の口にした苦い言葉と一緒に体の中に流し込む。その後に言葉を続ける。

「最初は俺だけでしたけど、織斑が現れた。

このことから、他の男のEIS操縦者がいつ出てもおかしくないってことは馬鹿でもわかります。

そしてそいつが俺以上の適性だつたら旭日重工は意地でも取りに行くでしょう。

そうなれば俺は必要なくなるわけです・・・
俺は常にゴミ箱に入つていて、いつ来るかわからない回収車が来る
のかを待つてゐるってわけですよ。」

そう言つて一口田を喉に流し込む。

グラスが空になつたので再びグラスに酒を注ぐ。

「・・・その為のあいつらのデータか?」

そう言われた時驚いて魔王の方を見る。

「なつ・・・・」

何で知つているんだ?

そう思わずにはいられなかつた。

いつから?

何故?

そんなことが頭をめぐつてゐる間に魔王が言葉を口にする。

「デュノアにデータを売つたそつだな。

あいつが自分の正体を私に伝えに来たときに一緒に聞いた。

そつ言つて魔王もグラスを開ける。

自分で注ぎながら俺のほうを見据え口を開く。

「自分のしたことかわかっているな?」

そのままは完全にさつきとは違う。

まるで倒すべき敵を見るようなそんな田だ。

「ええ・・・

わかってますよ。

自分の為に仕事をした。

あなたなら理解できるでしょう？

この世の中、綺麗事じや生きていけないってことを。
その身をどれだけ汚せるか。
そりやつて生きていくしかできなつて奴らがいるつてことが。」

そう言つて魔王の田を見返す。

お互に視線はそらさない。

どれだけの時間そつしていつたのかわからなかつたが拮抗を崩したのは魔王だつた。

グラスの中身を一気に飲み干し言葉を口にした。

「そうか。

わかっているならそれでいい。

自分のケツを自分で拭く覚悟があるようだからな・・・

好きにしろ。」

そう言つて再び自分のグラスに酒を注ぐ。

驚いた・・・

てつくり退学に他国への通達などで大事になると思つた。
だがそれをせず、俺の行動を黙認すると言つてこむよつなものなのだから。

グラスを手に持ち、魔王の方に寄せる。

「感謝します。」

そう言つと魔王もグラスを俺のほうに寄せ、

「上手くやれ。

私はかばう」とのできる立場じゃないからな。」

そつ言つて俺達の間でグラスが奏でる心地いい音が部屋に響いた。

死刑宣告（後書き）

こんな感じで理解ある人が多いといいんですけど、あくまでこれは私の頭の中の理想像であつて現実はこううまくいかないかもしれません。

そこら辺を理解していただけたうれしいです。

ではまた明日。

次は割りと軽い話です。

いや、スカスカと言つてもいいでしょう（笑）

初めてのお使い（夜中編）（前書き）

データーベースソフトウェア

ソシテリソフタウェー

そんな音楽をBGMにかけてあげたくなります。

全く関係ないんですけど、ここで個人的なお話をすることを許してください。

皆さんは集英社から出でている

『貧乏神が！』

と書つ漫画をご存知でしょうか？

私は連載当初からの読者なんですが、いやこれが・・・

めちゃくちゃ面白いんですよ。

月間誌に連載されているんですが、現在10巻まで刊行されており、大変面白く読ませていただいております。

画力が高く、さらにネタのクオリティーもかなりのもの。

さらにはやりのネタを取り入れると書つまさにギャグ！

と書つものかと思ひきや、話も作られていて読んでいくと手が止まりずページをめくつてしまふんです。

ブックオフでも漫喫でもかまいません。
ぜひ一巻、いえ、一話だけでも読んでみてください。

ただの一読者にすきませんが、皆さんにもないですか？
他の人に勧めたい漫画って？

それをこの場を使って紹介したこと、大変申し訳ありませんでした。
ではどうぞ、ご覧ください。

初めてのお使い（夜中編）

（一夏）

千冬ねえ、一体どこに行つたんだ？

ジューースを買いに行かされ、戻ってきたときには他のみんなもいなくて、どうしていいのかわからないジューースを手に持つて部屋で呆然としていた。

これ、飲んでいいよな・・・

そう思いジューースの蓋を開ける。

美味いな

そんな事を思いながらテレビを見ていたが、千冬ねえはまだ帰つて来ない。

一体どこに行つたんだろう？

そう思い旅館の中の散策を開始した。

廊下、中庭、ロビー、離れと一通り探したがいつも通り姿はない。

他の先生の部屋かな？

そんな事を思いながら自分の部屋に戻ろうとしたとき、探し人の声が聞こえた。

「しかし、お前は洋酒ばかりでビールは飲まないのか？」

そんな言葉が聞こえ足を止める。

そこは俺達の隣の部屋。

春の部屋だ。

何でこんなところから？

そう思い扉を開けた。

「ああ？」

「んっ？」

同時に二人からの視線をあびちょっと驚いたがさらに驚いたものが
あつた。

何で酒瓶が転がってるんだ？

そう思いつていると何事もなかつたかのように会話を続ける一人。

「ビールなんて小便と一緒にいくら飲んでも酔えやしねえ。
大人だつたら洋酒ラムでしょ？」

そう言って新しい酒瓶を持ち出す春。

一体この人たちは何してるんだ？

そう思つていると完全に俺を無視して会話が進む。

「ほう・・・

それはビールを飲んでいる奴は餓鬼だと言いたいのか?」

あつ、やばい。

千冬ねえの目が変わった。
とめたほつがいいよな・・・?

そう思つたが多分俺のことを無視して会話を続ける一人に何を言つても無駄だろうと諦めその様子を眺める。

「別に、そんなことは言つてませんよ。

ただ、年下オレが飲んでるような物が飲めないってんなら、明日からスレーヴはやめて、山田先生みたいな女の子つて格好して授業したらどうですか?

リボンなんかつけたりして週末には野原でピクニッケ。

花でも積んだりして

」

春がそう言葉を続けようとした瞬間、千冬ねえが酒瓶に直接口をつけゴクゴクと飲み始める。

瓶の中身が半分ほどになつたぐらいでその瓶を口から離し春を見て不適に笑う。

「貴様こそ、女の私にできたことができないような玉無しではあるまい?

どうする?

無理に、とは言わないがな。
できないのならお前にズボンをやめてスカートを履い

」

千冬ねえが今度は逆に春を馬鹿にするような言葉を口から出やうと

した瞬間、春もその酒瓶を口にして一気に残りを飲み干す。
そしてその後に千冬ねえに向かい

『どうだ?』

と言わんばかりの顔をする。

あの一人、明日からが臨海学校の本番つてことわかつてゐるのかな?
そんな事を思つていると一人に同時に睨みつけられる。

「何ぼやつと立つてやがる!」

「は、はいっ!?

春に突然声をかけられ思わず背筋が延びる。

「一夏・・・
そんなどこで立つている暇があるなら・・・」

千冬ねえも同様に俺に声をかけてくる。

「やつとつまみ買つて来い!...!」

そう言つて俺に向かつて二人同時に財布を投げつけてきた。
それが顔に当たり、その場に座り込む。

痛いつて。

そんな事を思つていると春から、

「一キロも南に歩きや」「ンベーあるからやつせと行って来い。」

その言葉の後に千冬ねえからも言葉が飛んでくる。

「追加の酒も貰れるなよつー。」

そう言ってグラスに酒を注ぎ始める一人。

もつ、勝手にしてくれ・・・

そう思いながらも夜中のお使いに出かけるのであった。

初めてのお使い（夜中編）（後書き）

スッカスカやぞ！

ザブン ル風に言いたいですね、この言葉。

ちょっとシリアルな物を書くとその反動でキャラ男の様な話にエン

カウントするような気がします。

直したほうがいいでしょうか？

ご意見ください。

お待ちしています。

以前にも話した。人間、興味のあるもの以外はひとつでもここ・・・

（春）

昨日の飲み会を後悔しながら集合場所に向かつ。

40。越えの酒を一人で6本も空けるものではないな・・・

そんな事を考えながら集合場所で頭を抱える。

それは織斑先生も同様のようだ。

眉間に手を押し付けどいか今の状況を紛らわそうとしている。

そんな中時間が来たようで臨海学校本番が始まる。

「ああ～、みんなそろっているな？」

そう言つ暴君の言葉に力はない。

だがその言葉に返事を返すのはいいのでそのまま話を進める。

「今日は昨日までは違ひ本格的に授業を開始する。

一般生徒は各班に別れISの検証と確認作業。

専用機持ちは自國から送られてきた専用装備の確認だ。
無駄話をする暇があつたら各員行動に移れ。

今日の私は機嫌が悪い・・・

その言葉を聞くと生徒は蜘蛛の子を散らすように別れていった。
さすが暴君だ。

そんな事を思いながら自分に送られてきた専用の装備を確認に用意されたテントに向かつ。

そこには二つかの装備と武装。

その中でいちばん目を引くのはアレだろ？

そう想いベーーとの話にも上った装備に近寄る。

それはエリとしては正直どうなのだらう・・・

そういう装備だった。

それは足と背中に装備し水中で行動することを想定されたもの。

その名は『ラグーン』

脚に装備する部分は通常状態のトゥーハンズの脚の3倍はあるつか
とこう大きさの脚。

そして背中につける部分は背中に背負つ様にして装備する大型のロ
ンテナだった。

こいつをこいつみたい如何しろ？

そつ息息マニユアルに田を通す。

脚につけるせりにでかい脚の追加武装は水中での起動力を飛躍的に向上させるものらしい。

全然理解できない言葉が羅列されわけもわからずページをめぐると、後ろに簡単にわかるように補足説明が書かれていた。

どうやら水圧を受ければ受けるほど、その圧力を変換し、推進力に変える。

つまり、深く潜れば潜るほどこいつは早く動けるらしい。

とんでもねえ技術だな・・・

その予測最高速度は現行のIHSのどんな機体の最高速度をも上回るものであらうといふものだった。

だが、水中対空中。

勝敗は考えるまでもないだらつ。

ページをめくると他にも装備があるようだ。

【マルス】

水中銃らしい。

これで水中からでも攻撃は可能って事か・・・

そんな事を思いながら続きを読む。

背中のコンテナのページに入った。

「ひとつはシールドエネルギー変換用の追加装備『りじー』。

変換？

どうこのことかと思い文字を読み進めるがやはり理解できない言葉
が並ぶ。

こいつにも補足説明がないかとページをめくつてみるとやはりぱりあ
つた。

ありがたいことだ。

そんな事を思いながらその項目を読む。

シールドは装備者を守るために働く。

危害を加えてくる要因は様々だがそれらを遮断する万能の盾だ。

だが、それが発動すると一気にエネルギーを消費する効率の悪いも
のもある。

こいつはそのままの様々な要因から、たった一つの要因にしか反応しない
よう
にするところなのだ。

ひよーのオス、メスを区別してくれるようなシステムを積んでいる
らしい。

そんな事を想像しながら続きを読む。

そのたつた一つの要因。

それは水中の見えない破壊神。

水圧だ。

人が普通に遊ぶ程度の深さならそれほど負担のかかるものではないが、震度が深くなればなるほどその身にかかる水圧は力を増す。

こいつの本来の目的は海底での作業を可能にすること。

海底のいまだに発掘されていない、この星の資源を掘り起こすのに効率のいい物を。

それがこいつが創られた理由らしい。

酸素だ、気圧だなんていうものはもともと宇宙用に開発されているIS_cがやってくれるが、水圧はどうにもならない。

それを遮断するためにIS_cは一緒に熱だ、衝撃だと、様々なものを同時に遮断しようとするため1で済むものに対して、他の物も遮断しうつし10、20とエネルギーを使つりはじ。

その1を正確に補足させ、燃費のいいものこじよつとこづシスヌムらしい。

さらにIS_cで触れているものにもそれは適用されるようだ、武装も水圧に負けることなく展開できるそうだ。

ただ、撃ち出された物はその恩恵を受けられなくなるため、水中からの銃での長距離射撃や、震度の深いところでの射撃はその力をすぐ失ってしまう。

おまけに1つにしか反応しないこいつは水中で『えられる衝撃や熱

は一切防がないといつ、ペーキーな物らしい。

難しいのは苦手だ・・・

そんな事を考へているとコンテナの中の別のシステムの項目に入った。

その続きを驚きの言葉が綴られていた。

この追加装備『ラグーン』を装備していると海の中ではレーダーやソナーに一切感知されない。

その言葉を読んだ瞬間、ありえないと思つた。

ISのハイパーセンサーはたいていの物を捉えることのできる高性能センサーだ。

遮蔽物だつたり、超高熱で遮つたり、よほど距離がなことその捕捉から逃れるのは困難だ。

そして、衛星カメラ。

これは昔からあるものだが現在でもその性能は依然として健在である。

これらにはソナー。

水中を探るのにこれ以上の物はない。

だがそれらを騙しきるというとんでも技術がここにも盛り込まれていた。

これ、誰にもわからないことは、もしもの場合誰も俺を助けようがないってことじやないのか・・・?

重要なことに気付き、ある名前を探す。

どんな**天才**の**設計**だ？
ばか

そんな事を思いながらマニュアルの中から設計者の名前を探していくとき外からとんでもない音が聞こえた。

ドドドドドドドドン！！！！！

その爆音に驚きマニュアルを放り投げ急いで外に出る。

そこには爆炎と深紅の機体。まるで血染めの機体をかるその操縦者は今まで大した興味の対象でもなかつた、あの掃除用具であつた。

「じゃあ簞ちゃん、次行くよーー！」

そう言ひ声の方向に目を向けると素つ頗狂な格好をしている人物。その隣にはミサイルの砲台が。

誰だ、あの**氣**い？

そんな事を思いながら掃除用具を見直す。

その姿は完全にセシリアなどの代表候補生と大差ない物だった。

一体どうなつてゐる?

そんな事を思いながらその様子を記録する俺に気が声をかけてくる。

「誰、君?

私のかわいい簫ちゃんを盗み見なんていい度胸してゐるじゃない!」

そんな事を言いながら俺に近寄つてくる。

誰だあんた?

知らない人には一切の遠慮のない春はエスを開き、カトラスを気に向けるが、そこからの反応が返つてこない。

どうなつてゐる?

本当なら足元にでも威嚇射撃を行つているはずなのにそれが行われないことに驚いていると、

「束さんにエスは無力だよ?

そんなことも知らないのかな?」

そう言つて俺の田の前までやつてくる。

何なんだ、こいつは?

そんな事を思つがトウーハンドは思つよつて動かない。

「ずいぶん不細工なもの積んでるんだね。
私が綺麗に整えてあげよつか？」

そんな事を言いながら勝手に人の工事を見りだす。

「何してんだ、てめえ！」

そつぱつとその氣 今は言葉を口にした。

「誰に口をいてんの？

今すぐこの工事分解するよ？」

その田には一切の迷いがない田だ。

一体何なんだ？

そんな時暴君が言葉を発した。

「そこいら辺にしておけ。

私の生徒に変なことをするのは許さんぞ！」

そう言つと氣 いつもあつたつと言葉を返す。

「冗談だよ～、ちい～ちゃん！
だから怒らないでえ～？」

そつぱつと織斑先生に抱き付こうとする氣 い。

何なんだ？

そんな事を考えていると、大きな胸を揺らしながら暴君の従者がこちらに走り寄つて來た。

「大変、大変です織斑先生！」

そう言ってこちらに寄つてくる山田先生。

実際にけしからん胸だ・・・

そんな事を思いながらこの後に起ることを想像できずにいる自分がいた。

以前にも話した。人間、興味のあるもの以外はどうでもいい・・・（後書き）

大きな事はいいことだ。

友人の中には、

『貧乳はステータスだ！』

そんな戯言を言つている奴もいますが、

『大は小をかねる』

この言葉が私にとつては全てです。

まあ、好みは人それぞれですから。

ラグーンの性能、若干チートですが今回限りの登場予定ですので多めに見てやってください。

ハツ！今ひょっとしてネタばれ的と言つたのか俺は？

作戦。その裏には様々な思惑があるものだ。

（春）

山田先生が主に何か言葉を告げたかと思えば、

「全員、私について来いっ！」

そう言って強制連行され旅館に戻された。

掃除用具のあの機体のデータをもう少し取りたかったんだがな・・・
そんな事を考えながら旅館に戻る。

通された部屋には、一体どこから持ってきた?
と言いたくなるような設備が置かれた部屋。
そこで何が起こったかの説明を受けた。

アメリカとイスラエル。

その共同開発の軍用ISが暴走したとのこと。

マジかよ・・・

アメリカ

IISが誕生するまでは世界最強の国。

みんなの友達“イーグル・サム”

その軍事力と経済力で世界のリーダーだった国だ。

イスラエルもアメリカと同じぐらい軍として質の高いものだつて話をベニーから聞いたことがある。

そんな国同士がお手て繋いで軍用IISの開発だあ？

冗談はよせ。

そんないかれた機体を俺達でどうにかしらつてふざけた依頼が来たらしい。

誰だそんなこと言つた馬鹿は。

そんな事を思いながら話を聞いていた。

「で、相手の装備は？」

独眼竜が質問をする。

「そうですわね。

このデータだけでは判断しきれませんわね。」

白人もその意見に賛同するようだ。

暴君が俺の方を見る。

その視線はどちらの意味で捉えていいのかわからないものだつたが、その後に話し始める。

「これは極秘事項だ。

決して口外するなよ。」

そつとデータを開示した。

そつか、これまさかに記録するのまさかだ。

そう思い大人しくそのデータを覗く。

うわあ・・・

こんな候補生クラスでどうにかできるようなもんでもないだろ？

そんな事を思つてると暴君が作戦を伝え始める。

奇襲による攻撃で一気にけりをつけるつもりじゃ。

そうだな。

実力差、性能差。

そのどちらを考えてもそれが一番だろ？

そんな事を考えながら俺には関係ない作戦だったので適当に聞いて

いるところだ。

『ちょっとまつたあー！』

そつと氣いが現れた。

一体誰なんだ？

そんな事を思つていると氣いがどんなじとをやうと囁いた。

「幕ぢやんの【第四世代】HIS、紅椿なら一気に運べるよつ！」

だからその作戦のメンバーを変更しようつ！
うんつ、そうしようつ！」

その後何か暴君と言い合いをしているがそんなこと聞こえちゃいな
い。

【第四世代】だと？

今俺が集めているデータも世界最先端の【第三世代】だというのに
わざにその上が・・・

軍用ISのデータは極秘事項で口外できないが、そっちのほうは何
も言われてねえな・・・

あごに手を当てそんな事を考へている姿を見逃さなかつた人物がい
たことに春は気付かなかつた。

作戦が決まりその場を納めるため暴君が言葉を発する。

「織斑と篠ノ之と共に作戦準備に入れ。
それ以外のものは部屋で待機しろ。
では解散つ！」

そつ言つて各自がそれぞれの行動に移る。

俺も行動の準備をしないとな・・・

そんな事を思いながら部屋ではなく装備が送られてきたテントに向かって足を進めた。

～ラウラ～

「ボーデヴィッシュ。」

教官に部屋に戻る前に呼び止められた。
すぐにその前に向かい用件を伺つ。

「はっ、なんでしょうか？」

教官？

「教官はよせと言つただろうが・・・
まあいい。

お前に頼みたいことがある。
いいか？」

これから作戦が終わるまで吉田から田を離すな。
あいつが外に出ようとしたら実力行使でそれを阻止しろ。」

「はっ？」

教官の言つていることの意味が理解できなかつた。

何故に奴の監視を？

そんな事を思つてみると・・・

「これはお前だから頼むんだ。

理由は聞かず、私の頼みを聞いてくれ。」

頼み。

これは命令ではなく、織斑千冬と言う個人からの頼み事なのだ。
それがうれしくてその頼みを快諾する。

「了解ありますっ！」

そう言つて部屋を出た。

教官と話していたせいでもう廊下の見えるところに人影はない。

命令通りなら部屋にいるはずか・・・

そう思い奴の部屋に向かう。

部屋の前に立つが、変だ。

中から人の気配を感じない。

わずかに、ゆっくりと部屋の扉を開ける。
そして覗くとそこには人の姿がなかつた。

どこに行つた？

そんな事を思いながら旅館の中を捜索する。

玄関の前に着いたとき、妙に変な生徒達を見かけた。
その顔はなんだかやけにニヤついている。

「どうした？」

そう言つと、そのニヤケ面を引き締めながら私に顔を向け、

「な、なんでもない用つ！」

「うん、何もない、ナニもないよ。」

声がおかしい。

そして表情も引き締めたはずなのにすでに緩んでいる。

浴衣の袖から握りなれたものを出してそいつらに向ける。
その光が顔に迫ったときそいつらの表情は一変したが、私は言葉を投げかける。

「何があった？」

そう言つて答えを聞き出した。

急いで足のある場所に向かわせ走る。

聞きだした答えが私の探し人の居場所に繋がるものだったからだ。

『え、えっと・・・
吉田君が外に出ていくのが見えて声をかけたら・・・
黙ってくれ、そうしたら後で礼をするから。
つて・・・』

そう言って出て行つた奴が行く先は予想がつく。
このタイミングで出て行くというは嫁達が出発する位置か、自分の
追加装備の用意されたテントだ。

嫁達の位置には教官もいるはずだ。
そつちらに行つたのなら教官自身が気付くはず。
なら私がつぶさなればならない候補は・・・
そう思いさつきで自分たちがいたテントに向かつて足を急がせた。

（春）

トウーハンドを起動させ、ハンガーに取り付けられた追加装備を装
着する。

別にこれハンガーなくとも自分で取り付けられるな。

そんな事を思いながら自分の身に纏つた。

装着が完了したので海に向かつて足を進める。

その足跡がまるでJMAの足跡の様に残るがそのまま海に向かう。

腰ぐらこまで海に使つたぐらいで思わぬことが起つた。

ドボォ――――――ン！

自分の目の前に巨大な水柱が起ころ。

「そこで止まれ……」

その声のするほうを見ずに体を止める。

「そもそも、何をしている？」

教官の命令は待機のはずだか?」

その声の主が誰だか予想がついたので振り向かず言葉を交わす。

「なに、どうして」とない。

ただのタイピンクだ

ビリも苦しい言い訳だがこれしか思いつかなかつた。

「そ、うか・・・

なら、永遠に海の底に沈めてやろうか？」

IISに警告画面が表示される。

本気なんだな・・・

なら俺がとる行動は一つだ。

IISを一気に進め、海に向かって一気に潜った。

～ラウラ～

「馬鹿が・・・

そんなことしたといひでつ！」

そつまつてターゲットに向け砲口を向けたとき、ある(じ)気が付いた。

IISがターゲットを認識できていない。

ハイパー・センサーで捕らえられていないのだ。

ハイパー・センサーでターゲットを認識し、オートで補正していた状態だった為、とっさの行動に支障をきたしたのだ。

ありえない。

海に潜る。

この程度の深度でハイパー・センサーの効果がなくなるなどと・・・どうなっている？

そんなことを思いながら攻撃をオートではなくマニュアルで補正するように切り替え、とりあえず目標が進んだ方向に向かってIISを

近づける。

だが水面にまほや奴の姿は映らず、目視でも捉えることができない。

急いで眼帯をはずし、ヴォーダン・オージュでも姿を探すが、どこにもその姿はなかつた。

「馬鹿な・・・」

だが、E.Sで長時間の海中潜行は無理だといひて、春のE.Sが浮上するのを待つた。

それが徒労になるとも知らず・・・

作戦、その裏には様々な思惑があるものだ。（後書き）

早速、能力が發揮されました。

まあ、海限定。

この場限りの能力だと思って勘弁してやつてください。

この後の話にこの能力がないとちょっと困ったもので。

チートは嫌いですが涙を呑んで採用しました。

陰と陽、闇と光、暗と明（前書き）

真っ向から対立します。

（春）

独眼竜から逃れ、例の暴走機と織斑達がやりあつてあります。ポイントに向かう。

さすが水中では最速と言つだけのことはある。まだ最高速度を出していないのに、空中での最高速度を上回る速度で進む。

これなら戦闘に間に合いそうだな。

そんな事を向かいながら田代地を田植した。

俺が到着したときにはすでに戦闘は行われていた。

海中からその映像の記録を開始する。

すげえな・・・

あの新型機と暴走機。

どちらもまともじゃねえだろ・・・

そんな事を思いながら戦闘を眺める。

そんな時、センサーがありえないものを捕らえた。

船だ。

ありえない。

ここはすでに政府の手によつて無菌室になつてゐるはずだ。

そんなところに何故？

そつと思ひその船に向かい少しずつ近づく。

近づいていたとき、戦況に変化がある。

暴走機の攻撃がその船に近づいたのだ。

ちつ・・・

関係ない奴がどこで死のうが興味は無いが、俺の田の前でスプラッシュ
タはざめんだ。

そう思い船に向かつ。

向かう途中で追加装備の脚から【マルス】を抜き出す。

それを海中から降り注ぐ光の羽に向かい一気に撃ち出した。

（一夏）

視界の端が驚きのものを捕らえる。

船だ。

何であるかといひに？

そつ思つたとき銀の福音から攻撃が放たれる。

その攻撃の数は多く俺たちだけでなく、その船にも降り注いだ。

まずいっ！

そつ思つたとき俺の体はその船に向かい急降下する。

「一夏つー。」

そつ幕に声をかけられるが構わずその船の上で壁にならつとしたとき俺は驚かされた。

水中から一斉に何かが飛び出してきたのだ。

「うわあつー。」

急いでそれを避けよつとするが全ては避けきれずいくつか被弾した。だがそれは多くの羽を撃ち抜き船に被害はない。

そしてその後に現れたものに俺は驚かされた。

海からゅうへりと顔を出したのはこの場に居ないはずの人の顔。

吉田春の顔が海から俺に向かつて言葉を発したのだ。

「さつさと戦闘に戻れこのボケツ！」

「こんな関係ねえ奴らに構つてる場合じやねえだらうがつ！」

そういうわれでカチンと来た。

「関係ないってなんだよつ！」

俺はその人達を・・・」

「守りてえなんて綺麗事抜かしたらてめえ、ぶつ飛ばすぞつ！
さつさと集中しろつ！」

「戦闘に戻れつてんだよつ！」

そう言つて俺に攻撃を仕掛けてくる。

あたりはしなかつたがその行動が気に入らなかつた。

クソッ

そんな事を思つて戦闘に戻るつとしたとき、

「キヤアア――――！」

幕の叫び。

急いでその声のしたところへ、その体を支える。

「幕つ！」

大丈夫か？」

そう声をかけるが俺の腕の中でE.Sが消失していく。
気を失つたらしい。

その光景を見ていたときまたしても声が飛んできた。

「集中しろって言つたろ？ がつ！」

ハツとして上空を見ると俺に向かつて飛んでくる光の羽。

ヤバイ！

腕の籌をかばうようにしてその攻撃の直撃に備えるが、俺が思つて
いたほどの数の攻撃がやつて来なかつた。

だが、いくつかの攻撃をくらいシールドが発動し、エネルギーが切
れる。

「くつ・・・そつ・」

そつ言つて俺と筹は海に落ちた。

（春）

あのボケがっ！

そう思いあいしひに向かって降り注ぐ羽に向かってマルスを撃ち出す。

だが数が数だ。

全ては落とせず、いくつかがあいつに当たりそれでエネルギーが切れたらしく海に落ちていく。

海に落ちてすぐのところであこひりを回らし、この海域を離れようとしたとき、この画面に不思議な言葉が表示される。

【展開限界時間まで後5分】

その表示が始まると同時に画面の端にカウントダウンのタイマーが表示された。

マジかよ・・・

今からビビりでも時間まで戻れねえ・・・

戻りながらどうするか考えていたとき海底にあるものを見つけた。

潜水艦だ。

賭けてみるか・・・

潜水艦に近づき、内部をスキヤンする。
浸水はそれほど酷くない。
酸素もまだ残つていいようだ。

どうにかするかいなだろう・・・
そう思いながら一人を片手にまとめて持ち、潜水艦の内部に入り込むため作業を開始した。

IISの画面を見ると後40秒で展開限界を迎えるといひだつた。

片手しか使えない状態で、潜水艦の中に侵入するのは片手でシャツのボタンを留める、軽く10倍は大変だった。
侵入が終わつたので、織斑と掃除用具を床に転がし、IISを解除する。

解除したせいで背中のコントローラー状のラグーンが床に落ち、とんでも

ない音を立てた。

一瞬ビクッとしたが、大丈夫そうだ。

「やばかっただ」

そうホツとしたのもつかの間。

「やばかっただじゃねえよ・・・」

突然の声に心臓が止まりかける。

その声のほうを見ると、織斑が体を持ち上げて立ち上がりつつしていた。

ラグーンの落下の衝撃で意識が戻つたらしい。

「何だ・・・
気が付いたのか・・・」

面倒事起こしやがって。

そんな事を思つていると織斑が近づいてくる。

「どうこうつもりだよつ！」

そう言つて俺の胸倉を掴む。

「おいおい、何のつもりだ?
命の恩人に何してるか分かつんのか？」

そつ言つてその手を離そつとするが相当強い力で掴んでいるらしくなかなか離せない。

「どうじつもりだつて聞いてんだろーー？」

そう声を強めて俺に詰め寄る。

こういう熱血なところがウゼンだよな・・・
そう思いながらその問いに応える。

「何のことだよ？」

聞いの内容が分からなかつたので内容を聞こうとする

「さつきの船のことだよー！
関係ないってなんだよー！」

声の大きいことだ。

それだけ元氣ならこいつは大丈夫だな。

「説明してやるから、場所変えるぞ。
そいつ起こすのはまずいだろ？」

そう言って視線で掃除用具を見る。

「・・・わかったよ。」

しぶしぶ掴んでいた腕を離す。
掃除用具を抱えて歩き始める。

先日のことがあつたので、真空パックに入れたタバコとライターを
ISステッツの胸元から取り出し、ライターに火をつけあたりを照ら
す。

「・・・なんでそんなの持つてるんだよ?」

その質問に答へず呪を進める。

船員達が使っていた部屋だらうか?

「ちよつと待つてろ。」

そう言つて通路に織斑を待たせて部屋の中へ。
ベットに転がつていたモノを払つてどかす。

シーツも軽く払い、明かりを消して織斑を部屋に入れる。

「いいぞ。
入つて来い。」

「暗くて見えねえよ・・・」

そんな事を言いながら俺の声のするまゝまでやつてへる。

足がベットに当たつたのが分かつたのかそこで気配が動かなくなる。

「ベットだ。

かてえ床よりははずつと快適だらう。」

そつ言ひと、ゆつくり体を底くし、掃除用具を置く。

そのまま適当に燃えそつなものを持つてゆつべつと部屋を出で再び
通路に。

織斑もついてくる。

再びライターに火をつけ、さつき持ってきたものに火をつけ明かりにする。

それを挟みお互が座り込んだ。

「・・・で、さつきの話だつたな。

あの船か・・・

あんなもの関係ないですむことだらうが？
何ムキになつてやがる。」

そう言つと再びエンジンがかかる織斑。

「関係ないぢやねえだろ！？」

あの船に乗つてる人たちに何かあつたらどうするんだよー？

それでいいぢやねえか？

「いいぢやねえか、ぢやねえよ！

お前や俺が居なかつたら大変なことになつてただろ？
俺はヤバイと思って向かつたら、攻撃がとんできて・・・

そうだよつ！

お前あの時なんていつたか覚えてるかよー？」

「デケヒ声だすなよ・・・

そう思い今度は手に握っていたタバコに火をつけ煙を吐く。

「何してんだよー？」

そういわれるがその言葉を無視して質問に答えた。

「守りてえなんて抜かすな・・・
だろ?」

昨日の晩飯忘れるほど年食っちゃいねえよ・・・」

「タバコはつ・・・

もうこいつ、そつだよつー

何であんなこと書ったんだよー?..」

そつ言つて再び声を大きくする馬鹿。

「ウゼエな・・・

どつでもいいだろそんなことまよお・・・」

そつ言つて煙を馬鹿に向かって吐く。

「春、真剣に聞けよつ!..」

そつ言つて立ち上がりこっちに近寄るつとする。

俺は自分の傍らに置いた物を火に投げ入れ再び明かりを大きくする。

そして、その後馬鹿を見る。

「春つて呼ぶんじゃねえよ、もつ一回呼んだらてめえこの地下墓地カタコロハシに置いてくぞ?..」

空気が変わった。

そつきまで織斑と話していたときは違う。

完全に学園に着たばかりの『るの、周りを拒絶していた『吉田春』なっていた。

陰と陽、闇と光、暗と明（後書き）

次もやりあいます。

水と油は混ざり合わない（前書き）

後半戦です。

お気に入りに登録してくださっている方が80名を突破しました！

ありがたい話です。

目標は、めざせ100人！！！

水と油は混ざつ合わない

（春）

「な、何言つてんだよ？」

春つて呼べつて・・・」

おめでたい奴だ・・・

「あん時はてめえを調子に乗せるための演技だよ。
あん時はてめえに勝つてもらわないと賭けに勝てなかつたからそのためだ。

それなのにアレ以来妙に馴れ馴れしくしゃがつて・・・
正直鬱陶しかつたんだよ・・・」

織斑の顔は何を言つてゐるのか分からぬといつた顔だ。

「賭け？

何の・・・

そつ言つて言葉を口にさするがその言葉を無視して話し始める。

「ちよつとそこで待つてろ。」

そつ言つて掃除用具が眠つてゐる部屋に戻り、ライターであたりを照らしあるもの三つ布に包んで持つて戻る。

「何を・・・」

そう問われ、言葉を発する。

「関係ねえ、守りたい、って話だつたな。
いいぜ、説明してやるよ。」

この世の中は二つのものに分類される。
何か分かるか？」

「なんだよ一体……」

しばらく考えていろが答えが出ないよつた。

「生き物と物だよ。

そして、俺がこの世で守りてえのは生き物じやねえ……
物さ。」

そう言った時ある人物の顔が浮かぶが気にせず煙を吐き出す。

「おい、何言つて……」

「黙つて聞け。

俺のターンだ。

さて、その物もどんどん選別して行きや、二つのものに分類される。

分かるか？

金になるか、ならないかだ。

俺は金、自分にとつて利益になる物しか守らない。
それがお前の聞いたかった俺の答えだ。」

「利益つてそんなことで人を……」

納得しないのか俺の言葉に反論を述べようとする。

「助けない理由にはならないってか・・・

トコトン馬鹿だなお前は・・・

どうしてそんなに他人のために必死になれる?」

「そりやお前、人が傷付くのは嫌だろ?」

そう問い合わせられ、ちょうどビタバ「が短くなつたので新しいものに火をつける。

「別に・・・

俺に関係ねえ奴がどうなろうと知ったこっちゃねえよ・・・
テレビで見る交通事故にあって死んだ知りもしねえ奴の為にお前は泣けんのか?

あん時は目の前でスプラッタが見たくなかっただけだ。
お前らを助けたのも、同じ理由さ。
そんだけのこと。」

そう言つて笑う。

「・・・おい、自分が何言つてるか分かってるのか?」

そう言つて軽く体を振るわせる。

「ああ?」

何言つてる?

そつ思い聞き返すと、

「自分が何言つてるか分かってるのかって聞いてんだよ!――――」

やつぱり勢いよく立ち上がる。

ホント熱血だ。

「分かってるわ・・・

てめえの言いてえこともな・・・

命を軽く見るなって事だろ?

だけどな、生き物なんて死ぬことの決まった物の為になんて必死にならなきゃいけねえんだ?

例外なく、人もいつかは死ぬ。

それが早いか遅いかの違いだ・・・

だから俺は終わりを迎えるまでに面白おかしく生きれるように金を必要としてるんだ。

それ以外は諦めた。

最近はちょっと欲張ってるみてえだが・・・

「なんで・・・

何でそんな風にいえるんだよ!」

熱くなってきたようだ。

「別に、てめえと生き方が違つたからってだけだ。

面白いもの見せてやるよ。」

やつぱりさつき持つてきた布を開ける。

その中の一つを馬鹿に向かって投げる。

「なに・・・

うわあっ!――!

そつと投げたものを落とした。

「何驚いてるよ。

俺たちの頭にも同じモンがついてるじゃねえか?」

俺たちの頭についているもの。

骸骨だ。

そつと言つてもう一つの骸骨を右手で野球ボールでも扱うように手首のだけで軽く宙に飛ばして受け取り、宙に飛ばしてを繰り返す。そして左手には昔の紙幣がぶら下げられた。

「こいつは金になら無いモノだ。

そしてさつさの船の連中もだ。

こんなものを守りうと想つか?

守るなら断然こいつだろ?」

そつ言つて左手を突き出し軽く笑う。

織斑は俺に向かつて歩み寄つて俺の胸倉を掴み力ずくで立たせる。骸骨が床に乾いた音を立て転がる。

「なんだよ、自分の意見が理解されないと今度は力で納得させるのか?」

「んだけガキだよ・・・」

そつと呟いて呆れて声を出すと、

「うぬせえー

それでも俺は人を・・・守りてえ！」

そう言つた時織斑の腹を思い切り殴つた。

「守りてえ、ねえ・・・

だけどよ、その力がお前にあんのかよ？」

膝をついている奴を見下ろしながらさう言葉を発する。

「てめえ、今までにどれだけのものに守られてきた？
どうせこれまでの人生、姉貴に守られてきたんだろう？

学園に来てからもそうだ。

クラス代表戦だって、俺や白人に守られ。

トーナメントではデュノアに守られ。
今回のことでは俺と話していた間そいつに守られ、あの状況を俺に
助けられ。

守られてばかりのお前に、一体何が守れるってんだ？」

そう言つて座り込むよつこ馬鹿に顔を近づける。

そしてふざぎこんでいた馬鹿に向かつて言葉と暴力をくれてやる。。

「守りてえなんて、そんな偽善をぬかしてえならてめえの身一つ守
れる力持つてからぬかしやがれ！」

そう言つて思いつきり顔を殴りつけた。

いいのが入つた。

「うがえ！」

吹き飛び床を転がる馬鹿。

しばらく眺めていたが、動く様子はない。
静かになつて何よりだ。

その場を離れて掃除用具のほうに向かつ。

そして掃除用具を抱え上げ、織斑の横に並べる。

「つたぐ、気分わりい・・・
助けるんじやなかつたぜ・・・」

そう言ってISを展開する。

そしてラグーンを自分で装着する。

充分時間を空けたおかげで展開限界までには充分戻れそうだ。

一人を抱え、入ってきた扉に向かい蹴りをいれ扉を蹴り破る。

一気に水が流れ込んでくるがISのおかげで何の影響もなく海へ出る。

一度だけ、誰も花を供えに来るこ^{カタコンベ}とがなかつた地下墓地を見て一礼し、そのまま最高速度で一気に旅館に向かつて帰路を急いだ。

水と油は混ざつ合わない（後書き）

次はどうなるでしょうか？

おまちくださいませ。

ご意見、ご感想お待ちしています。

（漫畫）「かわいがれのまゝ」（著者：佐藤義和）

「ぬまこ」も「ひこ」も「しょくべ」。

化学反応はないに違ひぬかわからぬ

（春）

テントの設置された海岸にたどり着いたとき、俺をあるものが出迎えた。

独眼竜の砲口だ。

「貴様・・・」

「一体今まで何を・・・」

かなりキレてるようだが、どうでもいい。

そう思い自分の抱えていたものを海岸に投げ捨てた。

「何を・・・」

「！」

「大丈夫か？」

そう言つてエリを解除して俺が投げ捨てた者に駆け寄つていく。

その姿に興味を示わず、自分のテントに。

そこにラグーンを設置しなおし、外に出る。

そのまま旅館に向かつて歩いていると途中で厄介な相手に出会つた。

「吉田っ！」

今までどこにいた！？

暴君の叫びにつきぎりしながらもその足を止めず、旅館に向かつ

「海岸に行きや分かりますよ・・・」

そう言つて暴君とすれ違つ。

旅館に戻り、部屋で一服していると扉が開いた。

暴君だ。

そのまま俺の近くにやつてきたかと思つとい、

バチンシ！

俺の頬をはたいた。

「命令違反の罰だ。」

そう言つて俺のそばに座る。

「・・・まだ何か？」

その日は完全に敵意むき出しのものだ。
早くこの場から消えて欲しい。

そんな事を思いながら暴君を見る。

「どうじつとか説明しろ、何故一夏たちをお前が回収している?
あの場にお前のエスの反応はなかつたぞ?」

そう問われたので、ラグーンの機能の説明と、行つた理由を説明した。

「わかつた・・・
ではもう一つ聞かせる。
一夏の顔の傷は何だ?」

ああ・・・

そこを突いてくるか。

そんな事を思いながら暴君を見る。

「俺があいつを殴つたんですよ。」

殴つた。

完全に俺の一発がKOしたことだらう。
そう思い言葉を発すると、

バチンッ!

再び頬をはたかれた。

あ・・・

鬱陶しいなこの姉弟は・・・

そんな事を考えていると、

「何故殴った?」

そりやこつちが聞きたい。

何であんたが俺を殴ってるんだ?

そう思いながらも理不尽な質問に答える。

「正当防衛でしたよ。

あいつが俺に殴りかかるとしたんで、俺が身を守るためにあいつを殴った。

あの姿を見たら俺が加害者でしょうけど、現場にいたら俺が被害者側だったと分かってもらえると思いますけど?」

そつ言つて煙を吐く。

「・・・あいつは滅多なことで人に危害を加えるような奴じゃない。何故そうなった?」

メンドくせえな・・・

「質問ばっかりですね・・・
織斑に直接聞けばいいでしょ?」

俺も疲れたんですよ。

だから、さつわとここから消えてください。」

そつ言つてタバコの火を消す。

「消えろだと・・・?」

貴様、誰に向かって・・・」

そつ言つて俺を威圧しようとするが今の俺に効果はない。

「あんただよつ！

鬱陶しいからわざと出てけつて言つてんだ！」

机を叩き、身を乗り出して発した言葉に暴君も何も言わず立ち上がり部屋から出て行つた。

クソッ・・・

そう思いながら新しいタバコに火をつけた。

／千冬／

一体何があつた？

昨日までとは別人。

いや、学園に来たときに戻つた。

下手をしたらそれより悪い。

春の変化に正直驚きを隠せなかつた。

せつかく少しづつ人と触れ合い始めていたというのに・・・

その理由を聞こうにも一夏は意識がいつ戻るかわからない状態。

原因は不明で、頭を打った時のショックのせいでこうじともないらしい。

では何が・・・

解けない一つ抱えながら今後のことを考えるために山田先生たちの待機している部屋に戻った。

（春）

暴君が去つてから酒を飲むがいくら飲んでも酔えないし、美味くなかつた。

昨日は美味しいと感じた酒も今日はまるで泥水を飲んでいるかの様な味だ。

机の上に並んでいたそれらを手で思い切り撥ね退ける。

ボトルは畳の上を転がり中身を垂れ流し、グラスは壁にぶつかりいくつにも分離し醜く形を変える。

クソツ・・・

何なんだよ一体・・・

こんなことになつたのも全部あいつのせいだ・・・

やつ思い部屋を出てある場所に向かつた。

ある部屋の前に立ちその扉を開けた。

そこは馬鹿が眠っている部屋。

都合よく誰もいなかつたのでそのまま馬鹿の近くに座る。

「おひこり・・・

てめえのせいで俺是最悪の気分だ・・・

てめえの姉貴には殴られるし、酒は美味くねえし・・・

一体どうしてくれんだよ?」

そういうが当然言葉は返つてこない。

「ツチツ・・・

聞いたぜ?

俺が原因じゃねえなら、てめえは何で起きねえんだよ・・・

これじや俺が患者じゃねえか・・・

そう言つて持つてきたセットに火をつけ煙を吸つ。

「」のまま田が覚めなかつたら、俺はあいつら一一生恨まれるんだ
るうな・・・

そつまつて思つのまいつもの馬鹿の周りにいる者たちの顔。
その中にあいつもいる。

「つぐづぐ腹が立つぜ・・・

何でてめえは俺にねえモノを持つてんだ・・・

そのくせ、その価値に気付いてねえ・・・

それなのに、何でまだそれ以上抱えようとすんだよ・・・

そう言つても答えはいつも返つてこないが、そのまま言葉を続けた。

「守りてえつて言つたよな・・・

守られた奴は確かに感謝するだろつや。

だがな、それは万人に当てはまることじやないのさ・・・

何かを守るためにお前が傷付く。

そんなお前を見たくない奴だつているのや。

たとえばお前に好意を寄せている奴らなんかは特にな・・・

そういうが、この言葉に対してもまともな返事じやないだろうと思つた。

こいつの鈍感つて壁がなくならぬ限りは難しい。

以前の独眼竜の言動をえ、LOVEではなく、LIKEの方だと思つてゐる奴だ。

あいつらの先はまだまだ長い。

あの地下墓地カタコンベでいえなかつた言葉を続けながら馬鹿を見る。額に手を当て、ため息をつきながら言葉を続けた。

「諦めちまえよ・・・

そうすりや樂になれるんだぜ？

誰にも失望されない、何かあつても誰も悲しまない。

そつすりや誰にも迷惑かけずに生きていけるじやねえか・・・

その言葉を向けている相手は果たしてこの馬鹿なのか、それとも・・・

しばらく時間をおいた後、額に当っていた手を離し、煙を吸つて馬鹿を見る。

「なあ・・・

俺にも、何か持てると思つか？

お前ほどじやなくとも、一つか二つぐらいなら・・・

そつこいつが当然答えは返つてこない。

「・・・何てな。

今更俺が、何を持とうってんだ？

こんな薄汚れた奴が持つたら持つたモンまで汚しちまつ・・・

そつ言つて再び額に手を置く。

クソッ

らじくねえな・・・

こんなことで迷うことなんてなかつたじやねえか・・・

そつ思い再び煙を吸う。

そんな自分で答へが出ないでいたこの部屋に来客が訪れた。

代學友の誰かわからぬ（後書き）

来客は誰でしょうか？

また次の更新でお会いしましょう。

その来客は俺の予想を上回っていた。

「嫁よ、具合……は？」

そう言つて固まる独眼竜。

「誰があなたの嫁ですか、そんなどうで立ち止まって、どうしました……の？」

そう言つて固まる白人。

「何してんのよあんたた……ち？」

そう言つて固まる警報機。

「どうしたの三人と……も？」

そう言つて固まるトヨノア。

「お前達、いったいなに……を！」

そう言つて俺を睨む掃除用具。

「……よお。」

そう言つて軽く挨拶をした。

その手にはいつも煙。

そしてその傍らには携帯用の灰皿。

OUT！

だが、それを気にせずゆつくつと口に運ぶ。

「へへへふふ。

邪魔になりそだから帰るわ。

後はお前らの勝手にしろ。」

そう言つて席を立とつとしたとき、

「待て、貴様の力が要る。」

そう言つて俺を止める独眼竜。

手にもつているものについてはノーコメントのようだ。

「何言つてんだ？」

突然そんな事言われても意味が分からなかつた。

俺の力？

この中で最弱の俺の力が？

そんな事を考へていると独眼竜が言葉を口にした。

「貴様のステルス能力が必要だ。
協力しろ。」

ああ、そういうこと。

どうやら、やつをまいたときに見せた能力を必要としているようだ。

「何で？」

そう言つてその必要性を聞く。

「我々はこれから銀の福音の迎撃に向かつ。その際奇襲に貴様のその力が欲しい。」

なるほど、その馬鹿の雪辱戦か。

だが、俺には関係ない。

断ろつと言葉を発する前に、

「そいつの力など、必要ない！－！」

予想外の所から声がした。

みなが一声にその声を発した人物を見た。
その人物は・・・

「そんな、そんな奴の力など必要ない。
そんな奴の力など・・・」

そう言つて体を振るわせる掃除用具。

「纂・・・」
「纂さん・・・」
「どうしたの？纂」

そう言つてその近くに寄る独眼竜以外の3人。

「奴はそつ言つてゐるが・・・」

独眼竜が言葉を口にするが、俺の返事は決まっていた。

「だそうだ。

俺の力なんて必要ないらしいから、頑張つてくれ。」

そつこつて独眼竜の横を通り、掃除用具の隣へ。

わいつきのリアクションから想像するにどうやらそつて、
「てめえの趣味は盗み聞きか?
たいそうな趣味だな?」

そつ耳元で囁いた。

その瞬間、俺の頬に熱いものがやつてくる。

バチンッ!

頬を打たれた。

「つ・・・

貴様に、貴様に・・・!」

激しく激昂しているようだ。

ぶられた頬の熱をその身にせびし、その部屋から出した。

（第）

奴が出て行つてラウラが作戦を考え始める。だが、そのほとんどが入つてこなかつた。

私は・・・

あの潜水艦の中での会話を聞いていた。

あの大きな音で気が付き、気付けば一人が口論していた。その中に入ることができず、そのまま寝たふりをしていると一夏が私を抱えてくれた。

幸せだつた。

だが、再び奴との口論が始まると、さつきの船の話へ。正直、私も一夏の行動はどうかと思つた。

違法行為をしていた連中を守るなど、どうかしている。そう思つたからだ。

正直私も奴の言葉が正しいと思つた。

だが、一夏は言った。

『それでも俺は人を・・・守りてえ！』

その言葉を聞いたとき、私は恥ずかしくなった。

私は、一夏が怒っている相手と同じ考えだったことが。

一夏が傷付くのが嫌だった。

私の勝手な意見だ。

他の人の為に動ける一夏を好きになつたはずなのに、その行動を私は理解することができなかつたことが恥ずかしかつた。

そして、それを黙つていることで隠していた自分が恥ずかしかつた。

だがあいつは、自分の意見をはつきりと一夏に伝えた。

私は違う。

ただ黙つていることしかできなかつた私と、自分の意見を言えたついつ。

どちらが一夏と向かい合つているだろう？

そして、同じ言葉を一夏に向かつて言つていたかもしれない自分の姿が奴に重なつた。

そんな奴を私は打つた。

同属嫌悪

その言葉で表現するにふさわしかつただろう。

そんな事を考えながら私が思つたことは・・・

『私は、』

（春）

イテエ・・・

頬に熱を残しながら廊下を歩いてくると、

「ああ～、ダッヂだ～。」

そう言ひて声をかけてきたのは昨日見かけたとひそな女だった。

「・・・何だ？」

面倒だが、気がまぎれるならと思ひ返事を返した。

「ん～、特に用事つてことはないんだけど・・・
何かあつた～？」

「何でだ？」

質問の意味が理解できなかつた。

何故俺がこいつに氣を使われなければならぬのか。
そんな事を考へていると、

「だつて、ダツチ泣きやうな顔してるよ?」

そう言われて手を離れる。

わずかに触るだけで自分の手から久しく見ることのなかつたものが
その手についた。

何で?

疑問は解決できないままだが、今はこの場から離れたほうがいいだ
ら。」

「何でもない。
じゃあな。」

そう言って自分の部屋に戻った。

俺は卑怯だ。

自分の本心をきちんと伝えることもせず、ただ気に入らなかつたら
手を上げ・・・

自分の持つていないものを持つているあいつを妬んで・・・

俺は卑怯だ・・・

そして、

（ 篇・春 ）

『 最低だ 』

福音は奏である。死の訪れを（前書き）

最近アクセス人数が増え、なんとお気に入りご登録人数が目標の100人に到達しました。
いや～、もう満足です。
いつこの小説を終えても・・・

いや、まだまだ続きますよ？

一回言つてみたかったんですね（笑）

今回はえらい短めです。

ご了承ください。

福音は奏である。死の訪れを

部屋に戻り、一服しなおす。

頬の痛みはいまだに取れない。

くそ・・・

何で俺がこんな田にあわなきやならないんだ？

そんな事を考えていると、ふとある事を思い出した。

あいつら、迎撃に行くつて言つたよな・・・

迎撃ならさつき以上の戦力で向かうはず。

送られてきた追加装備が見れるかも・・・

そんな事を考えながら再びラグーンを身に纏つため、テントに向かつて部屋を出た。

テントで待つていると、人の気配を感じた。

「どうやら来たようだ。

「では、各自追加武装のインストールが完了したら再びここに集合。
筆、貴様はここで待つていて。」

そう言つ独眼竜の声が聞こえた。

その後すぐに静かになった。

俺も準備するか。

そう思い、自分も観察の準備を始めた。

（海）

現状は1対5で掃除用具たちが有利だった。

その中でもめでまじい活躍をしていたのは掃除用具と独眼竜だらう。一方は機体性能で、もう一方は操縦技術で銀の福音と充分に戦えていた。

その様子を海中から眺める。

これ、銀の福音が映らないようにて編集するのもどうぞいなあー
そんな事を考えながら戦場を観察していると、掃除用具の見事な一
撃が銀の福音に決まった。

そのまま海中に落ちてくれる。
俺の横を通り過ぎ、そのまま海の底へ。
終わつた。

充分なデータも取れたので次の給料のことを考えながら戻ろうとしたとき、あることが引っかかった。

・・・あれ？

IISつて、操縦者の意識がなくなるか、シールドエネルギーが死んでるか、展開限界迎えるまでは展開してたよな？
それってつまり、展開している限り、戦闘は可能つてことだよな？

嫌なことが脳裏を過ぎり、急いで銀の福音に視線を向ける。海の底がほのかに明るい。

光も届かないはずの場所が明るいのだ。

完全に厄介ごとだ。

そう思い急いで体を海から出した。

そこで待っていたのはさっきまで戦闘を行い、息の上がった専用機持ち達。

「なつ、何故貴様がここにいる？」

独眼竜が当然のように質問していくが、正直今はそれどころではない。

「全員、命だけ持つてこの場から離れろ！」

あいつは・・・

そういった瞬間、俺の後ろから爆音と巨大な水柱が立ち上がる。

専用機持ち達の顔が凍りついた。

俺もその顔を見ただけで状況が把握できた。

恐る恐る振り返ると、そこにいたのは、天使のような翼をまとい、美しい歌声を奏でながら、俺たちに死を届ける、悪魔の姿だった。

読者はただ逃げる（前書き）

そういえば、振り仮名もつけず、このタイトル、現をいくもの皆さんはどう呼んでますか？

感想に読み方なんかを書いてみてください。

一応著者の中では決まってるんですが、いい意見があつたら、その読み方にしようと思います。

弱者はただ逃げる

奴が再び姿を現したとき、状況は一変した。

白人は奴の登場に動搖しているうちに初撃で落とされ、デュノアも掃除用具を守つて落とされた。

戦況は圧倒的に不利な位置におかれている。
そして俺のいる場所は・・・

海の中

あんなのどうしようもない。

一方的な強さの前に俺がとつた行動は隠れる」と。
海の中なら俺は誰にも見つからないのだ。
だから・・・

そんな事を考へていると、隣から声を発するものがいる。

「うよつと、離しなきこと……」

そう言つて俺が掴んでいた手を離すつとする。

「馬鹿言つなー。
飛び出して何になる?ー!」

そつ言つて他の行動をやめさせようとするが、

「つるさこねえ、私はこんな所で隠れてるような真似したくないのよー。

私も一緒に・・・」

そう言って戦場に戻りつつしていゆ」こつを何とか引き止めたかつた。

「お前も見ただろう？
あいつの強さ。

あんなのに勝てるわけがねえ、あいつの迎撃はもう軍とかに任せて俺たちはもう旅館に・・・」

そう言って手を引いて旅館に戻ろうとしたが、いつこつに体が動こうとしない。

「・・・なさいよ・・・」

何か聞こえる。

「・・・しなせじよ・・・」

振り返り、そいつを見ると、

「離したがる……」

そう言つて俺から力ずくで離れる。

「おこひ、何してんだ、わがわといひまへん」

そう言つて手を伸ばすがその手は払いのけられた。

「何なのよ、あんた・・・」

何だ？

何か言つてくる。

「何がしたいのよあんたはっ！」

突然現れたかと思つたら、今度はいきなり人の手つかんで逃げろだ
なんて！

聞いたわよっ！？

あんた、物が、お金が大事なんでしょ？
だつたらさつさと帰つて財布でも大事に抱えてなさよっ！
こんなところに来る必要なんてなかつたじやないっ！」

そつ言われて潜水艦カタマリでの織斑との会話を思い出す。

そうか、掃除用具から聞いたか・・・

視線を逸らすと続けて言葉を投げつけられる。

「あんた、逃げてばかりじやない。

ここに来た初日、私のこと助けといつすぐになくなつて、こいつは
お礼も言えず・・・
ここに着てからだけじやない。

学園でも私のこと避けてたでしょ！？」

そう言われてアレからの行動を思い返す。

こいつは俺のことを避けっていた。
だが、俺もこちらから近づこうとしなかつた。

いや、その姿を見かけたとき俺はこいつから逃げていた・・・

「そして今も口にする」とは逃げる」とばっかり。

一体何なのよあんたは！？」

そうだ・・・

俺は逃げてばかりだ。

だがそれは・・・

「あんた、一夏に言つたそつね。

守られてばかりだつて。

いいじやない、守られたつて。

守つてくれる人がいるんだから、その人に頼つたつて。

いつかその恩を返せばいい。

そして、今度はその人を守れるようになればいいじゃない。

今は無理でも時間なんてこの先まだまだあるんだから！

なのに何？

あんたは逃げてばかり。

逃げた先に何があんのよ？

逃げた先は安全なわけ？

その先がまた苦しかつたら逃げて、そうやって逃げてばかりいるんじゃないの？」

そう言われた時、何も言い返せなかつた。
その通りだ。

「あんた言つたわよね？

私のことが好きだつて！？

だったら、好きな女とその大切なものをくらう守つて見せなさいよ
！！！」

そう言ひて海面に向かって浮上していく。

その体を掘もつとした手は掘るものを持たず、海水だけをただ握り締めた。

対価とそれで得るもの

春が海水を掴むより少し時は遡る。

（織斑）

目が覚めるとそこは奇妙な光景が広がる世界。

右側には青空が。

左側には夜があった。

そして、自分はその境界線。

夕暮れに立っていた。

「ビード、じー？」

当然の質問を口にしながら足を進める。

右と左、どちらに行こうとも見えない壁のよつなもので進めないのでそのまま夕暮れの中を歩いていると、正面にある女性が立っていた。

その身に甲冑を纏い、まるでジャンヌダルクを彷彿とせるような女性。

その女性に近づくと声をかけられた。

「止まりなさい。」

そうじつて、俺の前に剣を向ける女性。

「ここから先に進ませるわけには行けません。」

そう言ひて俺の進路を塞ぐよつて立ち止まる。

「えっと、他に進めないんですけど・・・」

そう言ひて左右に体を向け、どちらにも進めなことを証明して見せた。

「では、後ろに引き返しては？」

そう言われ、後ろを振り返るが、何故だらう？

引き返す、戻るのではなく、進まなければならぬ。そんな気がしてならなかつた。

「いえ、その・・・」

なんていうんですかね。

この先に行かないといけない気がするんです。」

そう言って女性を見る。

「INの先に待っているのが苦痛をともなうとしても？」

女性が問いかける。

「苦痛？

「そうですねえ・・・
人間生きているだけで苦痛はともなうモノですよね?
だったら、別に構いません。」

そのまま一步足を進める。

「では聞こます。

あなたにとって大切なものは何ですか？」

その問い合わせられも答える。

「生きているもの・・・
ですかね。」

そのまま一步踏み出す。

「生きているのですか・・・
では、その中にあなたは入っていますか？」

「えつー?」

そう問われたとき、足が止まつた。

俺が入つてゐるか？

生きてゐるものの中に？

大切なものの中に？

質問がよくわからなかつた。

そのとき女性が言葉を続けた。

「あなたは生きてゐるものを作りたいと言つた。

ですが、それを守るあなた自身もまた、生きてゐるものなのです。
自分を守ることもできないに他の者を守ることなどできません。」

その言葉がやけに胸に刺さつた。

何故だらう？

理由がわからぬままその場を動けずにいた。
そのまま女性が言葉を口にする。

「あなたが守るために戦う。

そして傷付く。

その姿を見たくない人がいたとしたら、あなたはどうしますか？」

そういうわれたとき正直、なんて答えたらいかわからなかつた・・・

「すいません・・・

答えられません・・・

セツニティ俯く。

「えっと、じゃあ、やひしたら・・・」

そつ答えを求めるとい

「答へは自分で出すしかありません。
ですが、答えを導き出すための力を貸す」とはできません。」

そう言われ、迷わず望んだ。

その力を。

「お願いします！」

俺は、守るための力が欲しいです。
自分の手の届く範囲、その全ての人を守る力が・・・！
その力の足しになるなら、あなたの言つ答えを導き出すための力で
も・・・！」

そつ言つて顔を上げ女性を見る。

「周りから偽善とや綺麗事と言われ続けてもその行動を貫き通すこ
とができるですか？」

その言葉はきっと俺の信念を確かめる言葉。

「せつと、いや、必ず貫いてみせます。」

そつ言つて手を強く握り締める。
だが一つ気になつた。

この女性の言葉、問われる事と回りじまいを最近聞いた気がする。そんな事を考へていると、

「……覚悟はありますか？」

女性は俺に問いかける。

それは今までと違つ感じがした。

「かく、」^{トトロ}へ。

何のこどだらひへ。

質問の意味が理解できなかつたのでその言葉を鸚鵡返しのよつて問
い返した。

「あなたが望む力、その代償として、あなたにあるものを払つても
らいませう。」

「一体何を？」

命とか言われたひびひづよつ・・・

そんな事を考へてみると女性からやつて来た言葉は、

「あなたの中のあるものを対価としていただきます。」

やつされた。

あるもの？

正直、何のことを言われたのかが全然理解できなかつた。

首をかしげていると、

「どうしますか？

今こいつしている間にも、あなたが守りたいと願つものは傷付いていきますよ？」

そう問われたとき、俺に選択の余地はなつた。

「構いません！

それで力が手に入るのなら・・・

俺はそれをあなたに譲りますっ！」

そういつたとき、女性の口元がわずかに緩んだように見えた。

「わかりました。

ではあなたに力を譲りましょう。

あなたの覚悟と引き換えに。」

そういうた瞬間、俺の目の前に夕暮れ以外の道ができた。
それはある方向に向かつて伸びていく道だ。

「あなたは、これから今までと違う道を行ふことになるでしょう。
それをどう捉えるかはあなた次第ですが、今までと違つたものが見えてくるはずです。

良き選択であらんことを・・・

そう言つてその道に剣を向け石像のようになつてしまつた女性。

いつたい、何を対価に払つたのだろうか？
首をかしげながらその剣に導かれた道を進む。

その空はやけに眩しく、その光に目が焼けてしまいそうだった。

～？？？～

「っくー！

わわわと落ちなさいー！」

そう言つて攻撃を行うが見事に回避される。

こちらの第三世代兵器があるで通用しないことに腹が立つた。

「いのつ、次！」

そう言つて構えたとき、ラウラが言葉を発した。

「私があいつの動きを止めよ。

その隙に一人で攻撃を叩き込めー！」

そう言つて福音に向かっていくラウラ。

アイコンタクトでお互いにその後に続く。

ラウラが福音の攻撃をものともせず突進。いつもなら決してしないだらう。

だがそれを行つた。

その行動に報いるためにも決してしくじれない。

ラウラが何とか懐に入る。

あの距離な、ひ・・・

「」これで貴様は・・・」

そつ言つて手をかざすリウカ。

福音の動きが止まる。

よし、これで・・・

急いで福音に迫ったとき、信じられないものを目にした。
体から生えていた翼が動いている。

エネルギー状の翼がラウラを包み込んだのだ。

「うわああああああああああ・・・・・

その中から聞こえてくるリウカの悲鳴。

その翼の監獄を解いたとき、そこから海に向かって落ちてこへり
ラの姿が目にに入った。

「いからつ！」

そう言って急いでラウラの元に向かう筆。

私はその場を動けずにいた。

その圧倒的な力を見てしまったから。

あいつの言つとおりだった。

こんなの、私たちがどうできる粗手じやなかつたんだ・・・

そう思いながら、福音がこじひりに向かってくるのをただ動けずに待つていいしかなかつた。

福音が目の前に。

その翼がラウラのときと同じように動き出す。

さつきのラウラのように翼に包まれ私も落とされるのか・・・

そう思にある言葉を口にした。

「「めんね、一夏・・・」

その瞬間、私の体に力がかかつた。

だがそれは、福音のものではない、別の者の力だった。

「・・・触れんじゃねえ！-！」

その言葉を口にした奴は、福音から私の体を蹴り飛ばしていた。

（春）

そうだ。

俺は逃げてばかりだ。

嫌われるのがいやで逃げ。

傷付ける、傷つけられるのがいやで逃げ。

伸ばした手を扱われるのがいやで逃げ。

いつも逃げてきた。

その行動の悪い結果だけを想像し、そうなるのがいやで何もせず逃げてきた。

俺が汚れているからとか、持とうとしたモノも汚れるとか、そんな言い訳を並べて逃げたんだ。

人は些細なことで離れていく。

それが怖かった。

人が離れていく思いをするのが怖かつたから・・・

だが、今俺の目の前で、あいつが傷付こうとしている。

織斑バカに言った、

『何かを守るためにお前が傷付く。
そんなお前を見たくない・・・』

その言葉が頭に浮かんだ。

大切な奴が傷付くのがいやだ。

そう、あいつが傷付くのが・・・

だけど・・・

そんな風に悩んでいると、急に頭のねじが緩んだのか、悩んでいる
のが馬鹿らしくなった。

俺は何が大事だ?

自分に問いかける。

金だ。

その答えに迷いはない。

それと・・・

その言葉の後にある人物の顔が浮かぶ。

「・・・も大事だ。」

そうだ。

それも俺の大事なものだ。

欲張つてやろううじやねえか・・・

そう思い、体を海面に向ける。

そして一気に海中から空に向かつて動き出した。

この後のことなんか知るかっ！

今まで今後のことを考えて動いていた春が、初めてこの後に起ころうことを考えるのをやめた。

それは春にとって良い選択だったのか、悪い選択だったのか。
答えが出るのはこの戦いの後である。

福音があいつを包み込もうとした光景を見たとき、まず思ったのは
あいつを福音から放すこと。

そのための手段を選んでいる時間なんてなかつた。

ラグーンの力で加速した速度のまま、蹴りをあいつに叩き込んだ。

「そいつに・・・

触れんじゃねえ！－！」

やつはつい俺は守りたいはずのものに見事に蹴りを放つた。

その威力は見事なもので、一気に福音との距離を空けることができた。

後が怖いな・・・

そんな事を考へていると、奴の翼が俺を包み込んだ。

「~~~~~っ……」

ラグーンを取り外していなかつたのでシールドが動かず、とんでもなく痛い思いをさせられる。

急いでラグーンを取り外す。

その間およそ1秒。

その短時間で俺の体は所々から香ばしい匂いを漂わせていた。

「てめえ・・・
誰に手エあげようとしてたか・・・
わかつてんだろ?うなあ・・・?」

シールドエネルギーがどんどん奪われていく中、そのままながら福音との距離を詰めていく。

「他の奴らはどうもいいが・・・
あいつにはなあ・・・」

そう言つて福音の体を掴む距離までたどり着く。
シールドエネルギーはもう200を切った。

「手出せやねー！」

そう言って福音の体を掴んだ

聞きとりきれないような言葉で触れられたことに対し不快感をあらわにする。

「ハハハツ！」

氣にしらねたが

同情するぜ。

論語卷第十一

「」の翼籠は『地

でねエと・・・

「マジで食われるか？」

そう言つたとき、エネルギーは100を切つた。

くれてやるぜッ！

その時トウーハンドの砂嵐のように荒れる画面にはあの言葉が表示されていた。

【男のロマ】

その起動確認の画面だった。

俺はそれを迷わず承認した。

月まで吹っ飛びなつ！

そう思った瞬間、その翼籠とりかごは鮮やかな色を変え、赤と黒の混ざった物となり、次の瞬間、それは弾け飛んだ。

そして、俺の意識はここでブギーマンに襲われた。

自覚と覚悟（後書き）

これで・・・
ストックが・・・
ゼロに・・・

と言つことで、次回投稿まで少々お休みをいただきます。
次回更新は来月頭を予定しています。
投稿時間に変更はありません。

その間

私の存在を忘れないっ！

と言つ読者の皆様、また次回の更新でお会いしましょう。

新たな道の始まり（前書き）

お久しぶりです。
ひ です。

ここから新しい章に入ります。
ではどうぞ。

新章になります。

ではお付き合いください。

新たな道の始まり

それは走馬灯の様に俺の頭を駆け巡つていった。

時は2年ほど遡る。

世界初の男の操縦者になった『吉田 春』から、現在の『吉田 春』にいたるまでに過ごした記憶である。

今俺はどでかい研究所の中にいる。

あの社会見学でやつてしまつたことが原因だ。

しかしました・・・

「でつけえ～なあ～。」

そう言つて周りを見渡す。

ここは直径1kmはあるつかと言う巨大なドーム。
天井まではどれだけあるんだ？

そんな事を考えながらこの広いアリーナで待つていると、

「どうも、君が異例の実験動物かい？」
テストバイロット

そう言つて、ダルそうにこつちに歩み寄つてくる金髪の外人。
初めて見た、本物のパツキンの外人。

ちょっと感動していると、もう一人やつてきた。

「ベニー、ちゃんと挨拶しないと。」

そう言つて金髪の外人に注意を入れる。

日本人だ。

それも、完全にサラリーマンの手本のような格好でやつてきたその
人が言葉を続けた。

「初めまして。

僕らが君の担当。

ここでの世話と、データ、および機体の調整を行つことになった、

僕が岡島緑郎。

そしてこいつちが……」

自己紹介を振つていてるその相手は……
もうそこにはいない。

「えつ?

あつ、ちょつ……

ベーーつ!?

ああ～～～、またこれだ……」

そつ言つて頭を下げ現状にがっかりしている。

肩を落とし、がっかりしていた人に声をかける。

「えつと、大体わかりました。

あなたが岡島さんで、さつきの人ベーーさん、でいいんですね?」

そう問い合わせると、

「ああ……

ごめんね。

彼ちょっと変わってるから取つ付きにくい所あるかもしねないけど、
根は良い奴なんだ。

僕は気に入られてるけど、他の人みんなそういうわけじゃないみたい
いでね……

ちょっと人付き合いが苦手みたいなんだ。」

「

そつとつて外人のフォローをする岡島さん。

『どうやらいい人そうだ。』

いきなりなれない環境に放り込まれて、不安はあつたがこういう人が近くにいてくれるなら何とかやっていけそうだ。

その日は施設の案内で終わり、明日から実際にTTSを使っての実験になるそうだ。

明日のことでの頭が一杯になる。

俺が動かしたらみんなどんな顔するかな？

そんな事を考えながらここで始まる新しい生活に胸を躍らせた。

これから特別なことがきっと起こる。

いや、俺が起こすんだ！

何故なら俺は世界で最初にTTSを動かした『男』

『吉田 春』なんだから。

そう、この時はまだ俺は現実も何も知らないただのガキだった。

勝手な理想を持ち、まるで自分が世界の主役になつたかのように思えた。

そんなこと思わなければ今の俺はもう少し違つたのかもしれない・・

記憶はそりて俺を通り過ぎていく・・

新たな道の始まり（後書き）

今の春を作り上げたものに入ります。

頭がパンクしそうです。

文章作るの・・・
難しいです・・・

ただ、楽しい点が一つ。

真っ白な画用紙に墨汁をたらして黒く染めていく。

最高です。

現実

（翌日）

朝の6時に起^レされ、準備をし、6時30分には昨日のダームへ。

ひょっとして毎日^レれなの？

何？

そんな不安を抱えながら一日が始まる。

そこにはすでにHISが用意されていた。

その周りには何人もの大人がそのHISを囲んでいる。

ラファール・リヴィア イブ

この機体を動かすのか・・・

そんなこと思つていると、昨日になくなつたベー^レさん？がやつてきた。

「ええ・・・

じゃあ、とりあえず動かして・・・」

田もあわせずそれだけ言つて再び離れていった。

今、言いにくる必要あつたか？

若干その態度にいらつきながらHISに触れ起動させた。

「　「　「　「　おおおおおお～～～～～～」

周りの反応が心地よかつた。

世界で、唯一男でHISが動かせるのだ。
その優越感はとんでもないものだつた。

周りが驚いている中、ベニーさん？が、

「じゃあ、とりあえず歩いて。」

そう言われたので歩こうとした。

いや、周りを驚かせようと走ろうとしたのだ。

それを見たら周りはもつと驚くだらう。

そんな事を考えていたが、現実は冷酷な鎌をすべて俺の首に振り下ろした。

あれ・・・？

走らない。

それどころか、全く体が動かなかつた。

最初は周囲も俺がいつ動き出すのかを楽しみにしていたようだが、俺が数分もじつとしていることがおかしく思えるようになつたらしい。

その顔がやけに不安の混じつたものになる。

「えつ・・・と、」れ動くんですよね？」

そう言つて間抜けな確認をするべ、ベニーさんは視線を合わせはしないが質問に答えた。

「当然。

まさか、起動はできても行動に移せないなんてことないよね？」

そつ言つて俺の現状をぱり言ひ当てた。

「・・・その・・・」

そういうったときの周囲の表情はさつきまで俺を見ていたものとは違つた。

それはまるで床に落ちている「金」を見るのと変わらない田だつた。

金の卵を産む鶏。

そう言われて買つた鶏だが、その鶏が卵を産まないとわかつたとき、
飼い主はその鶏に餌を与えるだらうか？

その日は結局一歩も歩くことなく俺はそのドームを後にした。

起動はできても俺は動かせなかつたのだ。

岡島さんが、田を変えて再度実行しようと書いて今日の起動実験は終了したが、俺にはすでに昨日までの夢にあふれた現実はなく、冷酷な現実しかなかつた。

重たくなつた体を引きずり、自分の部屋に戻つた。
非情な現実を受け入れられないままでいたのだ。

TVとかではロボットを動かせる少年は誰もが天才で、その働きで世界を変えて見せる。

自分にもそんなことができるんだ。

そんな事を考えていた自分を殺してやつたくなるほど今日の出来事はつらかつた。

それから数日、俺は誰とも言葉を交わすことなく部屋で一人うずくまつて日々を過ごした。

「なあ、どうするよ？」

聞こえた。

そんな事を考えて廊下を歩いていたとき、曲がり角の先で人の声が

今日、世界が終われば良いのに・・・

嫌だが無理やり応じさせられた。

前回の失敗から立ち直れていないのでから。
だが俺の仕事なのだ。

当然だ。

再び起動実験の日がやつてきた。
正直気が乗らなかつた。

数日後

今日も動かせなかつたら彼、正直ただのお飾りだぜ?」

「やんときやアレだ。

「若狭さんでした、つて家に帰すんだろ?」

そつか・・・

俺はただの少年に戻るのか・・・

そんな事を考へていろと、

「いや、それがよお、じつにむかうこかないなこらしへんな・・・

は?

何を言つていののかわからなかつた。

どいつことだ?

「いかねえ、つてじつことだよ?」

「なんかよお、親が引き取りを拒否したりしげ?」

「じつことだよ?」

俺も聞きたい。

一体じつことだ?

「」の前景山部長が専務と話してんのたまたま聞いたんだよ。

前の失敗のこと聞いてどうするかつて話してたのを。

親元に返すかつてなつて、総務課に連絡させたら、

『あんなこ、うちの子じやありません』

だつてよ。

薄情な親もいたもんだ。

まあ、ISが動かせる男なんて普通じゃないから、やうに「リニアクションもあるのかも知れねえけどよ・・・施設がお飾りで研究所においとくか、そのどっちかになるらじいぜ？」

「施設ねえ・・・

薄情な親もいたもんだ。

自分の子供じやねえってか。

俺はそんな親になりたくないねえ・・・」

「その前にてめえは彼女作ることからだらうが（笑）」

「うせえ（笑）」

そんな軽口を叩きながらその声は遠くなつていった。

嘘だろ・・・

信じられなかつた。

自分の子供を捨てていつた親が。

それを笑つていられる人たちが。

この世界はどうなつてゐる?

そんな事を考へていぬし、体がどんどんおかしくなつていく。

息が吸えない。

声が出ない。

手足がしびれて動けない。

頭が働かない。

「このまま死ぬんじゃないか・・・

廊下に倒れこんだ俺に誰も気付かないまままだ時間だけが過ぎていく。

死ぬほど苦しい俺を世界は救つてはくれない。
この世には夢も希望もない。

神なんて奴もないんだ・・・

そんな俺を救つたのが、偶然通りかかった一度も視線すら合わせなかつたあの人物だった。

眞実

気が付くと視界に入ってきたのはとんでもない量の物。

本にCD、パソコンに・・・

他にも何があるようだが頭が働かなかつたのでよくわからなかつた。

ただ、薄暗い部屋だ。

だがそんな部屋でうつすらと明るく音を立ててている場所があつた。

カタカタカタカタッ・・・・・

静かな部屋にその音だけが響いている。

痺れがとれていない体でその音がする方に体を動かす。

だが、足がもつれ・・・

ガタバタグシャパリメキッ・・・

様々な擬音を立てて俺は倒れこんだ。

再び目を開けば今度は見たことのある顔が俺の目の前にあった。

「・・・ヒ、ベーー・・・さん？」

疑問文で言葉を発すると、

「目が覚めたなら出てってくれるかい？
ここは僕のプライベートな空間なんだ。
本当ならここに他人を入れたくないんだ。」

そう言って俺に背中を向ける。

「あのつ・・・
えつと・・・」

何か言葉を探すが出てこない。

そんな時再びさつときと同じ症状が俺を襲う。

呼吸がおかしい。

息ができない。

手足がしびれ始める。

なんなんだよ・・・

そんな事を考えていたとき、俺に『えられたものがあった。

それは小さな紙袋だった。

その紙袋を口に当たられ、しばらぐじかとこむとやうと頭が少し動き始める。

どうやら俺はこの人に助けられた？ ようだ。

「あのつ・・・

そう言って出てきたのは謝罪の言葉。

そういう相手は俺から離れていい、返事を返してはくれない。

少し時間を置いたが現状に変化がないようなのでこの部屋を出よう。

「…………」迷惑おかげしました。」

もう幅ひで端廻を弄ねりつた。

「…どこへ行くんだい？」

そう言って言葉をかけられた。

11

自分でも間抜けな返事をしたものだと思う。

だが予想外の言葉に出でてしまったものはじょづがない。

「どうへって、自分の部屋に・・・」

そういうつた時パソコンを触りながら残酷な一言を俺に向かつて撃つてきた。

「自分の部屋？」

研究所に仕事のできない人間に部屋は割り振られていないよ。」

そう言われた時先日の事が頭を過ぎり、またしてもさつきの症状が。

だが今度はさつきにえられた紙袋がある。

それをとつせに口にあて症状が治まるのを待つ。

だが、その間にも現実は俺を襲つ。

「前回の実験で君の適性を一緒に図つたけど、こだ。はつきり言おう。

これは決して優れた評価ではない。
むしろ最低だ。」

俺の心に土足で上がりこんでくるような言葉を言い放つてきた。

「でも動かせないわけじゃない。
女性の中にも適正がない人もいる。
その人たちよりは優れている。」

ん？

今のはフォローなのか？

考へてゐるとい、言葉は続けられた。

「現実は厳しいだろ?」

その一言が見事に今の俺を打ち抜いた。

完全に見透かされていた。

今の俺の現状を。

何か言い返したかったが何も言葉が出せない。

その間にも相手からの言葉は続く。

「現実なんてこんなもんだよ。
綺麗なものなんて一つもない。
全部薄汚れ、酷い所は便器より汚い。
それが僕達が生きている世界だよ。」

そう言つてパソコンを触るのをやめ、こいつらを見た。

そのとき初めてこの男、ベニーセンと田が会つた。

その瞳はこの薄暗い部屋のせいかひどく暗く見えた。

教え（前書き）

お久しぶり？になるんでしょうか？
い です。

近況報告です。

事故にありました。

はねられました。

左手以外は骨折です。

パソコンの故障から始まり、現在に至りますが、お払いいった方が
良いでしょうか？

気が付いたのが一昨日なので正直体内時計の日数が合いません。

更新が遅れたこと申し訳ありませんが、今回の更新でストックがつ
きます。

右手がまともに動く間に更新させていただきます。

お気に入り登録してくれている方々、並びにこれを呼んでくれ
てこる皆様にお詫び申し上げます。

教え

醜いアヒルの子。

出るくいは打たれる。

周つとは違つものがひどい目に合ひついでいる意味でこの言葉に近い。

世界は平等を望み、『特別』を必要としない。

これが現在の世界の常識である。

「こつてこる意味が分かるかい？」

いつも言つて問い合わせてくるベニーさん。

「えっ・・・

何がですか？」

言つてこいるとの意味が理解できなかつた。

突然そんなこと言われてもその言葉の意味を全て理解することなど
その当時の俺にはできなかつた。

「はあ・・・

これだから理解力の低い奴は嫌いなんだ・・・
いいかい？

僕の言つ言葉がこの世界の真実さ。

よく聞いておくといい。

この世の中、『特別』はいく一部を除いて必要とされていないんだ
よ。

その言葉を聞いてもなお、深く理解ができなかつた。

特別が悪いことなのだろうか？

自分の中で答えを出そうとしていたとき、言葉が続けられた。

「君のその症状、原因は何だと思ひへ？」

自分が今困つてこる症状の原因？

そんなものわかつたら苦労はしない。

「あの・・・
わかりません・・・」

そう言つて視線を伏せる。

「だらうね。
答えが欲しいかい?」

もちろんだ。

「はい。」

そう応えたと同時に答えがやつてきた。

「外的要因から受ける過度なストレス。
それが今君が脅かされている症状の正体だ。」

そう言つてタバコに口をつけたベニーさん。

「・・・それは一体どういったものなんですか?」

そこまで言われても全く症状の正体が見えてこなかつた。

「・・・はあ・・・
面倒だな・・・」

そう言つてタバコを口にするベニーさん。

そして息を吐くと同時に俺の症状の正体を明かした。

「簡単なことだよ。

過呼吸。

言葉にするのは簡単で、實際になるととてもなく苦しみられる症状の一つだ。

君も体験しただらう？

そう言って紙袋を插差すベニーさん。

そつか・・・

さつきの症状が・・・

彼の言ひ症状なら・・・

「そのストレス、どうしたら排除できます？」

自分が受けている影響を根底から排除する。

中学生のできる発想を飛び越えた問いに驚きながら、ベニーさんは応えてくれた。

「・・・根底から取り除くつむづかい？」

その表情は俺が無理難題を言ひてするのが理解できているから見せている表情だ。

「もちろん。

俺は・・・

世界で最初に・・・

言葉を続けようとしたとき、先手を取られた。

「世界で最初にEJSを動かした男かい？」

その言葉を発した人物は俺を静かに見据えていた。

「・・・」

言葉が発せなかつた。

その瞳に、
彼が放つ空氣に飲まれた。

何を言つても俺の言葉は力を持たないだろ？

本能的にそう感じた。

「僕が言つた言葉の意味が理解できなかつたのかな?
今の世界で特別は必要ないんだ。
大人しく世界の歯車になることを進めるけど？」

そう言つて俺に自室の椅子の一つを勧めてくるベニーさん。

だがそんなものは・・・

「お断りです。」

そう言つて部屋を出ようととしたとき、

「上出来だ！！」

そう言って俺の行動を制した人物の方向を見る。

「君に簡単に世界を生き抜く方法を教えよう。」

そういうふた人物はさつきまでとは違つた表情で俺を見据えていた。
そこから発せられる言葉をそのまま鵜呑みにしてしまつた時点で、
俺の人生は狂い始めたわけだが、今更どうこうなるものでもないだ
らう。

教えられた言葉をその身に宿し、新たな人生の一歩を歩み始める『
吉田春』の歩みを止めるものはいなかつた。

このとき誰かが止めていればスタートラインは違つたのだろう。

映画（漫畫映）

左手で打つとおつか。退院するのには何利もしないでござんないでしょつか？

でせじいわ。

この世界を生き抜くすべを伝授され、自分の部屋のベッドに横になる。

あんなので良いんだろうつか・・・

伝授された方法に疑問を持ちながら、延期された明日の起動実験に備えて眠ることにした。

早朝、朝早くから起こされ、起動実験に借り出される。
めんどくさい・・・

本音を言えばこれが全てだ。

そのまま今日と明後日は始まる。

ドームに着くとそこには先日いた面子以外に数人違う顔があった。

ベニーさんが教えてくれたことを思い出す。

「次の起動実験、成功しなかつたら君は確実に施設送りだろ? おそらくは君を捕らえる為にドームに人員が配備されるだろうから、この間とは違う顔があると思うよ。」

そのとおりになつたことに驚きはしたが、俺のやることに変わりはない。

IRSを起動させ、動かす。

それ以外に考える必要はない。

この心構えを教えてくれたのもベニーさんだ。

「いいかい?

最初に重要なのは期待しないことだ。」

そう俺に言つてあつさりと視線をパソコンにむきなおした。

「期待するから失望し、それのせいで傷付くんだ。」

だつたら、最初から期待しないことだ。
他人にも、自分にもね。

それだけで世の中の半分は軽く感じる。」

そういうわれたとき、先日の実験の光景が頭に映し出された。

俺は自分にできる」とも考えず、ただ妄想の中で成功した姿を想像していた。

失敗などするはずがないと。

その結果がこれだ。

その言葉がとてつもなく正論に感じた。

IISを身に纏い、ただ何も考えないでその体を動かす。

ゆつくりと。

静かに・・・

「 ウイイイ・・・

静かな機械の稼動音。

それが示すものは・・・

I Sが足を動かした。

そのまま一歩田を踏みしめる。

正直うれしかった。

動かせたことが。

俺がここにいる意味があつたことが。

だが、言われたことを思い返す。

「 調子に乗ると失敗する。」

それが人間だ。

いいかい？

もしだ。

もし仮に動かせたとしよう。

そのときに浮かれちゃいけない。

そのまま自分を冷静に見ることができなければこの前の一の舞だ。

何も考えず、一歩動ぐごとに諭吉がもらえると思うんだ。

君がこれから先生きていくにはどうがんばっても必要なものだ。

それを得るための作業、手段だと考えることだ。

そう考えれば自分がさめて見れるはずだ。」

その言葉にはさすがに抵抗があった。

「諭吉つて・・・

おれは・・・」

反論しようと思つたが、

「いいかい？

今君の置かれている現状はこの国の同世代の中では恵まれていいのうだと理解する。

親が見離して、一人だとしてもそれを補つて余りあるものが君にはある。

この世でただ一人、ISUを動かすことのできるところアドバンテージを生かすんだ。

そして、それを生かして稼ぐ。

それがこれから生きていく上で最も重要なポイントになると理解するんだ。」

言われたことを思い出し、浮かれそうな気分を押し殺し、歩田を踏み出しつゝ、無事に地面を踏みつける。

周りの顔は、やっと作動させたかと、安堵の表情を浮かべる。

そのまま少し歩き続け、EISを停止させた。

EISから降り、地面を自分の足で踏んだとき、わずかに違和感があったがこれが普通なんだと納得しそのまま足を研究者達の下に進める。

「凄いじゃないか。

この前とは別人のようだよ。」

そうつ言って俺に近づき、肩を叩こうとした人物の手を俺は・・・

パシッ

弾いた。

そしてそのまま言葉を続けた。

「くせえんだよ。

イカくせえ手で俺に触んなよ・・・」

その目は完全に俺に触れようとした人物を拒絶するものであり、その言動は完全に敵意を相手にぶつけるものでしかなかつた。

実践（後書き）

この次の更新のめどが立っていないのが申し訳ありませんが、気長にお待ちください。

こんな態度のとり方を教えてくれた人物はもつぱりまでもないだろ
う。

「あとは・・・やつだな〜・・・」

そう言ってパソコンに向かうのをやめ、椅子をぐるぐると回し、自
分も一緒に回しながら俺に何を伝えるのかを考える。

「ああ！」

そうだ。

これは重要だ。

教科書が合つたら赤くマークしておいて欲しいぐらうにね。」

そう言って椅子を止め、俺に向かって身を乗り出してきた。

「な、なんでしょうか？」

いきなりのアクションに正直驚きながらその続きを聞いた。

「相手を決して自分より上だと思わないこと。

これは重要なことだ。

そして、基本的に回り全てのものを必要としないこと。

近づく人も基本は払いのけるぐらうの気持ちで良いんじゃないかな

？」

「は？」

正直何を言つてこののかわからなかつた。

セイジまで俺はえりへないと思つただが……

そんな事を思いながらベニーさんの言葉を聞く。

「リリで新しく研究する」とがどちらとこいつも全では、君あつて
のものだとこいつだよ。
だから、君が一番偉い。

それぐらいの氣でこたまつが氣を使わなくてすむ。
だから僕のこともベニーやん、じやなくて、ベニーでこいつ。
僕は君の事を……

ヨツシー？

違うな……

クッパ？

関係なくなつてゐる……

ルイージ？

縁から離れる……こや監管工から離れり……

うへん……」

言つたことを言つて勝手に恼み始めたベニーやん、いや、違つた。
ベニーは俺をおこして勝手に思考の旅に出てしまつた。

いつのまにか部屋に戻ることや。

「おひやあしました……」

そう言つてこの部屋を後にした。

自室に戻つて考へる。

周りに氣を使わず・・・

払いのければ・・・

俺は傷付かなくてすむ・・・

もうあんな苦しい思いをするのは止めなんだ。

そのためには言られたことを・・・

復讐していく中で氣になつたことが一つ。

偉やうつて、どうすればいいんだ?

横柄な態度?

言葉遣い?

馬鹿にすれば良いのか?

答えがなかなかでないので、とつあえずその時の勢いでどうにかしよう。

そう想つて俺は眠つてついた。

そして、とつとひとつ行動がこれだった。

やつすきじゃないか？

自分で中で自分のとつた行動に問いかけるが、今からフォローなんてできるわけもない。

近寄ってきた研究者達を無視して真直ぐベニーの元へ。

歩きながら実は足が震えていることに気付かれるんじゃないかと不安になりながら昨日俺にいろいろ教えてくれた先生の下に逃げ込んだ。

「ベニー、これで充分か？」

そう問い合わせると、昨日のことがなかったかのように、視線を合わせることもなく、

「ああ・・・
もつ後何セツトかやつてくれるかい？
もっと稼動中のデータが欲しい。」

「わかった。」

そう言って再びHISに近づき、その途中にいた研究者達は黙つて俺に道を明けた。

さつきのように声をかけようとする者もなく、俺はゆっくりと落ち着いてHISを身に纏う。

この態度、慣れるまでは大変かもな・・・

そんな事を思いながら新しい自分の始まりをHISと同じように踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9997t/>

IS インフィニットストラトス 現をいくもの

2011年10月5日22時06分発行